
2019年度

シラバス

免許及び資格課程



秋学期は配布しません。1年間必ず保管すること。

獨協大学

シラバスは、科目の担当教員が学期ごとの授業計画、講義概要、評価方法などを学生に周知することにより、受講する際の指針とし、授業の理解を深めることを目的に作成されたものです。

シラバスをよく読んで、計画的な履修登録をしてください。

【シラバスの見方】

1. 目次について

①シラバスページの検索方法

科目の授業内容は、目次で検索してください。

目次の科目は、各課程別の授業科目表(学則別表)と同じ順序で掲載しています。

曜日時限・教室も記載されていますが、変更になる場合があるので、教務課前掲示板で確認してください。

※入学年度によっては授業科目表とシラバスの順序が一致していない場合がありますので、注意してください。

②目次の「備考」の表記

〈略称説明〉

外： 外国語学部	養： 国際教養学部	経： 経済学部	法： 法学部
独： ドイツ語学科		済： 経済学科	律： 法律学科
英： 英語学科		営： 経営学科	国： 国際関係法学科
仏： フランス語学科		環： 国際環境経済学科	総： 総合政策学科
交： 交流文化学科			

③履修開始学年・学期

目次の「学年-学期」欄に記載されています。

2. シラバスページの見方(右図参照)

①入学年度

03年度以降・・・2003～2019年度入学者

10年度以降・・・2010～2019年度入学者

12年度以降・・・2012～2019年度入学者

13年度以降・・・2013～2019年度入学者

18年度以前・・・2018年度以前入学者

②入学年度に対応した科目名

③授業の目的や講義全体の説明、学生への要望

④学期の授業計画

各回ごとの講義のテーマ、内容を記載しています。

授業計画回数と実際の回数は必ずしも一致しません。

⑤到達目標

⑥事前・事後学修の内容

⑦授業で使用するテキスト

⑧参考文献

⑨評価方法

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
春学期		
到達目標	⑤	
事前・事後学修の内容	⑥	
テキスト	⑦	
参考文献	⑧	
評価方法	⑨	

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
秋学期		
到達目標	⑤	
事前・事後学修の内容	⑥	
テキスト	⑦	
参考文献	⑧	
評価方法	⑨	

3. 注意事項

①履修科目

入学年度や学部学科により、履修する科目及び科目名が異なります。

免許及び資格課程科目の履修に際しては、「履修の手引(免許及び資格課程)」で履修科目を確認してください。

②定員

定員を設けている科目があります。定員および備考欄を確認してください。

備考欄に「抽選」と記載されている科目は、抽選結果を必ず確認してください。

③時間割コード・教室

履修上の注意点については、時間割冊子にまとめられていますので、確認してください。

免許及び資格課程科目については、時間割コード・教室もシラバス冊子目次に掲載されています。

教職・司書相談室について

獨協大学では、教職・司書・司書教諭課程履修者をサポートするため、教職・司書相談室（中央棟1階）を開設しています。

ここには教職、司書、司書教諭課程に関する資料や教科書・参考書が用意されています。開室時間内は自由に閲覧できます。

また、同課程履修者を主たる対象に、専門家である教員が個別面談に応じています。教員という仕事、気になる教育実習や教員採用試験、図書館で働くにはどうすれば良いか、など気になることを質問できます。もちろん、教職、司書、司書教諭課程を登録・履修するか迷っている学生も質問可能です。学科・学年を問わず広く開放されており、事前の予約は必要ありませんので、適宜利用してください。

なお、履修登録の方法や成績通知、教育実習の前提条件などの履修に関する質問は、教務課免許課程係（東棟1階）にご相談ください。

○開室時間：月～金 9：00～17：00
土 9：00～13：00

○場 所：中央棟1階

○個別相談：春学期 2019年4月6日（土）～2019年7月22日（月）
秋学期 2019年9月24日（火）～2020年1月20日（月）
及び2020年1月25日（土）

課程	曜日	相談時間 ※終了15分前までに入室のこと。	担当教員
教職	月	11：30～13：10	浅岡 千利世
	火	11：30～13：10	桑原 憲一
	水	11：30～13：10	岩崎 充益
	木	11：30～13：10	安井 一郎
	金	11：30～13：10	小島 優生
	土	11：30～13：10	及川 良一
司書・司書教諭	火	11：30～13：10	福田 求

注) 担当教員の都合により、休講になる場合があります。相談室入口の掲示で確認してください。

2019年度 免許及び資格課程 年間行事予定表

凡例【教職】:教職課程、【介護】:介護等体験、【教実】:教育実習、【司書】:司書課程、【司教】:司書教諭

No.	区分	行事	対象	日付	時間	教室、備考等	
1 学年	【教職】	教職課程ガイダンス	外国語学部 国際教養外部	4月3日(水)	12:30～13:30	E-102:外国語学部・国際教養学部 「免許課程シラバス」配付。	
	【司書】 【司教】	司書・司書教諭課程ガイダンス (概要説明)	経済学部 法律学科	4月3日(水)	13:45～14:45	E-102:経済学部・法律学科 免許課程シラバス」配付。	
	【教職】	教職課程登録(課程費納付)	登録希望者のみ	4月3日(水)～10日(水)	12:00～12:25	E-102、昼食持込可。 司書・司書教諭課程を始めようと考えている学生に概要を説明する。 証明書自動発行機で納付。申請書は提出不要。	
	【教職】	「教職課程ファイル」配付	教職課程登録者	「教職論」授業時	9:00～17:00	担当教員から配付日ご連絡。 履修していない場合は、配付方法を教務課免許課程掲示板で確認。	
2 学年	【司書】	司書課程ガイダンス (履修手続き)	全学部	3月29日(金)	11:15～12:15	E-101、「履修の手引」持参のこと。 2019年度の履修方法等について説明する。	
	【教職】 【司教】	教職課程・司書教諭課程ガイダンス	全学部	3月29日(金)	12:30～13:30	E-101、「教職課程ファイル」持参のこと。 「免許課程シラバス」配付。	
	【教職】 【司教】 【司書】	教職課程、司書教諭課程、 司書課程登録(課程費納付)	新規登録希望者のみ	各学期履修登録期間の指定日まで		証明書自動発行機で各課程費を納付。 詳細は、各学期履修相談の初日に免許課程掲示板に掲載。	
	【司書】 【司教】	司書・司書教諭課程ガイダンス (概要説明)	全学部	4月3日(水)	12:00～12:25	E-102、昼食持込可。 司書・司書教諭課程を始めようと考えている学生に概要を説明する。	
	【介護】	介護等体験申込ガイダンス	介護等体験申込ガイダンス	2020年度体験予定者	10月18日(火) 10月10日(木)	12:45～13:30	E-205、昼食持込可。いずれかにか出席のこと。 欠席した場合は2019年度の実習不可。
				2020年度体験予定者	10月9日(水) ～31日(木)	9:00～17:00 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。
	【司書】	司書課程ガイダンス (履修手続き)	司書課程ガイダンス	2020年度体験予定者	10月上旬～11月上旬(予定)		証明書自動発行機で納付。申請書は検査日当日に保健センターに提出。 (詳細は、大学ニュース10月号「保健センター」の項参照)
				2020年度体験予定者	12月2日(月) ～12月下旬	9:00～17:00 土のみ12:00まで	必要書類を教務課免許課程係に提出。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
	3 学年	【司書】	司書課程ガイダンス (履修手続き)	全学部	3月29日(金)	11:15～12:15	E-101、「履修の手引」成績通知表について説明する。 2019年度の履修方法等について説明する。
		【教職】 【司教】 【介護】	教職課程・司書教諭課程ガイダンス (介護等体験(2日間)関連説明、教員採用試 験に向けてを含む)	全学部	3月29日(金)	15:00～16:30	E-101、「教職課程ファイル」持参のこと。 「教育実習の指針」免許課程シラバス配付。 介護等体験(2日間)関連資料配付。
		【教職】 【司教】 【司書】	教職課程、司書教諭課程、 司書課程登録(課程費納付)	新規登録希望者のみ	各学期履修登録期間の指定日まで		証明書自動発行機で各課程費を納付。 詳細は、各学期履修相談の初日に免許課程掲示板に掲載。
		【司書】 【司教】	司書・司書教諭課程ガイダンス (概要説明)	全学部	4月3日(水)	12:00～12:25	E-102、昼食持込可。 司書・司書教諭課程を始めようと考えている学生に概要を説明する。
3 学年	【介護】	介護等体験(2日間)申込み	2019年度体験予定者	3月下旬～4月上旬	履修相談受付時間	必要書類を教務課免許課程係提出箱に提出。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。	
			2019年度体験予定者	4月16日(火) 4月18日(木)	12:45～13:30	E-205、スーツ着用、昼食持込可。いずれかにか出席のこと。 欠席した場合は2019年度の実習不可。	
	【介護】	介護等体験開始ガイダンス	2019年5月～7月 介護体験予定者	5月7日(火)	12:45～13:30	E-205、昼食持込可	
			2019年8月～10月 介護体験予定者	7月2日(火)	12:45～13:30	E-205、昼食持込可	
		2019年11月以降 介護体験予定者	10月8日(火)	12:45～13:30	E-205、昼食持込可		

22	教育実習校開拓	2020年度教育実習予定者	教職課程ガイダンス以降速やかに	各自が自主的に実習校を開拓(遅くとも4月中に開拓を開始すること)
23	「教育実習依頼状交付願」 「教育実習者登録票」 「麻疹・風疹抗体検査結果」提出	2020年度教育実習予定者	5月6日(月)以降開拓 できた者から随時	必要書類を教務課免許課程係に提出。 (英語学科・交流文化学科・言語文化学科の学生で、実習教科が「英語」の場合は、英語資格の要件を満たしていること)
24	「教育実習依頼状」交付	2020年度教育実習予定者	5月20日(月)以降	教務課免許課程係で受取。 交付は提出週の翌々週(月)以降。
25	「教育実習依頼状」を実習校に持参 (正式依頼)	2020年度教育実習予定者	5月20日(月)以降随時	速やかに実習校に提出すること。
26	教育実習校(中学校)幹旋願提出 (開拓不調者)	2020年度教育実習予定者	9月24日(火) ～10月4日(金)	必要書類を教務課免許課程係に提出。
27	教育実習校(中学校)幹旋者 選考試験	2020年度教育実習予定者	10月11日(金)	教職・司書相談室(中央棟1階) 出願者多数の場合は一部別日程にて行う。
28	麻疹・風疹抗体検査申込手続	2020年度教育実習予定者 (前年度抗体検査未提出者)	10月上旬～11月上旬(予定)	証明書自動発行機で納付。申請書は検査日当日に保健センターに提出。 (詳細は、大学ニュース10月号「保健センター」の項参照)
29	教育実習指導全体講義	教育実習指導履修者	10月～12月(不定期に実施)	指定日の水曜日5時間目に全体講義へ出席する。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
30	風疹・麻疹抗体検査提出期限	2020年度教育実習予定者 (前年度抗体検査未提出者)	9:00～17:00 土のみ12:00まで	抗体検査結果を確認し、抗体がある場合は、検査結果用紙のコピーを教務課免許課程係に提出。抗体がない場合は、予防(ワクチン)接種の上、抗体検査結果用紙と予防接種を受けたことが分かる書類の写しを教務課免許課程係に提出。
31	教職課程・司書教諭課程ガイダンス	2019年度教育実習を 行わない者	3月29日(金)	E-101、「教職課程ファイル」・「教育実習の指針」を持参のこと。 「免許課程シラバス」配付。 ガイダンス終了後、介護等体験(2日間)関連説明・資料配付。
32	教職課程・司書教諭課程ガイダンス	2019年度教育実習予定者	3月29日(金)	E-101、「教職課程ファイル」・「教育実習の指針」持参のこと。 「教育実習日誌」・「免許課程シラバス」配付。 ガイダンス終了後、介護等体験を実施する学生は介護等体験(2日間)関連説明・資料配付も併せて行う。
33	教育実習オリエンテーション	2019年度教育実習予定者	3月30日(土)	「教育実習日誌」・「オリエンテーション」のページ参照。
34	教育実習期間報告書の提出	2019年度教育実習予定者	4月11日(木)まで	教務課免許課程係に提出。
35	教育実習校との打合せ	2019年度教育実習予定者	実習開始2～3週間前	各自実習校に確認。
36	教育実習指導教員発表	2019年度教育実習予定者	5月7日(火)	教務課免許課程係掲示板で確認。実習直前の者は窓口にて確認。
37	「教育実習訪問指導教員事前面談用紙」 提出	2019年度教育実習予定者 (該当者のみ)	各自の教育実習開始7日前まで	訪問指導教員と訪問指導日程等を打合せし、 指定用紙を教務課免許課程係に提出。
38	教育実習事前指導面接	2019年度教育実習予定者	各自の教育実習 開始7日前まで	教職・司書相談室(中央棟1階)※授業期間中のみ開室 5～6月は面接予定者が多いため、早めに事前指導面接を受け、実習に備えること。
39	教育実習(中学校または高等学校)	2019年度教育実習予定者	11:30～13:10	
40	教育実習日誌提出	2019年度教育実習予定者	期日・提出方法は、「教職実践演習(中・高)」の授業内及び教務課免許課程係掲示板で指示する。	
41	教育職員採用試験面接対策講座	教育職員採用試験 受験希望者	8月上旬(予定)	日程が決定次第、教務課免許課程係掲示板で告知する。
42	教育職員免許状一括申請説明会 (書類配付)	全学部	10月3日(木)	E-205、昼食持込可。
43	教育職員免許状一括申請受付 (手数料納付・書類提出)	全学部	10月4日(金)～31日(木)	必要書類を揃え、教務課免許課程係に提出。
44	教職実践演習(中・高)全体講義	教職実践演習(中・高) 履修者	10月～12月(不定期に実施)	指定日の水曜日4時間目に全体講義へ出席する。 詳細は教務課免許課程係掲示板で確認。
45	教職課程・司書教諭課程修了者発表 司書課程修了者発表	全学部	2020年3月4日(水)	大学掲示板(学生センター前)
46	教育実習日誌返却	全学部	2020年3月4日(水)以降	教務課免許課程係
47	「司書教諭課程修了証」申請受付	司書教諭課程修了者	2020年3月4日(水)～20日(金)	教務課免許課程係
48	教育職員免許状授与(一括申請者) 司書課程修了者授与	全学部	2020年3月20日(金)	卒業式当日(学位記と一緒に交付)

※上記日程・教室については、変更になる場合があるので、随時「教務課免許課程係掲示板」で確認すること。

教職課程 授業科目(2019年度以降入学者)

《教育の基礎的理解に関する科目等》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
1-1	06905	教育原論	2	秋	火3	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06906	教育原論	2	秋	火4	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06907	教育原論	2	秋	木3	川村 肇	W-312	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06900	教職論	2	春	月3	桑原 憲一	E-312	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06902	教職論	2	春	火4	萩原 真美	E-202	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06901	教職論	2	秋	月4	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	2
2-3	—	教育制度	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
1-1	19736	教育心理学	2	春	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	4
1-1	19844	教育心理学	2	春	集中	利根川 明子	A-306	—	養は自学科科目で履修 春学期履修登録期間中に登録	4
1-1	19738	教育心理学	2	秋	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	4
1-1	25121	特別支援教育論	2	春	水4	福田 亜矢子	W-413	—	養は自学科科目で履修	5
1-1	25123	特別支援教育論	2	秋	水3	福田 亜矢子	W-413	—	養は自学科科目で履修	5
1-1	25124	特別支援教育論	2	秋	水4	福田 亜矢子	W-413	—	養は自学科科目で履修	5
2-3	—	教育課程論	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	道徳教育の理論と実践	2	—	—	—	—	—	中学校1種免許状は必修 養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	総合的な学習の時間の理論と実践	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	特別活動論	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	教育方法学	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	生徒指導と進路指導	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
2-3	—	教育相談	2	—	—	—	—	—	養は自学科科目で履修 2020年度開講予定	—
3-6	—	教育実習指導	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
4-7	—	教育実習Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2022年度開講予定 春学期履修登録期間中に登録	—
4-7	—	教育実習Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2022年度開講予定 春学期履修登録期間中に登録	—
4-8	—	教職実践演習(中・高)	2	—	—	—	—	—	2022年度開講予定	—

教職課程 授業科目(2019年度以降入学者)

≪教科及び教科の指導法に関する科目≫

◎教科に関する専門的事項

所属学科毎に履修科目が異なるため、「履修の手引き」免許及び資格課程の当該ページを参照し、単位修得すること。

◎各教科の指導法 ※開講は2020年度以降

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	—	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
2-3	—	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
3-5	—	ドイツ語科教科教育法Ⅲ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	ドイツ語科教科教育法Ⅳ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
2-3	—	英語科教科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
3-5	—	英語科教科教育法Ⅲ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	英語科教科教育法Ⅲ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	英語科教科教育法Ⅳ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
2-3	—	フランス語科教科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
2-3	—	フランス語科教科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
3-5	—	フランス語科教科教育法Ⅲ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	フランス語科教科教育法Ⅳ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
2-3	—	社会科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
2-3	—	社会科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
2-3	—	社会・地理歴史科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2020年度開講予定	—
3-5	—	社会・地理歴史科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	社会・地理歴史科教育法Ⅲ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	社会・公民科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	社会・公民科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	情報科教育法Ⅰ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—
3-5	—	情報科教育法Ⅱ	2	—	—	—	—	—	2021年度開講予定	—

教職課程 授業科目(2019年度以降入学者)

≪大学が独自に設定する科目≫ ※開講は2020年度以降

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
2-3	-	学校経営と学校図書館	2	-	-	-	-	-	司書教諭課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	学校図書館メディアの構成	2	-	-	-	-	-	司書教諭課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	学習指導と学校図書館	2	-	-	-	-	-	司書教諭課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	読書と豊かな人間性	2	-	-	-	-	-	司書教諭課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	情報メディアの活用	2	-	-	-	-	-	抽選科目 司書教諭課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	生涯学習概論	2	-	-	-	-	-	司書課程登録者のみ履修可 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	道徳教育の理論と実践	2	-	-	-	-	-	高校1種免許状に対しては 「大学が独自に設定する科目」 選択科目として適用 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	道徳教育の理論と実践	2	-	-	-	-	-	高校1種免許状に対しては 「大学が独自に設定する科目」 選択科目として適用 2020年度以降開講予定	-
2-3	-	介護ボランティアの理論と実践	2	-	-	-	-	-	中学校1種免許状に対しては 「大学が独自に設定する科目」 必修科目として適用 2020年度以降開講予定	-

※ 抽選結果を確認すること。

2019年度以降入学者対象 教育職員免許法施行規則 第66条の6に定める科目

「教科及び教職に関する科目」のほかに、文部科学省が別に定める科目（教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目）の単位を修得しなければなりません。

所属学科毎に履修科目が異なるため、「履修の手引き」免許課程の当該ページを参照し、単位修得してください。

免許法施行規則に定める科目	所属	科目群	科目名	単位数	備考
日本国憲法	外国語学部 国際教養学部 経済学部	各学部共通科目	現代社会1(日本国憲法)	2単位	自学科時間割冊子の全学共通授業科目「現代社会1(日本国憲法)」を参照の上、登録すること。
	法律学科	学部専門科目	憲法入門	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
体育	全学部	各学部共通科目	スポーツ・レクリエーション	1単位×2	自学科時間割冊子の全学共通授業科目「スポーツ・レクリエーション」を参照の上、登録すること。
外国語コミュニケーション	全学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
情報機器の操作	外国語学部 国際教養学部 経済学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
	法律学科	各学部共通科目	現代社会2(コンピュータ入門a) 現代社会2(コンピュータ入門b)	2単位×1	自学科時間割冊子の全学共通授業科目「現代社会2(コンピュータ入門a又はb)」を参照の上、登録すること。

教職課程 授業科目(2018年度以前入学者)

《教職に関する科目》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
1-1	06900	教職論	2	春	月3	桑原 憲一	E-312	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06902	教職論	2	春	火4	萩原 真美	E-202	—	養は自学科科目で履修	2
1-1	06901	教職論	2	秋	月4	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	2
2-3	06904	教育原論	2	春	火3	萩原 真美	E-303	—	再履修者用 養は自学科科目で履修	1
1-1	06905	教育原論	2	秋	火3	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06906	教育原論	2	秋	火4	萩原 真美	W-202	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	06907	教育原論	2	秋	木3	川村 肇	W-312	—	養は自学科科目で履修	1
1-1	19736	教育心理学	2	春	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	4
1-1	19844	教育心理学	2	春	集中	利根川 明子	A-306	—	養は自学科科目で履修	4
1-1	19738	教育心理学	2	秋	金1	田口 雅徳	A-207	—	養は自学科科目で履修	4
2-3	06914	教育制度	2	春	月4	桑原 憲一	E-206	—	養は自学科科目で履修	3
2-3	06915	教育制度	2	春	水3	小島 優生	W-204	—	養は自学科科目で履修	3
2-3	06913	教育制度	2	秋	水2	小島 優生	A-409	—	養は自学科科目で履修	3
2-3	06918	教育課程論	2	春	月4	安井 一郎	W-203	—	養は自学科科目で履修	6
2-3	06919	教育課程論	2	春	火3	桑原 憲一	W-312	—	養は自学科科目で履修	6
2-3	06917	教育課程論	2	秋	火4	桑原 憲一	W-312	—	養は自学科科目で履修	6
3-5	06920	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	2	春	火3	柿沼 義孝	E-307	—		14
3-5	06921	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	2	秋	火3	柿沼 義孝	E-307	—		14
3-5	24067	ドイツ語科教科教育法Ⅲ	2	春	水3	上田 浩二	A-507	—		15
3-5	24068	ドイツ語科教科教育法Ⅳ	2	秋	水3	上田 浩二	A-507	—		15
3-5	22937	英語科教科教育法Ⅰ	2	春	水1	大澤 舞	A-503	—	再履修者用 外のみ履修可	16
2-3	14259	英語科教科教育法Ⅰ	2	秋	火3	羽山 恵	W-309	—	外のみ履修可	16
3-5	23702	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	月4	浅岡 千利世	W-401	23	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	17
3-5	23707	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	月4	浅岡 千利世	W-401			
3-5	23708	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	火4	E. 本橋	W-317	23	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	17
3-5	23706	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	火4	E. 本橋	W-317			
3-5	23703	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	木1	羽山 恵	W-317	23	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	17
3-5	23704	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	木1	羽山 恵	W-317			
3-5	23709	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	木3	大澤 舞	E-303	23	外のみ履修可、 春・秋セット履修、先着順	17
3-5	23705	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	木3	大澤 舞	E-303			
3-5	24081	英語科教科教育法Ⅳ	2	春	火1	浅岡 千利世	W-315	—	外のみ履修可	18

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	14024	英語科教科教育法Ⅰ	2	秋	水1	安間 一雄	E-501	—	養・経・法のみ履修可	19
3-5	22259	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	火2	齋藤 雪絵	W-407	15	養・経・法のみ履修可 先着順	20
3-5	14025	英語科教科教育法Ⅱ	2	春	水2	臼井 芳子	W-317	15	養・経・法のみ履修可 先着順	20
3-5	14026	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	火2	齋藤 雪絵	E-304	15	養・経・法のみ履修可 先着順	20
3-5	22260	英語科教科教育法Ⅲ	2	秋	水2	臼井 芳子	W-317	15	養・経・法のみ履修可 先着順	20
3-5	24357	英語科教科教育法Ⅳ	2	春	水3	安間 一雄	E-501	—	養・経・法のみ履修可	21
2-3	06932	フランス語科教科教育法Ⅰ	2	春	木2	中村 公子	6-305	—		22
2-3	06933	フランス語科教科教育法Ⅱ	2	秋	木2	中村 公子	6-305	—		22
3-5	24070	フランス語科教科教育法Ⅲ	2	春	木1	中村 公子	6-305	—		23
3-5	24071	フランス語科教科教育法Ⅳ	2	秋	木1	中村 公子	6-305	—		23
2-3	06934	社会科教育法Ⅰ	2	春	月1	秋本 弘章	E-312	—		24
3-5	06935	社会科教育法Ⅱ	2	春	火2	秋本 弘章	E-312	—		25
3-5	06936	社会科教育法Ⅲ	2	秋	火2	秋本 弘章	E-312	—		25
2-3	06939	地理・歴史科教育法Ⅰ	2	秋	土1	鈴木 孝	W-314	—		26
3-5	06940	地理・歴史科教育法Ⅱ	2	秋	月1	秋本 弘章	E-312	—		27
3-5	06941	地理・歴史科教育法Ⅲ	2	春	月5	會田 康範	E-312	—		28
3-5	06937	公民科教育法Ⅰ	2	春	火3	及川 良一	E-517	—		29
3-5	06938	公民科教育法Ⅱ	2	秋	火3	及川 良一	E-517	—		29
3-5	06942	情報科教育法Ⅰ	2	春	木1	秋本 弘章	E-406	—		30
3-5	06943	情報科教育法Ⅱ	2	秋	木1	秋本 弘章	E-406	—		30
2-3	23626	道德教育の理論と実践	2	春	月3	安井 一郎	W-202	—	中学校1種免許状は必修	7
2-3	23625	道德教育の理論と実践	2	秋	木3	小島 優生	E-302	—	中学校1種免許状は必修	7
2-3	19740	特別活動論	2	春	火2	及川 良一	E-526	—		8
2-3	19739	特別活動論	2	秋	月3	桑原 憲一	E-312	—		8
2-3	19741	特別活動論	2	秋	火2	及川 良一	E-526	—		8
2-3	06956	教育方法学	2	春	火2	竹内 久顕	W-205	—		9
2-3	06954	教育方法学	2	秋	火4	竹内 久顕	W-204	—		9
2-3	06958	生徒指導法	2	春	火4	桑原 憲一	W-312	—		10
2-3	06961	生徒指導法	2	春	土1	及川 良一	W-204	—		10
2-3	06960	生徒指導法	2	秋	土1	及川 良一	W-204	—		10
2-3	06963	学校カウンセリング	2	春	月2	山本 良	W-205	—	養は自学科科目で履修	11
2-3	06962	学校カウンセリング	2	秋	木4	鈴木 乙史	E-312	—	養は自学科科目で履修	11
2-3	06965	学校カウンセリング	2	秋	月2	山本 良	W-205	—	養は自学科科目で履修	11

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜日	担当教員	教室	定員	備考	ページ
3-6	24076	教育実習指導	2	春	水2	小島 優生	E-313	25	特段の事情がある者のみ履修可 免許課程係に申し出ること	12
3-6	24074	教育実習指導	2	秋	月3	安井 一郎	W-315	25	先着順	12
3-6	24072	教育実習指導	2	秋	水1	岩崎 充益	W-309	25	先着順	12
3-6	24079	教育実習指導	2	秋	水3	小島 優生	E-304	25	先着順	12
3-6	24073	教育実習指導	2	秋	水4	岩崎 充益	W-309	25	先着順	12
3-6	24077	教育実習指導	2	秋	木2	川村 肇	W-307	25	先着順	12
4-7	07608	教育実習Ⅰ	2	春	—	教職課程		—	春学期履修登録期間中に登録	—
4-7	07609	教育実習Ⅱ	2	春	—	教職課程		—	春学期履修登録期間中に登録	—
4-8	14262	教職実践演習(中・高)	2	春	水2	小島 優生	E-313	25	特段の事情がある者のみ履修可 免許課程係に申し出ること	13
4-8	22250	教職実践演習(中・高)	2	秋	月2	秋本 弘章	E-509	25	先着順	13
4-8	22248	教職実践演習(中・高)	2	秋	月4	安井 一郎	W-310	25	先着順	13
4-8	22252	教職実践演習(中・高)	2	秋	火3	桑原 憲一	W-316	25	先着順	13
4-8	22253	教職実践演習(中・高)	2	秋	水3	小島 優生	E-304	25	先着順	13
4-8	22251	教職実践演習(中・高)	2	秋	木2	川村 肇	W-307	25	先着順	13

教職課程 授業科目

《教科又は教職に関する科目》2018年度以前入学者

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
2-3	07016	学校経営と学校図書館	2	春	金2	井上 靖代	A-409	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	31
2-3	07017	学校図書館メディアの構成	2	春	金1	井上 靖代	A-308	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	32
2-3	07019	学習指導と学校図書館	2	秋	木1	竹内 ひとみ	A-308	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	32
2-3	07020	読書と豊かな人間性	2	秋	金3	米谷 茂則	A-409	—	司書教諭課程登録者のみ履修可	33
2-3	07022	情報メディアの活用	2	秋	火4	福田 求	E-412	50	抽選科目 司書教諭課程登録者のみ履修可	34
2-3	07021	情報メディアの活用	2	秋	水2	福田 求	E-412	50	抽選科目 司書教諭課程登録者のみ履修可	34
2-3	22670	生涯学習概論	2	秋	月1	阪本 陽子	W-313	—	司書課程登録者のみ履修可	67
2-3	23626	道德教育の理論と実践	2	春	月3	安井 一郎	W-202	—	高校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 選択科目として適用	7
2-3	23625	道德教育の理論と実践	2	秋	木3	小島 優生	E-302	—	高校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 選択科目として適用	7
2-3	09109	介護ボランティアの理論と実践	2	春	木1	中條 共子	W-312	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用 春学期履修登録期間中に登録	35
2-3	06997	介護ボランティアの理論と実践	2	春	集中	保科 寧子	E-416	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	36
2-3	12780	介護ボランティアの理論と実践	2	秋	月1	中條 共子	W-312	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	35
2-3	12781	介護ボランティアの理論と実践	2	秋	月2	中條 共子	W-312	—	中学校1種免許状に対しては 「教科又は教職に関する科目」 必修科目として適用	35

※ 抽選結果を確認すること。

教職課程 授業科目(2018年度以前入学者)

《教科に関する科目》

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜時	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
1-1	06982	日本史概説 I	2	春	火4	堀川 徹	W-207	—		37
1-1	06983	日本史概説 II	2	秋	火4	堀川 徹	W-207	—		37
1-1	06984	外国史概説 I (言語文化学科生)	2	秋	木3	兼田 信一郎	E-202	—	経・法履修不可	38
1-1	25122	外国史概説 I (経済学科生)	2	秋	木2	兼田 信一郎	E-313	—	養・営・環・法履修不可	38
1-1	25126	外国史概説 I (経営・国際環境経済学科生)	2	春	木3	兼田 信一郎	W-312	—	養・済・法履修不可	38
1-1	25128	外国史概説 I (法学部生)	2	春	木2	兼田 信一郎	E-313	—	養・経履修不可	38
1-1	06985	外国史概説 II (言語文化学科生)	2	春	木5	久慈 栄志	E-102	—	経・法履修不可	39
1-1	25125	外国史概説 II (経済学科生)	2	春	木4	久慈 栄志	E-102	—	養・営・環・法履修不可	39
1-1	25127	外国史概説 II (経営・国際環境経済学科生)	2	秋	木4	久慈 栄志	E-102	—	養・済・法履修不可	39
1-1	25129	外国史概説 II (法学部生)	2	秋	木5	久慈 栄志	E-102	—	養・経履修不可	39
1-1	06986	地理学概説 I	2	春	火1	秋本 弘章	E-312	—		40
1-1	06987	地理学概説 II	2	秋	火1	秋本 弘章	E-312	—		40
1-1	06988	地誌学概説 I	2	春	水1	秋本 弘章	E-312	—		41
1-1	06989	地誌学概説 II	2	秋	水1	秋本 弘章	E-312	—		41
2-3	07023	法律学概説 I	2	秋	水1	湯川 益英	W-312	—	経・法は履修不可	42
2-3	07024	法律学概説 II	2	秋	水2	周 劍龍	W-312	—	経・法は履修不可	42
2-3	07025	政治学概説 I	2	春	火4	杉田 孝夫	W-424	—	経・法は履修不可	43
2-3	07026	政治学概説 II	2	秋	火4	杉田 孝夫	W-424	—	経・法は履修不可	43
1-1	25043	社会学概説 I	2	春	金4	前島 賢士	E-306	—	養・環・法は履修不可	44
1-1	25044	社会学概説 II	2	秋	金4	前島 賢士	E-306	—	養・環・法は履修不可	44
1-1	07027	社会学概説 I	2	春	土1	岡村 圭子	W-201	300	養は自学科科目で履修 経は履修不可	45
1-1	07028	社会学概説 II	2	秋	土1	岡村 圭子	W-201	300	養は自学科科目で履修 経は履修不可	45
2-3	07029	哲学概説 I	2	春	火5	河口 伸	W-314	—		46
2-3	07030	哲学概説 II	2	秋	火5	河口 伸	W-314	—		46
1-1	07031	倫理学概説 I	2	春	木2	林 永強	W-207	300	養は自学科科目で履修	47
1-1	07032	倫理学概説 II	2	秋	木2	林 永強	W-207	300	養は自学科科目で履修	47
2-3	07033	宗教学概説 I	2	春	木5	河口 伸	W-314	—		48
2-3	07034	宗教学概説 II	2	秋	木5	河口 伸	W-314	—		48
1-1	—	心理学概説 I	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
2-3	07105	心理学概説 II	2	秋	木4	田口 雅徳	W-202	100	養は自学科科目で履修	49
1-1	22810	東洋史 I (教職)	2	春	木3	熊谷 哲也	E-201	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	50
2-3	22812	東洋史 I (教職)	2	春	木4	張 士陽	E-416	300		51
1-1	22811	東洋史 II (教職)	2	秋	木3	熊谷 哲也	E-201	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履 修希望者は、免許課程係で別途 手続き。	50
2-3	22813	東洋史 II (教職)	2	秋	木4	張 士陽	E-416	300		51

学年- 学期	時間割 コード	科目名	単位数	開講 学期	曜日	担当教員	教室	定員 ※	備考	ページ
1-1	22808	西洋史Ⅰ(教職)	2	春	木3	佐藤 唯行	W-102	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	53
1-1	22806	西洋史Ⅰ(教職)	2	春	木4	黒田 多美子	W-201	300		52
1-1	22809	西洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木3	佐藤 唯行	W-102	300	養は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	53
1-1	22807	西洋史Ⅱ(教職)	2	秋	木4	黒田 多美子	W-201	300		52
1-1	22814	地理学Ⅰ(教職)	2	春	木2	秋本 弘章	E-312	300	経は履修不可	54
1-1	22815	地理学Ⅱ(教職)	2	秋	木2	秋本 弘章	E-312	300	経は履修不可	54
3-5	21603	地誌学Ⅰ(教職)	2	春	月2	犬井 正	E-312	—	養・経は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	55
3-5	18301	地誌学Ⅰ(教職)	2	春	月4	大竹 伸郎	W-101	—		56
3-5	21604	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	月2	犬井 正	E-312	—	養・経は履修不可 同一科目名で別教員の授業を履修希望者は、免許課程係で別途手続き。	55
3-5	18302	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	月4	大竹 伸郎	W-101	—		56
1-1	21602	地誌学Ⅱ(教職)	2	秋	水3	浦部 浩之	W-206	—		57
1-1	22820	国際法Ⅰ(教職)	2	春	月3	一之瀬 高博	W-104	300	経・法は履修不可	58
1-1	22821	国際法Ⅱ(教職)	2	秋	月3	一之瀬 高博	W-104	300	経・法は履修不可	58
1-1	22825	英語通訳(教職)	2	春	火2	矢田 陽子	W-310	50	外は履修不可	59
1-1	22826	英語通訳(教職)	2	秋	火2	矢田 陽子	6-204	50	外は履修不可	59
2-3	—	英語圏の社会と思想a(教職)	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
2-3	—	英語圏の社会と思想b(教職)	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
1-1	22837	社会経済史a(教職)	2	春	水2	新井 孝重	W-206	300	養・経は履修不可	60
1-1	22838	社会経済史b(教職)	2	秋	水2	新井 孝重	W-206	300	養・経は履修不可	60
1-1	19979	社会思想史a(教職)	2	春	月2	犬塚 悠	E-311	300	養・経は履修不可	61
1-1	19980	社会思想史b(教職)	2	秋	月2	犬塚 悠	E-311	300	養・経は履修不可	61
2-3	22845	外国経済史a(教職)	2	春	火1	御園生 眞	E-302	350	養・経・総は履修不可	62
2-3	22846	外国経済史b(教職)	2	秋	火1	御園生 眞	E-302	350	養・経・総は履修不可	62
2-3	—	日本思想史a(教職)	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
2-3	—	日本思想史b(教職)	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
3-5	22843	経済学史a(教職)	2	春	月2	黒木 亮	W-313	350	養・経・総は履修不可	63
3-5	22844	経済学史b(教職)	2	秋	月2	黒木 亮	W-313	350	養・経・総は履修不可	63

2018年度以前入学者対象 教育職員免許法施行規則 第66条の6に定める科目

「教職に関する科目」「教科又は教職に関する科目」「教科に関する科目」のほかに、文部科学省が別に定める科目（教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目）の単位を修得しなければなりません。
所属学科毎に履修科目が異なるため、「履修の手引き」免許課程の当該ページを参照し、単位修得してください。

免許法施行規則に定める科目	所属	科目群	科目名	単位数	備考
日本国憲法	外国語学部 国際教養学部 経済学部	各学部共通科目	日本国憲法	2単位	下表の時間割から、いずれか1科目を登録すること。
	法学部	学部専門科目	憲法入門	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
体育	全学部	各学部共通科目	スポーツ・レクリエーション	1単位×2	自学科時間割冊子の全学共通授業科目「スポーツ・レクリエーション」を参照の上、登録すること。
外国語コミュニケーション	全学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
情報機器の操作	外国語学部 国際教養学部 経済学部	所属によって異なる	「履修の手引」掲載科目	2単位	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。
	法学部	基礎科目	社会科学情報検索法	2単位×1	自学科時間割冊子を参照し、単位修得すること。 下表の時間割から、いずれか1科目を登録すること。
		各学部共通科目	コンピュータ入門a コンピュータ入門b		

学年-学期	時間割コード	科目名	単位数	開講学期	曜時	担当教員	教室	定員※1	備考	ページ
1-1	22822	日本国憲法(教職)	2	春	火1	L. ペドリサ	4-407	300	法は履修不可	65
1-1	22823	日本国憲法(教職)	2	春	火2	加藤 一彦	E-313	300	法は履修不可	64
1-1	22824	日本国憲法(教職)	2	秋	火2	加藤 一彦	E-313	300	法は履修不可	64
1-1	06968	コンピュータ入門a(教職)	2	春	火3	久東 義典	E-407	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	06973	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金3	杉村 和枝	E-410	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	06969	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金3	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	06971	コンピュータ入門a(教職)	2	春	金5	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	火3	久東 義典	E-407	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金3	杉村 和枝	E-410	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金3	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	66
1-1	※2	コンピュータ入門b(教職)	2	秋	金5	黄 海湘	E-403	49	外・養・経は履修不可	66

※1 抽選結果を確認すること。

※2 秋学期履修希望者は、履修登録期間内に教務課法学部係窓口にて別途手続(整理券必要)。

司書課程 授業科目

学年-学期	時間割コード	科目名	単位数	開講学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	22670	生涯学習概論	2	秋	月1	阪本 陽子	W-313	—		67
2-3	22671	図書館概論	2	春	木4	井上 靖代	A-306	—		68
3-5	22951	図書館情報技術論	2	秋	月3	福田 求	E-412	15	先着順 経・教職課程登録者は履修不可	69
3-5	22952	図書館情報技術論	2	秋	月4	福田 求	E-412	15	先着順 経・教職課程登録者は履修不可	69
3-5	22953	図書館情報技術論	2	秋	火5	堀江 郁美	E-401	15	先着順	70
2-3	22672	図書館制度・経営論	2	秋	土2	小池 信彦	A-408	—		71
2-3	22673	図書館サービス概論	2	春	水2	井上 靖代	A-301	—		72
3-5	22954	情報サービス論	2	春	月3	福田 求	E-412	50	先着順	73
3-5	22955	情報サービス論	2	春	月4	福田 求	E-412	50	先着順	73
2-3	22677	児童サービス論	2	春	木2	井上 靖代	A-308	—		74
3-5	22956	情報サービス演習(前半)	1	春	水3	高田 淳子	A-201	35	先着順 春・秋セット履修	75
3-5	22957	情報サービス演習(後半)	1	秋	水3	高田 淳子	A-201			
3-5	22958	情報サービス演習(前半)	1	春	水4	高田 淳子	A-201	35	先着順 春・秋セット履修	75
3-5	22959	情報サービス演習(後半)	1	秋	水4	高田 淳子	A-201			
2-3	22674	図書館情報資源概論	2	春	木1	井上 靖代	A-308	—		76
2-3	22960	情報資源組織論	2	春	火5	小黒 浩司	W-204	—		77
3-5	22963	情報資源組織演習(前半)	1	春	月1	小黒 浩司	A-308	25	先着順 春・秋セット履修	78
3-5	22962	情報資源組織演習(後半)	1	秋	月1	小黒 浩司	A-308			
3-5	22961	情報資源組織演習(前半)	1	春	月2	小黒 浩司	A-308	25	先着順 春・秋セット履修	78
3-5	22964	情報資源組織演習(後半)	1	秋	月2	小黒 浩司	A-308			
3-5	22675	図書館基礎特論	2	秋	木2	竹内 ひとみ	A-308	—		79
3-5	22676	図書館サービス特論	2	秋	水2	高田 淳子	A-202	—		80
2-3	—	図書館情報資源特論	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
2-3	22678	図書・図書館史	2	春	火4	小黒 浩司	W-204	—		81
2-3	—	図書館施設論	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—
4-7	—	図書館実習	2	—	—	2019年度不開講	—	—		—

司書教諭課程 授業科目

学年-学期	時間割コード	科目名	単位数	開講学期	曜時	担当教員	教室	定員	備考	ページ
2-3	07016	学校経営と学校図書館	2	春	金2	井上 靖代	A-409	—		31
2-3	07017	学校図書館メディアの構成	2	春	金1	井上 靖代	A-308	—		32
2-3	07019	学習指導と学校図書館	2	秋	木1	竹内 ひとみ	A-308	—		32
2-3	07020	読書と豊かな人間性	2	秋	金3	米谷 茂則	A-409	—		33
2-3	07022	情報メディアの活用	2	秋	火4	福田 求	E-412	50	抽選※	34
2-3	07021	情報メディアの活用	2	秋	水2	福田 求	E-412	50	抽選※	34

※抽選結果を確認すること。

03年度以降	教育原論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育原論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
現代の子どもと学校をめぐる諸問題について分析することを通して教育の基本的概念を理解するとともに、近代学校教育の歴史と教育思想についての考察を通して現代の教育課題について検討する。		第1回：教育の基本的概念 (1) 子どもの「荒れ」とは何か 第2回：教育の基本的概念 (2) 発達障害とは何か 第3回：教育の基本的概念 (3) 近代教育の本質とは何か 第4回：教育の基本的概念 (4) 教育基本法から考える日本の教育 第5回：教育の基本的概念 (5) 教育の内的事項と外的事項 第6回：教育の基本的概念 (6) 学校の役割とは何か 第7回：近代教育制度の成立と展開 第8回：戦後教育の歴史 (1) 戦争からの解放から高度経済成長期まで 第9回：戦後教育の歴史 (2) 1970年代から1980年代まで 第10回：戦後教育の歴史 (3) 1990年代から現在まで 第11回：子どもの権利から考える教育思想 (1) ルソー以来の教育思想と子ども論 第12回：子どもの権利から考える教育思想 (2) 学習権 第13回：子どもの権利から考える教育思想 (3) 教育の目的 第14回：発達と教育を考える	
到達目標	教育の基本的概念、歴史及び教育思想について理解し、自身の学校観や現在までの教育改革について理論的に分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	特に事後には授業内容の整理と復習を行うこと。		
テキスト	『ポケット版子どもの権利ノート』（子どもの権利・教育・文化 全国センター）		
参考文献	授業中に適宜指示、紹介する。		
評価方法	授業中に適宜課す小レポート（40%）、最終レポート（60%）		

03年度以降	教職論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義では、グループ討議や研究協議などを通して教職の意義、教員の身分と服務、職務の内容、職責や職務遂行に必要なとされる資質などについて主体的な理解を深めていく。教員が直面している現代的諸課題の対応についても取り組む。</p>		<p>第1回：教員の職種・職名とチーム学校 第2回：期待される教師像と目指す教師像 第3回：児童・生徒の成長と教員の役割 第4回：教員の資質と能力 第5回：教員養成と教員免許 第6回：教員の任用と教育委員会 第7回：教員の身分と服務 第8回：教員の職務(1)学校と教員の一日 第9回：教員の職務(2)学校運営と校務分掌 第10回：教員の職務(3)学習指導と生徒指導 第11回：教員の研修(1)法定研修と教員のキャリア 第12回：教員の研修(2)自主的研修の活用 第13回：進路選択の問題を考える(1)教職の特質 第14回：進路選択の問題を考える(2)教育ボランティアの体験</p>	
到達目標	教職の意義、教員の資質能力、職務内容などの教職に関する概括的知識を習得し、教職への意欲向上と心構えの在り方を理解する。		
事前・事後学修の内容	事前学修は次時のテーマを確認し、テキスト・参考資料等を読んで課題意識をもって参加すること。事後学修は授業で指示された課題に取り組み、次時に提出すること。		
テキスト	講義毎に配布する資料		
参考文献	『中学校学習指導要領解説 総則編』（最新版 文部科学省）		
評価方法	課題レポート（30%）、グループ討議（20%）、定期試験（50%）により総合的に評価		

03年度以降	教職論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育制度	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は、教育に関する社会的事項、教育に関する制度的事項、学校と地域の連携、学校安全への対応を含むものである。</p> <p>現代の公教育制度の意義や原理・構造について法的・制度的な知識を身につけるとともに、現在進められている改革の背景にある学校や子どもの生活の変化などの課題を理解し、制度をめぐる諸課題と結びつけて考えることができる講義とする。</p> <p>具体的には授業前半は知識のための講義とし、後半は改革を検討し討論・発表の時間とする。またリアクションペーパーを使用し質問や討論を経ての意見などを集め、次週にレビューをする。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：教育を受ける権利と権利保障 第3回：学校教育制度の変遷 第4回：公教育と私教育 第5回：教育行政システム（国・地方）と教育委員会 第6回：教育行財政 第7回：教育課程行政 第8回：諸外国の教育制度と学校 第9回：家庭教育の現在と教育行政 第10回：社会教育行政 第11回：学校の危機管理と安全 第12回：教育改革（1）学校評価・人事評価 第13回：教育改革（2）学校選択制・小中一貫教育 第14回：教育改革（3）開かれた学校づくりと学校評議員・学校運営委員会</p>	
到達目標	日本の教育に関わる法制度に関する基礎的知識、および、教育制度の理論と構造を理解し、よりよい教育制度の在り方について諸外国や歴史との比較も行いながら分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：事前に配布される資料をもとに、法制度の概略を確認する。 事後学修：講義内容の確認と、実態を調べ、制度と実態について合わせて考察する。		
テキスト	『改訂新版 教育行政学』（藤本典裕・勝野正章編、学文社）		
参考文献	『教育小六法』		
評価方法	定期試験60%、リアクションペーパーを30%、講義内の討論・発言等を10%として評価する。		

03年度以降	教育制度	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	教育心理学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>教育心理学は「教育評価」、「学習の過程」、「発達」、「人格・適応」という4領域に大別される。そこで、これら4領域を中心に講義をおこなっていく。</p> <p>※なお、夏季集中授業としても開講されます。履修登録は春学期に行ってください。修得した場合には、春学期科目として認定されます。日程は以下の通りです。</p> <p>日時：8月5日（月）2限～5限 8月6日（火）2限～5限 8月7日（水）2限～5限 8月8日（木）2限～3限</p>		第1回：教育心理学の領域とその歴史 第2回：教育測定と教育評価 第3回：教育評価の方法 第4回：評価の観点と学力問題 第5回：学習の原理 第6回：学習への動機付け 第7回：学習意欲と原因帰属 第8回：学習意欲と目標理論 第9回：学習意欲と教師の役割 第10回：成熟と学習（発達の規定因） 第11回：発達段階と発達理論 第12回：発達課題と人格的発達 第13回：軽度発達障害の理解と支援 第14回：学校適応と心理アセスメント	
到達目標	子どもの発達や学習、学校適応に関わる心理学の基礎的知識を理解し、学校現場において生じる諸問題に対して心理学的視点で検討のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に示された各回の内容を参考文献をもとに事前に学修する。事後にあつては授業内容について参考文献を参照し各自でまとめる。また、授業にて事前・事後学修として個別に指示した課題も含まれる。		
テキスト	テキストは使用しない。必要な資料は配付する。		
参考文献	授業のなかで関連文献を紹介する。		
評価方法	試験（80%）および課題レポート（20%）の成績をもとに評価をおこなう。		

13年度以降	教育心理学	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

19年度以降	特別支援教育論	担当者	福田 亜矢子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義では教員が学校において、配慮が必要な子どもに対して適切な配慮・指導・支援が行えるよう、障害について理解し支援方法や配慮方法、連携の重要性について学び理解を深める。</p>		<p>第1回：学校において特別な支援を必要とする児童・生徒とは 第2回：通級による指導・特別支援学級による指導とは 第3回：発達障害について1－様々な発達障害の特徴－ 第4回：発達障害について2－特徴から見える配慮する点－ 第5回：発達障害について3－個別指導計画と教育支援計画－ 第6回：発達障害について4－支援方法（情緒に問題のある児童・生徒）－ 第7回：発達障害について5－支援方法（読み書きに問題を持つ児童・生徒）－ 第8回：障害はないが特別な教育的ニーズのある児童・生徒の理解と対応の必要性について 第9回：保護者理解について 第10回：保護者と学校内、関係機関との連携の必要性と支援体制の構築 第11回：特別支援につなぐ必要性 第12回：知的障害・病弱・ことばの発達等様々な障害がある児童・生徒の理解 第13回：配慮が必要な児童・生徒の心の問題 第14回：不登校にならないためには</p>	
到達目標	特別の支援を必要とする児童・生徒への理解を深め適切な配慮、指導、連携をできるようにする。		
事前・事後学修の内容	予習復習を行うこと。		
テキスト	未定。		
参考文献	講義内で適宜紹介する。		
評価方法	定期試験（80%）、授業内で実施提出する小レポート（20%）		

19年度以降	特別支援教育論	担当者	福田 亜矢子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育課程論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行われている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題等の問題を取り上げ、各種資料、VTR教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。</p>		<p>第1回：教育課程と学力問題 第2回：教育課程とは何か 第3回：日本の教育課程(1)小・中・高の教育課程 第4回：日本の教育課程(2)教育課程に関する法規 第5回：教育課程編成の理論と方法(1)教育課程の分類 第6回：教育課程編成の理論と方法(2)経験主義カリキュラムと系統主義カリキュラム 第7回：学習指導要領と教育課程(1)昭和20年代 第8回：学習指導要領と教育課程(2)昭和30-40年代 第9回：学習指導要領と教育課程(3)昭和50-60年代 第10回：学習指導要領と教育課程(4)平成1-10年代 第11回：学習指導要領と教育課程(5)現行学習指導要領 第12回：次期学習指導要領の検討(1)改訂の要点 第13回：次期学習指導要領の検討(2)カリキュラム・マネジメント 第14回：教育課程と評価</p>	
到達目標	教育課程と学習指導要領の歴史的変遷を踏まえ、教育課程の全体構造や具体的編成に関する基礎的理論を理解し、よりよい教育課程の在り方や編成について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『中学校学習指導要領』(最新版 文部科学省)『中学校学習指導要領解説 総則編』(最新版 文部科学省) 『高等学校学習指導要領』(最新版 文部科学省)『高等学校学習指導要領解説 総則編』(最新版 文部科学省)その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点(50%、授業内課題を含む)、試験またはレポート(50%)、総合点60点以上合格。		

03年度以降	教育課程論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	道徳教育の理論と実践	担当者	安井 一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>道徳教育は、人間形成の基礎にかかわるものであり、人間が社会の中で人間として生きていくために不可欠の内容を有している。本講では、道徳教育の意義と目的、学校教育における位置と役割についての基本的理解を得たうえで、道徳について考えるうえでの基本的な問いを「教育において『いのち』のもつ意味は何か」と捉え、その観点から、今日の道徳教育の現状を分析し、その特徴と問題点を明らかにし、一人ひとりの子どもの「生きる力」の育成に資する道徳教育とは何かについての検討を加える。</p>		<p>第1回：自分の道徳教育体験を振り返る 第2回：道徳とは何か(1) 道徳の本質 第3回：道徳とは何か(2) 道徳の定義 第4回：学校教育と道徳教育 第5回：学習指導要領における道徳教育の位置と役割 第6回：新教育課程における道徳教育の課題（評価を含む） 第7回：「いのち」の教育とは何か 第8回：道徳教育の実践例の検討 小学校 第9回：道徳教育の実践例の検討 中学校 第10回：道徳教育の実践例の検討 高等学校 第11回：学習指導案の作成(前半) 第12回：学習指導案の作成(後半) 第13回：模擬授業(1時間目) 第14回：模擬授業(2時間目)</p>	
到達目標	学校教育をめぐる問題状況を踏まえ、学習指導要領に基づく道徳教育の目的、内容、方法について理論的に分析し、実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと		
参考文献	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（最新版 文部科学省）『私たちの道徳 中学校』（平成26年、文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点60点以上合格。		

13年度以降	道徳教育の理論と実践	担当者	小島 優生
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	特別活動論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
特別活動の教育的意義や教育課程上の位置付け、目標と内容、指導計画の作成、指導方法などについて基礎知識を習得し、講義と演習、指導計画の作成及び模擬授業などを通して現場実践に即した技能を習得する。		第1回：特別活動とは何か 第2回：特別活動と教育課程 第3回：特別活動の内容と変遷 第4回：特別活動の意義と目標 第5回：特別活動と諸教育指導 第6回：生徒会活動の目標と内容 第7回：生徒会活動の指導計画と評価 第8回：学級活動の目標と内容 第9回：学級活動の指導計画（1）指導計画作成の基礎・基本 第10回：学級活動の指導計画（2）指導計画の作成 第11回：学級活動の模擬授業と評価 第12回：学校行事の目標と内容 第13回：学校行事の指導計画（1）指導計画作成の基礎・基本 第14回：学校行事の指導計画（2）指導計画の作成	
到達目標	学習指導要領に規定された特別活動の目的、内容、指導法に関する基礎的理論に基づき、特別活動の特質を踏まえた指導に必要な実践的知識や技能及び素養を身に付ける。		
事前・事後学修の内容	事前学修は次時のテーマを確認し、テキスト・参考資料等を読んで課題意識をもって参加すること。事後学修は授業で指示された課題に取り組み、次時に提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『中学校学習指導要領解説 特別活動編』（最新版 文部科学省）		
評価方法	各種指導計画（30%）、課題レポート（20%）、定期試験（50%）により総合的に評価。		

13年度以降	特別活動論	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	教育方法学	担当者	竹内 久頭
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>毎日の授業をどのように工夫したらよいのか、子どもたちの個性を最大限に生かせるような指導とは何か等の問いに代表されるように、授業の内容とその方法に関する諸問題は、学校教育における最も重要な課題の一つである。本講では、教育方法学のうち、特に授業研究の問題に焦点をあて、授業研究を行ううえでの基本的な考え方はどのようなものであるのか、授業を成り立たせている構成要素は何か、授業を展開する具体的な方法とは何か等の問題について、各種資料やVTRによる授業記録などを用いながら多面的に検討を加え、授業研究に関する理解を深めていく。</p>		<p>第1回：自分の授業体験を振り返る 第2回：授業とは何か 第3回：教育実習生の授業 第4回：ベテラン教師の授業 第5回：教材研究とは何か 第6回：教材研究の方法 第7回：教材研究の事例の検討 A教諭の授業をもとに 第8回：教材研究の事例の検討 B教諭の授業をもとに 第9回：教材研究の事例の検討 C教諭の授業をもとに 第10回：新教育課程と授業 第11回：主体的・対話的で深い学びとは何か 第12回：主体的・対話的で深い学びの実践例の検討 第13回：授業における情報機器の活用 第14回：学習評価の今日的課題</p>	
到達目標	授業の構成と展開を中心とする教育方法学の基礎的理論に基づき授業を分析研究し、よりよい授業実践の在り方について見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 総則編』（最新版 文部科学省） 『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 総則編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点60点以上合格。		

03年度以降	教育方法学	担当者	竹内 久頭
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	生徒指導法	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
生徒指導及び進路指導・キャリア教育の教育課程上の位置づけや教育的意義、教育相談と生徒理解の重要性、集団指導と個別指導の計画的推進などについての理解を深め、グループ討議や事例研究、ロールプレイングなどを通して実践的な指導技能を習得する。		第1回：生徒指導及び進路指導の意義と教育課程上の位置づけ 第2回：生徒指導及び進路指導の方法原理と指導の実際 第3回：生徒指導及び進路指導の組織と指導体制 第4回：生徒理解と教育相談 第5回：生徒指導及び進路指導における集団指導と個別指導 第6回：生徒指導及び進路指導と学級経営、道徳教育等との関連 第7回：生徒指導及び進路指導と関連法令 第8回：キャリア教育の意義とその在り方 第9回：キャリア教育と職業観・勤労観の醸成 第10回：事例研究：基本的生活習慣の確立と適応指導 第11回：事例研究：非行問題行動への対応 第12回：事例研究：いじめ問題への対応 第13回：事例研究：不登校・中途退学などへの対応 第14回：事例研究：進路選択・職業選択への対応	
到達目標	生徒指導及び進路指導・キャリア教育の意義や基礎的理論を理解し、実践事例に基づいた指導のあり方についての知識・技能や素養を修得する。		
事前・事後学修の内容	事前学修は、次時のテーマについてテキストや資料を読み、課題意識をもって参加すること。 事後学修は、授業で指示した課題をレポートやメモにまとめて提出すること。		
テキスト	『生徒指導提要』（教育図書）、『高等学校キャリア教育の手引き』（教育出版）、その他、担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	講義の中で紹介する。		
評価方法	授業内課題や小レポートなど平常点50%、試験(レポート)50%で総合的に評価する。60点以上を合格とする。		

18年度以前	生徒指導法	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	学校カウンセリング	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>教員が学校で生徒と接する際に必要とされる教育相談の基本的な理論や技法について講義する。さらに、実習やグループワークなどを通じ、いじめ、不登校など学校現場で実際に起こっている問題について実際に考える機会を設ける。</p>		<p>第1回：教育相談とは何か 第2回：教師が行う教育相談の特徴 第3回：カウンセリングの理論① ー来談者中心療法とカウンセリングマインド 第4回：カウンセリングの理論② ーその他の理論 第5回：カウンセリングの理論③ ーカウンセリングの体験 第6回：予防的カウンセリング① ー構成的グループエンカウンター 第7回：予防的カウンセリング② ーソーシャルスキルトレーニング 第8回：思春期の心の発達と危機 第9回：教育相談の実際①：いじめ 第10回：教育相談の実際②：不登校・ひきこもり 第11回：教育相談の実際③：非行 第12回：教育相談の実際④：発達障害の理解と支援 第13回：教育相談の実際⑤：精神障害の理解と支援 第14回：教育相談の実際⑥：保護者との協調</p>	
到達目標	教育相談（カウンセリングを含む）に関する基礎的理論や技法を習得し、適切な相談、支援ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に示された各回の内容を参考文献をもとに事前に学修する。事後にあつては授業内容について参考文献を踏まえて再度まとめる。また、各教員が授業にて事前・事後学修として個別に指示した課題も含まれる。		
テキスト	特に定めない。毎回授業内容に関連するプリントを配付する。		
参考文献	授業中に適宜資料を配付する。		
評価方法	定期試験（70%）、毎回の授業の最後に提出するリアクションペーパー（30%）		

18年度以前	学校カウンセリング	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13 年度以降	教育実習指導	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後 学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13 年度以降	教育実習指導	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 教育実習事前・事後指導 本講は、教育実習の意義や目的、その概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業（事前指導）、及び、教育実習の反省・フォローアップ（事後指導）を行い、教師としての資質・能力の向上を図ることを目的とする。</p> <p>【授業の概要】 教育実習は、これまで大学の教職課程で学んできたことの成果を、実習校での学校運営に教育実習生として直接参加することによって、具体的に実証する機会である。本講では、教育実習に参加することの意義や目的、実習期間中の学校生活の概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を体験することにより、実習における学習のポイントを明確にする（事前指導）。また、教育実習の反省を行うとともに、教育実習の体験に基づいて、教職に向けての各自の学習課題を整理する（事後指導）。</p> <p>秋学期受講者は、水曜日4・5時限に全体講義を行うため、可能な限り他の授業を登録しないこと。</p>		<p>第1回：教育実習とは何か 第2回：教育実習の概要 第3回：学校の組織と教師の職務 第4回：授業研究(1)外国語 第5回：授業研究(2)社会・地歴・公民 第6回：授業研究(3)授業のスキル 第7回：授業研究(4)授業の評価 第8回：学習指導案の書き方 第9回：学習指導案の作成 第10回：模擬授業(1)外国語 第11回：模擬授業(2)社会・地歴・公民 第12回：教育実習期間中の諸注意 第13回：教育実習を振り返る(1)学習指導・生徒指導 第14回：教育実習を振り返る(2)学級経営</p>	
到達目標	教育実習の意義、目的、内容について理解し、よりよい実習に向けた準備を行うとともに、教育実習の反省・フォローアップにより各自の学習課題の整理することで、教師としての意識や資質・能力を高めることができるようにする。		
事前・事後 学修の内容	前時の授業内容を確認した上で、指定されたテキスト・参考書がある場合には関連箇所を読み、課題意識を持って、本時の授業に臨むこと。授業時に提示された課題を遂行し、それを次回の授業で提出すること。		
テキスト	獨協大学『教育実習の指針』		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』。その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、試験またはレポート（50%）、総合点 60 点以上合格。		

10年度以降	教職実践演習（中・高）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

10年度以降	教職実践演習（中・高）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【到達目標及びテーマ】 教職課程の総仕上げとして、個々の授業において習得してきた知識技能を元に、教員としての使命感や教育的愛情、授業力等の資質が身についているかどうか確認し、今後の教員としての成長発達につなげる契機とする。また、方法としてディスカッションを多用することで対人能力の確認も含んでいる。</p> <p>【授業の概要】 主に①これまでの教職課程で習得してきた内容と教育実習を振り返り、【教員としての使命感・教育的愛情】、②現在学校が抱えている課題とそれへの対応を、現職教員からの講義やロールプレイ、討論を通してより具体的に考察し、【生徒理解】、③模擬授業を通してよりよい授業力を身につけると同時に授業力向上への方途を探究する。また、授業の多くがグループでのディスカッションや作業の形態をとり、それを通して教員として必要な「他の人と話し合い、協力しあう」という対人関係能力の確認、向上も同時に目指していく。</p> <p>秋学期受講者は、水曜日4・5時限に全体講義を行うため、可能な限り他の授業を登録しないこと。</p>		第1回 教育実習の振り返り①生徒指導・生徒理解編 第2回 教育実習の振り返り②授業編 第3回 履修カルテの記入・確認&私に必要なもの 第4回 実習校でのフィールドワーク 第5回 生徒理解①（現職中・高教員による講義・小論文） 第6回 生徒理解②（グループディスカッション・小論文） 第7回 実習中経験した課題への対応 第8回 すぐれた授業とは何か 第9回 学習指導案を作成する 第10回 学習指導案を検討する 第11回 模擬授業① 第12回 模擬授業② 第13回 模擬授業③ 第14回 模擬授業④	
到達目標	主に教職課程を通じて習得した知識や能力、教育実習の成果をふまえ、教師に必要な資質・能力を総合的に養成し、実践的な教育力を発揮できるようにする。		
事前・事後学修の内容	(事前学修) 提示された資料を事前に読んでくること、(事後学修) 講義を振り返り授業レポートを作成すること。その他フィールドワークや発表準備など。		
テキスト	『教育実習の指針』（獨協大学）		
参考文献	文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』その他授業内で指示する。		
評価方法	期末レポートに授業レポート等を加味して評価する。		

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	担当者	柿沼 義孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ドイツ語の基礎知識の確認と補強、および外国語教授法の知識と教案の作成などの実務的な技能の獲得を目標とする。基礎知識に関しては、学科基礎科目において習得してきた文法に関する知識のみならず、ドイツ語の授業を行うのに必要だと思われるドイツ語に関わる一般的知識をも含めて確認・補強をする。外国語教授法に関しては、代表的な教授法に関して受講者に調査・報告をしてもらい、その長所・短所を議論する。また教案や試験問題なども実際に作成してみたい。</p>		<p>第1回： オリエンテーション 第2回： ドイツ語基礎知識確認試験 第3回： 試験の解答と解説による基礎知識の確認1（文法事項中心） 第4回： 試験の解答と解説による基礎知識の確認2（書き換え問題中心） 第5回： 試験の解答と解説による基礎知識の確認3（独作文中心） 第6回： 教壇実習の割り振りについて （基礎知識の一番弱い項目を中心に） 第7回： 代表的な外国語教授法について1 （文法訳読法、オーディオメソッド等）（発表形式） 第8回： 代表的な外国語教授法について2 （コミュニケーション、比較文化的AP）（発表形式） 第9回： ICT機器を使用した指導と教材の在り方 第10回： 教壇実習（アルファベットと発音を中心に） 第11回： 教壇実習（動詞の人称変化を中心に） 第12回： 教壇実習（格変化を中心に） 第13回： 教壇実習（人称代名詞の格変化を中心に） 第14回： 教壇実習（前置詞を中心に）</p>	
到達目標	ドイツ語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、ドイツ語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修では、ドイツ語文法・教授法についての学修事項を確認する。また教壇実習では教案を作成する。事後学修では、それぞれの授業で行われた議論を振り返り、より良い教授法・授業運営へ向けて再検討する。		
テキスト	なし		
参考文献	外国語教育・理論から実践まで・（松野和彦 著、吉島茂朝日出版社）外国語の学習、教授、評価ヨーロッパ共通参照枠（吉島茂、大橋理枝 訳・編、朝日出版社） ドイツ語教授法・科学的基盤作りと実践に向けての課題（吉島茂、境一三 著、三修社）学習指導要領（中学校・高等学校）（最新版 文部科学省）		
評価方法	ドイツ語文法と教授法の基礎知識に関しては、授業内の筆記試験および定期試験（50%）。教授法に関する発表（30%）。教壇実習への取り組み（20%）。		

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	担当者	柿沼 義孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>ドイツ語の基礎知識の確認と補強、および外国語教授法の知識と教案の作成などの実務的な技能の獲得を目標とする。</p> <p>ドイツ語科教育法Ⅱにおいては、複数回の模擬授業を通じて、ドイツ語を教えるという経験の獲得を目指したい。模擬授業の際には担当者の授業をビデオ撮影し、担当者自らが自分の授業を振り返り、さらに参加者全員で講評し合うことができるようにする。</p>		<p>第1回： オリエンテーション 第2回： ドイツ語基礎知識確認試験 第3回： 教壇実習の割り振りについて 第4回： 教壇実習（動詞の人称変化を中心に） 第5回： 教壇実習（格変化を中心に） 第6回： 教壇実習（3基本形を中心に） 第7回： 教壇実習（受動態を中心に） 第8回： 教壇実習（接続法を中心に） 第9回： 教壇実習（ビデオを使つての反省会） 第10回： 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心） グループA 第11回： 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心） グループB 第12回： 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心） グループC 第13回： 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心） グループD 第14回： 教壇実習（コミュニケーションあるいは読解中心） グループE</p>	
到達目標	ドイツ語教育の歴史および現状と課題を理解し、また外国語学習・教育に関する基礎的理論を習得し、ドイツ語科指導に関して必要な事柄を分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修では、ドイツ語文法・教授法についての学修事項を確認する。また教壇実習では教案を作成する。事後学修では、それぞれの授業で行われた議論を振り返り、より良い教授法・授業運営へ向けて再検討する。		
テキスト	なし		
参考文献	外国語教育・理論から実践まで・（松野和彦 著、吉島茂朝日出版社）外国語の学習、教授、評価ヨーロッパ共通参照枠（吉島茂、大橋理枝 訳・編、朝日出版社） ドイツ語教授法・科学的基盤作りと実践に向けての課題（吉島茂、境一三 著、三修社）学習指導要領（中学校・高等学校）（最新版 文部科学省）		
評価方法	ドイツ語文法と教授法の基礎知識に関しては、授業内および定期試験の筆記試験（50%）。教壇実習への取り組み（50%）。		

13年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅲ	担当者	上田 浩二
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>中学・高校で（あるいは大学でも）「訳す」というと、授業で当てられてから口頭でなんとか日本語らしきものにすると思うだろうが、それは「訳読」という昔からの方法であって、①単語を調べてきたか、②文章の構造を理解したかのチェックが目的であり、「翻訳」とは異なる。翻訳は、この①と②を前提にして、日本語として完成された文章に転換することであって、原文の単語や構造をそのまま日本語に置き換えることではない。そのためには、「どのような情報を伝えようとしているのか」、「なにを言いたいのか」をしっかりと理解して、読むひとが誤解の余地なく分かる日本語にすることだ。もちろん専門用語や時事用語は、きちんと調べて訳さなければならない。授業では毎週ドイツ語のテキスト（15～30行）程度を渡すので、それを訳してメールで提出してもらい、それを整理して解説・コメントする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 実例で授業の進め方を紹介 2. 日本に関するドイツ語テキストの訳例 3. 日本社会に関するドイツ語テキスト 4. 日本人に関するドイツ語テキスト 5. ドイツ社会に関するテキスト 6. ドイツ人の傾向に関するテキスト 7. ドイツの政治関連のテキスト 8. 中間まとめ 9. 国際問題に関する新聞記事 10. 国内問題に関する新聞記事 11. 外国人問題に関する新聞記事 12. 長めの日本関連記事 13. 長めのドイツ事情に関する記事 14. まとめ 	
到達目標	ドイツ語教授法の理論及び学習指導要領に基づき、より実践的な教授法、指導技術、教材開発力を習得し、ドイツ語科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回、課題を出すのでそれをメールで提出する。		
テキスト	教員が用意する。		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業3週目から提出された訳（全12回）を、各回10点満点で採点し、その合計点で評価する（100%）。		

13年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅳ	担当者	上田 浩二
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>外国語教育では、「読む」・「聞く」・「話す」・「書く」を4技能と呼び、このうち前者ふたつは「パッシブ」な能力、後者ふたつは「アクティブ」な能力としている。少し考えてみると分かるが、一定の年齢になってから学ぶ外国語の場合には、一般的に言って前者ふたつの能力が高くないのに後者が高いということはある得ない。その意味で、あまり注目されないこの基礎部分に当たる能力の向上のために、実際に課題をこなしながら考えていく。そのうえで、出てくる表現を使いながら、話す・聞くことの練習につなげていく方法を学んでいく。かなりの準備が必要なので、やる気と時間が必要となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 実例で授業方法を紹介 2. 単語に関わる翻訳課題 3. 熟語に関わる翻訳課題 4. 単純な文構造の翻訳 5. 複雑な文構造の翻訳 6. 内容展開に関わる課題 7. 文脈理解に関わる課題 8. 内容要約の課題 9. 中間まとめ 10. 聞き取りへの導入 11. 短文中心の聞き取り 12. 聞き取った長めのテキストの聞き取り 13. 聞き取った内容をまとめる課題 14. まとめ 	
到達目標	ドイツ語教育に関する理論や指導技術についてさらに理解を深め、学習指導要領に基づくドイツ語教育に関する実践的指導力、ドイツ語科教員としての高い資質・能力を習得し、より質の高いドイツ語科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	実例として毎週さまざまな課題を課し、授業の前日までに課題の訳を提出してもらおう。		
テキスト	教員が配布。		
参考文献	特になし。		
評価方法	10回の課題に答えをメールで提出させ、その合計点で評価とする（100%）。		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅰ（英語学科・交流文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は秋学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	英語科教科教育法Ⅰ（英語学科・交流文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本における英語教育の歴史的変遷と課題を理解し、第二言語習得に関する理論や研究も参考にしつつ、現代により合致した教育方法への応用を検討する。また日本の中学校及び高等学校の英語教育の基軸となる学習指導要領や外国語(英語)の学習・指導に関する知識について理解を深め、教科書や教材の分析を通して授業指導の基礎を身につける。学習指導要領の3つの資質・能力を理解し、学習到達目標の設定、年間指導計画、単元計画、各授業の指導計画について理解する。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 学習指導要領の3つの資質・能力の理解 第2回：第二言語・外国語習得のプロセスに関する基礎的理論に基づいた授業指導 第3回：中学校 外国語（英語）の学習指導要領 第4回：中学校 外国語（英語）の教材・教科書と分析 第5回：高校 外国語（英語）の学習指導要領 第6回：高校 外国語（英語）の教材・教科書と分析 第7回：小学校 外国語活動・外国語の学習指導要領や教材及び小中高を通じた英語教育 第8回：学習到達目標の設定と指導計画について 第9回：観点別学習状況の評価とそれに基づく評価規準の設定や評定への総括について 第10回：ICT機器を活用した指導と教材の在り方 第11回：異文化理解に関する指導 第12回：英語でのインタラクションについての理解と指導 第13回：英語による授業展開とALT等とのチームティーチング 第14回：生徒の特性・習熟度に応じた指導</p>	
到達目標	英語教育の背景にある理論と課題を理解し中学校・高校の外国語(英語)の学習指導要領と教科書について理解する。小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領及び教材・教科書について知り小中高の連携について理解する。学習到達目標と指導計画について理解し指導案を書くことができる。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学習指導要領を読み、理解する。現行の学習指導要領下で書かれた検定教科書の内容を把握する。 事後学修：授業中に提示される課題を行う。		
テキスト	『学習指導要領』（小学校・中学校・高等学校）『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編』（中学校・高等学校）（最新版 文部科学省）		
参考文献	授業中に適宜資料を配布する。		
評価方法	課題レポート（30%）、小テスト（30%）、定期試験（40%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅱ（英語学科・交流文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方、各領域における指導法についての知識と技能、及び各領域別の到達目標の設定についてさらに理解を深めるとともに、授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：中学校及び高校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回：聞くことの指導と他領域と統合させた言語活動 第4回：読むことの指導と他領域と統合させた言語活動 第5回：話すこと（やり取り・発表）の指導と他領域と統合させた言語活動 第6回：書くことの指導と他領域と統合させた言語活動 第7回：英語の音声的な特徴に関する指導 第8回：文字・語彙・表現に関する指導 第9回：文法に関する指導 第10回：「聞く・読む・話す（やり取り・発表）・書く」能力の測定と（パフォーマンス）評価 第11回：学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第12回：模擬授業と振り返り グループ1 第13回：模擬授業と振り返り グループ2 第14回：模擬授業と振り返り グループ3</p>	
到達目標	Iで学習した理論や知識を基に、中学校及び高等学校における4技能5領域の指導及び各領域を支える音声、文字、語彙・表現、文法の指導とその評価について基本的な知識と技能を身につけ、実践できる。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学習指導要領、検定教科書の内容を理解する。学習教材の収集や学習指導案作成を行う。 事後学修：授業で学習した指導方法や理論を復習する。模擬授業をふり返って自己評価と学習指導案の改善を行う。		
テキスト	『学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編（中学校・高等学校）』（最新版 文部科学省）授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	『行動志向の英語科教育の基礎と実践－教師は成長する』（JACET 教育問題研究会、三修社）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅲ（英語学科・交流文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方についてさらに理解を深め、領域統合型言語活動・文法指導とその評価についての知識と技能を深めるとともに授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：中学校及び高校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回：領域統合型の言語活動の指導：2技能の統合とインタラクション 第4回：領域統合型の言語活動の指導：3技能以上の統合と協働学習 第5回：文法に関する指導：PPPによる指導 第6回：文法に関する指導：コミュニケーション・タスクによる指導 第7回：教材研究・ICT等の活用と指導 第8回：英語で行うインタラクションと授業指導での活用 第9回：学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第10回：模擬授業と振り返り グループ1 第11回：模擬授業と振り返り グループ2 第12回：模擬授業と振り返り グループ3 第13回：模擬授業と振り返り グループ4 第14回：模擬授業と振り返り グループ5</p>	
到達目標	Iで学習した理論や知識を基に、複数の領域を統合した言語活動の指導、各領域を支える文法の指導及びそれらの評価について基本的な知識と技能を身につけ、実践できる。また教材やICTの活用方法や英語による授業展開について理解する。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学習指導要領、検定教科書の内容を理解する。学習教材の収集や学習指導案作成を行う。 事後学修：授業で学習した指導方法や理論を復習する。模擬授業をふり返って自己評価と学習指導案の改善を行う。		
テキスト	『学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編（中学校・高等学校）』（最新版 文部科学省）授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	『英語で教える英語の授業－その進め方・考え方』（望月正道他著、大修館書店）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅳ（英語学科・交流文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>年間を通じた学習指導到達目標に基づく評価の在り方や観点別学習状況の評価に基づく各単元における評価規準の設定、評定への総括の仕方、言語の領域別にみる能力の測定と評価方法など、評価についてさらに理解を深める。また新学習指導要領で強調されている主体的・対話的学習や英語教育における異文化理解に関する指導、言語技能とコンテンツを並行して学習するコンテンツ重視の授業法など、グローバル社会においてより重要となる英語教育の新しいアプローチについても理解を深める。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：観点別評価と評価規準 第3回：テストに関する理論と実践 第4回：理解の能力の測定と評価 第5回：「話す（やり取り・発表）」能力の測定とパフォーマンス評価 第6回：「書く」能力の測定とパフォーマンス評価 第7回：CAN-DOリストと学習者による自己評価 第8回：主体的・対話的授業の指導と授業体験 第9回：主体的・対話的授業の授業実践と振り返り 第10回：異文化理解に関する指導と授業体験 第11回：異文化理解に関する授業実践と振り返り 第12回：コンテンツ重視の指導法と授業体験 第13回：コンテンツ重視の授業実践と振り返り 第14回：生徒の特性や個人差に応じた指導と授業実践</p>	
到達目標	<p>観点別評価とそれに基づく評価基準の設定や評定への総括について理解する。言語能力の測定と評価について理解し、指導に生かすことができる。異文化理解に関する指導、主体的・対話的指導、コンテンツ重視の指導について理解し、授業実践に生かすことができる。生徒の特性・習熟度への対応について理解し授業指導に生かすことができる。</p>		
事前・事後学修の内容	<p>事前学修：学習指導要領、検定教科書の内容を理解する。学習教材の収集や学習指導案作成を行う。事後学修：授業で学習した指導方法や理論を復習する。模擬授業をふり返って自己評価と学習指導案の改善を行う</p>		
テキスト	<p>『学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編（中学校・高等学校）』（最新版 文部科学省）授業中に適宜資料を配布する。</p>		
参考文献	<p>『英語4技能評価の理論と実践：CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』（望月昭彦他編著、大修館書店）</p>		
評価方法	<p>模擬授業（40%）、自己評価レポート（20%）、指導案（20%）、課題レポート（20%）</p>		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

13年度以降	英語科教科教育法 I (言語文化学科生)	担当者	安間 一雄
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本における英語教育の歴史の変遷と課題を理解し、第二言語習得に関する理論や研究も参考にしつつ、現代により合致した教育方法への応用を検討する。また日本の中学校及び高等学校の英語教育の基軸となる学習指導要領や外国語(英語)の学習・指導に関する知識について理解を深め、教科書や教材の分析を通して授業指導の基礎を身につける。学習指導要領の3つの資質・能力を理解し、学習到達目標の設定、年間指導計画、単元計画、各授業の指導計画について理解する。</p>		<p>第1回： オリエンテーション 学習指導要領の3つの資質・能力の理解 第2回： 第二言語・外国語習得のプロセスに関する基礎的理論に基づいた授業指導 第3回： 中学校 外国語(英語)の学習指導要領 第4回： 中学校 外国語(英語)の教材・教科書と分析 第5回： 高校 外国語(英語)の学習指導要領 第6回： 高校 外国語(英語)の教材・教科書と分析 第7回： 小学校 外国語活動・外国語の学習指導要領や教材及び小中高を通じた英語教育 第8回： ICT機器を活用した指導と教材のあり方 第9回： 学習到達目標と指導計画 第10回： 教案の書き方と創意工夫 第11回： テストに関する理論と実践 第12回： 評価に関する理論と実践 第13回： 英語による授業展開とALT等とのチームティーチング 第14回： 生徒の特性・習熟度に応じた指導</p>	
到達目標	英語教育の背景にある理論と課題を理解し中学校・高校の外国語(英語)の学習指導要領と教科書について理解する。小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領及び教材・教科書について知り小中高の連携について理解する。学習到達目標と指導計画について理解し指導案を書くことができる。		
事前・事後学修の内容	当然のことであるが、教科書の取扱箇所を事前に読んで十分理解しておくことが前提である。また、論文報告等のプレゼンテーションは早めにハンドアウトを用意し、教員のチェックを受けておくことが求められる。		
テキスト	『学習指導要領(小学校・中学校・高等学校)』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編(中学校・高等学校)』(最新版 文部科学省)		
参考文献	授業中に適宜資料を配布する。		
評価方法	課題レポート(30%)、小テスト(30%)、定期試験(40%)		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅱ（言語文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方、各領域における指導法についての知識と技能、及び各領域別の到達目標の設定についてさらに理解を深めるとともに、授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。		第1回： オリエンテーション 第2回： 中学校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回： 聞くことの指導 第4回： 読むことの指導 第5回： 話すこと（やり取り・発表）の指導 第6回： 書くことの指導 第7回： 英語の音声的な特徴に関する指導 第8回： 文字・語彙・表現に関する指導 第9回： 中学校の学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第10回： 模擬授業と振り返り グループ1 第11回： 模擬授業と振り返り グループ2 第12回： 模擬授業と振り返り グループ3 第13回： 模擬授業と振り返り グループ4 第14回： 模擬授業と振り返り グループ5	
到達目標	Iで学習した理論や知識を基に、中学校及び高等学校における「5つの領域」の指導及び各領域を支える音声、文字、語彙・表現の指導とその評価について基本的な知識と技能を身につけ、実践できる。		
事前・事後学修の内容	第2回～第9回：（事前）教科書の該当箇所や論文を読む、（事後）テーマごとに指示する課題を遂行する。第10回～第14回：模擬授業担当者－事前準備；（事後）振り返りレポート作成、生徒役の学生－（事前）各模擬授業指導案の予習；（事後）参加した模擬授業の振り返りレポート作成。		
テキスト	『学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編（中学校・高等学校）』（最新版 文部科学省）授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	『行動志向の英語科教育の基礎と実践－教師は成長する』（JACET 教育問題研究会、三修社）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13年度以降	英語科教科教育法Ⅲ（言語文化学科生）	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
学習到達目標に基づいた指導計画・授業の組み方についてさらに理解を深め、領域統合型言語活動・文法指導とその評価についての知識と技能を深めるとともに授業観察、指導案の作成、模擬授業の実践、講評などによって授業実践力の基礎を身につける。		第1回： オリエンテーション 第2回： 高校の授業 ビデオによる観察と討論 第3回： 領域統合型の言語活動の指導：2技能の統合とインタラクション 第4回： 領域統合型の言語活動の指導：3技能以上の統合と協働学習 第5回： 文法に関する指導：PPPによる指導 第6回： 文法に関する指導：コミュニケーション・タスクによる指導 第7回： 教材研究・ICT等の活用と指導 第8回： 英語で行うインタラクションと授業 第9回： 高等学校の学習到達目標に基づく授業の組み立てと指導案作成 第10回： 模擬授業と振り返り グループ1 第11回： 模擬授業と振り返り グループ2 第12回： 模擬授業と振り返り グループ3 第13回： 模擬授業と振り返り グループ4 第14回： 模擬授業と振り返り グループ5	
到達目標	Iで学習した理論や知識を基に、複数の領域を統合した言語活動の指導、各領域を支える文法の指導及びそれらの評価について基本的な知識と技能を身につけ、実践できる。また教材やICTの活用方法や英語による授業展開について理解する。		
事前・事後学修の内容	第2回～第9回：（事前）教科書の該当箇所や論文を読む、（事後）テーマごとに指示する課題を遂行する。第10回～第14回：模擬授業担当者－事前準備；（事後）振り返りレポート作成、生徒役の学生－（事前）各模擬授業指導案の予習；（事後）参加した模擬授業の振り返りレポート作成。		
テキスト	『学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）』『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』『学習指導要領解説 外国語編（中学校・高等学校）』（最新版 文部科学省）授業中に適宜資料を配布する		
参考文献	『英語で教える英語の授業－その進め方・考え方』（望月正道他著、大修館書店）		
評価方法	指導案（20%）、模擬授業（40%）、自己評価エッセイ（20%）、課題レポート（20%）		

13 年度以降	英語科教科教育法Ⅳ（言語文化学科生）	担当者	安間 一雄
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この授業では、中学校・高等学校の英語教員を目指す学生が身につけておくべきさまざまな理論や技術を選択的に取り上げて、それらに対する理解を深めると共に、個別の教育環境に応じて柔軟に対応できる運用能力を身につけるための訓練を行う。特に英語科と他教科との統合型授業を設計・教授するための技術を身につけるべく様々な新しい試みを行う。</p>		<p>第1回：英語教育に関する基礎的理論：シラバスと教材（学習指導要領を含む） 第2回：内容重視の授業における教材…生徒の特性・個人差を考慮に入れた指導法を考える。 第3回：オーセンティックな教材の意義…活きた英語並びに英語圏の文化を理解するための指導法を学ぶ。 第4回：教材研究：学習項目の配置（文法）…英語の文法に関わる指導法を学ぶ。 第5回：教材研究：学習項目の配置（機能・概念）…英語の表現に関わる指導法を学ぶ。 第6回：教材研究：学習項目の配置（語彙・音声その他）…英語の語彙及び音声に関わる指導法を学ぶ。 第7回：科目統合型授業：目標と意義…英語でのインターアクションの指導についても学ぶ。 第8回：科目統合型授業：素材の選定と編集・発表 Primary stage 第9回：科目統合型授業：素材の選定と編集・発表 Secondary stage 第10回：科目統合型授業：素材の選定と編集・発表 Tertiary stage 第11回：科目統合型授業：活動展開の工夫…ティームティーチングに関わる指導法も学ぶ。 第12回：科目統合型授業：評価 第13回：テスト設計…聞くこと・読むこと・話すこと・書くことの技能並びに文法・音声・文字・語彙などの観点に関わるテストを作成し結果を評価する際の技術を学ぶ。 第14回：ポートフォリオ設計…聞くこと・読むこと・話すこと・書くことの技能並びに文法・音声・文字・語彙などの観点に関わる学習者主体の評価方法を作成し結果を評価する際の技術を学ぶ。</p>	
到達目標	英語科指導に関わる基礎的理論の知識を身につけると共に、授業で必要となる教材や教案の扱いに習熟することによって、さまざまな場面における実践的な運用力向上を目標とする。		
事前・事後学修の内容	各授業回の内容を踏まえて事前に自発的に提供素材を用意し、積極的に関与するシナリオを考えておくこと。また、授業後は改善点を記録し、次回に備えて発表の予行演習を行うこと。		
テキスト	New Horizon English Course 2（東京書籍、2016） 授業配付資料		
参考文献	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） その他授業時に指示する。		
評価方法	定期試験：40%、小テスト・授業中の課題・模擬授業：30%、授業への積極的参加姿勢：30%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅰ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>外国語学習における「良い学習者」を育成するための指導法を考え、「聞く」「話す」能力を身につけるための学習活動を組み立てる方法を学ぶ。視聴覚教材や音声教材の効果的な使用法と発音記号を用いた発音の指導法を理解し、グループ作業や発表、模擬授業を通して実践する。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 外国語学習「学ぶ立場」と「教える立場」 第2回：「良い学習者」とは何か —外国語の授業における育成について— (グループディスカッションとグループ発表) 第3回：「聞く」ことの指導 —発音記号、発音の指導、聴解練習について— 第4回：ICT機器を活用した教材研究 —「聞く」活動を中心に— 第5回：模擬授業と振り返り（「聞く」活動を中心に） 第6回：模擬授業と振り返り（前回の反省を踏まえて） 第7回：模擬授業と振り返り（「聞く」活動の総括） 第8回：話すことの指導 —学習者同士のやりとりの指導— 第9回：簡単なスピーチと相手に伝わる話し方の指導（グループ作業とグループ発表） 第10回：ICT機器を活用した教材研究 —「話す」活動を中心に— 第11回：「話す」活動とコミュニケーション・ストラテジー —発信のための指導— 第12回：模擬授業と振り返り（「話す」活動を中心に） 第13回：模擬授業と振り返り（前回の反省を踏まえて） 第14回：模擬授業と振り返り（「話す」活動の総括）</p>	
到達目標	フランス語教育を中心に、外国語教育や言語教育について「学ぶ側」と「教える側」の双方からアプローチすることにより、より効果的な外国語学習とは何かについて理解を深める。「I」では主に「聞く」「話す」の指導について理解し、実践する。		
事前・事後学修の内容	外国語学修について学修者の立場からこれまで実践して来た学修方法を振り返り、それらの学修について教える立場からも学修活動それぞれの目的や方法、効果などを考えてまとめる。その上で何が効果的な学修に結び付くのかを考察しまとめる。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） 『フランス語をどのように教えるか』（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	授業中のグループ作業・グループ発表（30%）、課題・授業への取り組み（20%）、定期試験（50%）		

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅱ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>フランス語の辞書の種類とその使い方を理解し、辞書の効果的な活用法について「読むこと・書くこと」の指導法を通して理解を深める。また「読む」「書く」能力を身につけるための学習活動とその指導方法を、グループ作業や発表、模擬授業を通して実践する。</p>		<p>第1回：オリエンテーション フランス語の辞書の種類と特徴、辞書の活用法 第2回：和仏辞書の活用法—使える表現を増やすための指導— 第3回：「読む」ことの指導 —辞書を使って簡単な読み物を読む指導— 第4回：文法（構文）、語彙、表現と読解の指導 (グループディスカッション) 第5回：「読む」活動のための教材と学習活動 (グループ作業とグループ発表) 第6回：ICT機器を活用した教材研究 —「読む」活動を中心に— 第7回：模擬授業と振り返り（「読む」活動を中心に） 第8回：模擬授業と振り返り（前回の反省を踏まえて） 第9回：模擬授業と振り返り（「読む」活動の総括） 第10回：「書く」ことの指導 —和仏辞典の使い方と簡単な文の作成の指導— 第11回：和文仏訳と自由作文の指導と効果的な訂正方法について (グループ作業と発表) 第12回：ICT機器を活用した教材研究 —「書く」活動を中心に— 第13回：模擬授業と振り返り（「書く」活動を中心に） 第14回：模擬授業と振り返り（前回の反省と「書く」活動の総括）</p>	
到達目標	フランス語教育を中心に、外国語教育や言語教育について「学ぶ側」と「教える側」の双方からアプローチすることにより、より効果的な外国語学習とは何かについて理解を深める。「II」では主に「読む」「書く」の指導について理解し、実践する。		
事前・事後学修の内容	外国語学修について学修者の立場からこれまで実践して来た学修方法を振り返り、それらの学修について教える立場からも学修活動それぞれの目的や方法、効果などを考えてまとめる。その上で何が効果的な学修に結び付くのかを考察しまとめる。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） 『フランス語をどのように教えるか』（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	授業中のグループ作業・グループ発表（30%）、課題・授業への取り組み（20%）、定期試験（50%）		

13年度以降	フランス語科教科教育法Ⅲ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
フランス語教育に携わっていく上で必要な言語教育理論や実践方法について、基礎知識を習得する。フランス語教育の歴史の変遷及び日本におけるフランス語教育の変遷を理解し、中学校・高校の外国語（フランス語）の学習指導要領と、日本における中学校・高校でのフランス語教育の現状や問題点について理解を深める。教材分析や教案作成などの課題に取り組みながら、学習指導要領に示されている四つの言語活動を取り入れた指導計画について理解する。		第1回：オリエンテーション 第2回：中学校・高校 外国語（フランス語）の学習指導要領 第3回：コースデザイン、カリキュラムデザイン、シラバスデザイン 第4回：教案の書き方（個人での教案作成作業） 第5回：言語教育の方法の変遷 - 古代から現代まで - 第6回：フランス語教授法の変遷 - 文法訳読法から SGAV（視聴覚方式全体構造教授法）へ - 第7回：フランス語教授法の変遷 - SGAV の反省からコミュニカティブ・アプローチへ - 第8回：様々な教授法から考える効果的な教授法（ディスカッションとグループ作業） 第9回：日本におけるフランス語教育の変遷 第10回：中学校・高校におけるフランス語教育の現状と問題点 第11回：日本で作成されたフランス語教材の種類と分析 第12回：フランスで作成されたフランス語の総合教材（méthodes）種類と分析 第13回：教材分析のための枠組み作成と教材分析（グループ作業と発表） 第14回：四技能を取り入れた授業 - 授業での情報機器などの活用 -	
到達目標	フランス語教育の基本となる理論と中学校・高校の外国語（フランス語）の学習指導要領と様々な教授法とテキストについて理解する。そして、基礎的な学習指導理論を理解した上で、具体的な授業設計を行う		
事前・事後学修の内容	フランスおよび日本で作成されたフランス語テキストの教材分析をする。また、授業の組み立て方の実践として、指示された項目についてアクティビティを取り入れた教案を作成する。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） 『フランス語をどのように教えるか』（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	グループ作業と発表（40%）、授業中の講義ノート（20%）・レポート課題（40%）		

13年度以降	フランス語科教科教育法Ⅳ	担当者	中村 公子
講義目的、講義概要		授業計画	
教師の役割（informateur, animateur, évaluateur）と教室空間の利用、activity の組み立て方、評価法と授業観察法を理解し、I で習得した知識も含めて模擬授業を実践する。模擬授業は学生一人あたり20分程度を少なくとも3回以上は担当する。一回の模擬授業については、教案作成と授業準備を行った上で模擬授業を実施し、実施後は自身の模擬授業を振り返って次回の模擬授業への課題を見つける。その後、個別に事後指導を行う。数回の積み重ねから、自分に合った授業スタイルを模索する。		第1回：オリエンテーション 第2回：教師の役割と教室空間の利用 第3回：学習活動・activity の組み立て方・（グループ作業） 第4回：学習活動・アクティブ・ラーニングと取り入れた授業 -（グループ作業） 第5回：学習活動・タスクを取り入れた授業・（グループ作業） 第6回：Activity の実践（個人） 第7回：模擬授業 1 - 授業観察の方法と伝える・伝わる授業 - 第8回：模擬授業 2 - 授業の流れ・教師の役割・教室空間の利用 - 第9回：模擬授業 3 - 情報機器やオーディオ機器の利用した授業 - 第10回：授業観察法と評価について 第11回：模擬授業 4 - 生徒に積極的な授業参加を促す授業 - 第12回：模擬授業 5 - 各自の課題から - 第13回：模擬授業の総括 第14回：教育実習に向けて・注意点と心構え -	
到達目標	フランス語科教科教育法Ⅳで学習した理論や知識を基に、指導法や評価法を実践を通して身につける。授業観察法と授業での情報機器利用、アクティブ・ラーニングを取り入れた活動の指導法を理解し、実践する。		
事前・事後学修の内容	実際の授業時間を想定して教案を作成し、必要な補助プリントや教材を準備する。模擬授業後に、実践した授業を振り返り、反省点と今後の自分への課題をまとめる。また、課題に対しての自己評価を行う。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） 『フランス語をどのように教えるか』（中村啓佑 長谷川富子著、駿河台出版社）		
参考文献	Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon (DISSON, Agnès, Presses Universitaires d' Osaka)		
評価方法	教案作成（10%）、授業準備（10%）、模擬授業（40%）、事後指導（10%）、レポート課題（30%）		

03年度以降	社会科教育法 I	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>社会科教育法 I では、社会科の基本的性格を明らかにするとともに、学習指導要領に基づいて、教科の内容について基本的知識を身につける。また、今日社会科教育に課されている課題について考える。</p>		<p>第1回：社会科教員の1日 第2回：社会科成立の背景と意義 第3回：社会科の教育課程とその変化（1） 初期社会科 第4回：社会科の教育課程とその変化（2） 分野制社会科の成立と展開 第5回：社会科の教育課程とその変化（3） 知識から方法へ 第6回：社会科の教育内容（1） 地理的分野（1） 目標と内容 第7回：社会科の教育内容（2） 地理的分野（2） 授業の展開 第8回：社会科の教育内容（3） 歴史的分野（1） 目標と内容 第9回：社会科の教育内容（4） 歴史的分野（2） 授業の展開 第10回：社会科の教育内容（5） 公民的分野（1） 目標と内容 第11回：社会科の教育内容（6） 公民的分野（2） 授業の展開 第12回：社会科の今日的課題（1） 環境と人権 第13回：社会科の今日的課題（2） 国際化と情報化 第14回：まとめ</p>	
到達目標	中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。学習指導要領に基づいて、社会科の理念、内容、授業方法について理解する。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学校学習指導要領（過去の版も含む）を熟読する。現行の学習指導要領の下で書かれている検定済教科書の内容を把握する。事後学修：授業中に提示される課題を行う。		
テキスト	文部省『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版		
参考文献	授業中に指示される。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）。総合点 60 点以上合格。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	社会科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
社会科の基本的性格を明らかにするとともに、地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標と内容、授業展開と評価の方法を学ぶ。併せて、授業の諸形態と学習方法の特性について理解する。		第1回：社会科の目標と身に着けるべき力 第2回：社会科成立の背景と初期社会科 第3回：教育課程とその変化（1）分野制社会科の成立 第4回：教育課程とその変化（2）知識から方法へ 第5回：学習指導要領を読む 第6回：地理的分野の目標と内容 第7回：地理的分野の授業展開と評価 第8回：歴史的分野の目標と内容 第9回：歴史的分野の授業展開と評価 第10回：公民的分野の目標と内容 第11回：公民的分野の授業の展開と評価 第12回：授業形態研究—講義式授業の特質と課題（プレゼンテーションソフト等ICTを活用した教材研究を含む） 第13回：授業形態研究—グループ学習と調査・発表学習 第14回：授業形態研究—臨地学習（スマートフォン等ICTを活用した教材研究を含む）	
到達目標	中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。主として授業実践のための様々な知識・技能(学習指導案の作成も含む)を身につけ、授業を行うことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	学習指導要領、教科書を熟読する。学習教材等の収集など授業中に具体的な課題が示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領 社会編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）。総合点 60 点以上合格。		

03年度以降	社会科教育法Ⅲ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
社会科の授業を行うための教材収集、教材作成、授業設計、学習指導案の作成、授業展開と評価の方法を具体的に学ぶ。また模擬授業を通じて実践力を養う。		第1回：社会科の学習指導計画 第2回：授業と学習指導案 第3回：教材の収集と活用（1）文献資料等（Web上の素材を含む） 第4回：教材の収集と活用（2）実物教材等 第5回：教材の収集と活用（3）地域資源の活用（ICT機器を使った資料収集を含む） 第6回：教材の収集と活用（4）シミュレーション教材 第7回：教材の収集と活用（5）インターネットの活用を含む教材研究・授業設計への活用 第8回：授業設計（1）授業の構成と発問 第9回：授業設計（2）板書とワークシート 第10回：授業設計（3）学習評価とテスト問題 第11回：学習指導案の作成 第12回：模擬授業（1）地理的分野 授業分析と授業の改善 第13回：模擬授業（2）歴史的分野 授業分析と授業の改善 第14回：模擬授業（3）公民的分野 授業分析と授業の改善	
到達目標	授業の実践に必要な学習指導案を作成する力、指導技術を習得し、社会科の授業の在り方について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業時間は模擬授業の実施が中心となるので、学習指導要領の作成などは事前学修の課題となる。事後学修としては模擬授業の反省を踏まえて、より良い学習指導案の作成を行う。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領 社会編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
参考文献	授業中に指示される。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）。総合点 60 点以上合格。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	地理・歴史科教育法 I	担当者	鈴木 孝
講義目的、講義概要		授業計画	
授業力向上のための講義を中心に、アクティブラーニングによる演習を含めた授業となる。		第1回：歴史認識の所在と変遷を明らかにし、歴史教育者としての資質を高める。 第2回：歴史教育における世界史の意義をさぐり、生徒の主体的な学習力向上を図れるようにする。 第3回：学習指導要領での世界史の目標と取り扱い方を明らかにして授業力の基礎をつくる。 第4回：教材研究の方法を複眼的にとらえ、学問的な背景の重要性を理解する。 第5回：世界史Aの内容と特色を理解し、教材（インターネットを通して得られる史資料を含む）を有効活用する技能をみがく。 第6回：諸地域世界の特質をとらえ、世界史Aの授業設計にいかす方法を習得する。 第7回：ネットワーク論から、世界史Aにおける諸地域世界の交流をアクティブにとらえる。 第8回：近現代の世界の授業指導案を作成検討し、主題学習への応用力をみがく。 第9回：世界史Bの内容と特色を理解し、教材活用力とともに自ら教材を開発する能力をみがく。 第10回：時間軸と空間軸から世界史Bの授業設計ができるような方法を習得する。（地理情報システムの活用を含む） 第11回：歴史資料の読み解き事例から世界史Bの授業を活性化させる手法をさぐる。 第12回：模擬授業を行い、授業スキルをみがく。 第13回：発展的な授業をめざし、興味・関心を高める「ICT」の活用事例を研究する。 第14回：発展的な授業をめざし、生徒の実態に応じた授業スタイルを実践できるようにする。	
到達目標	高等学校世界史に関する教育法の基礎的知識、および、学習指導要領に基づく実践的な世界史学習指導案を作成できる力と指導技術を習得し、さらに、世界史の授業のあり方について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画にそってあらかじめ設定した課題について事前に調べておき、その授業の内容を発展的にとらえたり、確認したりして必要に応じて小レポートを提出する。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 社会編』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（最新版 文部科学省）『世界史教科書』（各自所有のもの）		
参考文献	授業において随時紹介する。		
評価方法	レポートおよび授業内でのワークの成果を総合的に評価する。（100%）		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	地理・歴史科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理教育の存在意義を明らかにしたのち、地理で身に着けさせる見方・考え方・技能について実践的に学ぶ。また、教科の内容とその学習指導方法を具体的に学んだ後、学習指導案の書いたうえで模擬授業を行う。さらに授業評価と学習評価について検討する。</p>		<p>第1回：地理教育の意義と目標 第2回：日本の地理教育の歩み 第3回：諸外国の地理教育 第4回：学習指導要領をよむ 第5回：地理的見方・考え方および地理的スキルについて 第6回：地図・地球儀の扱い方（1） 地球儀・世界地図 第7回：地図・地球儀の扱い方（2） 地図とGIS（情報機器の活用を含む） 第8回：野外観察・調査の意義と計画 第9回：野外観察の実践（ICTを使った資料収集を含む） 第10回：系統地理の学習指導 第11回：地誌の学習指導 第12回：主題的学習の学習指導 第13回：学習指導計画（学習指導案）の作成 第14回：模擬授業・授業評価と改善・学習評価</p>	
到達目標	高等学校における地理教育の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、授業実践上基礎的な知識・技能の育成を目指す。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校学習指導要領解説地理歴史編を熟読するとともに、これに基づいて書かれた検定教科書の内容を把握する。事後学修：授業中に課題が提示される。授業中に出される課題を行うこと。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 社会編』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）、総合点60点以上合格。		

18年度以前	地理・歴史科教育法Ⅲ	担当者	會田 康範
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>歴史教育のあり方について内容論や方法論などから考察し、理解を深める。そして各自が学習指導案を作成し、それをもとに模擬授業を行う。受講者相互で意見交換し、さらに指導案の改善を図り、高等学校で創造的な日本史の授業を実践できる力を養う。</p>		<p>第1回：歴史教育の目的 第2回：学習指導要領の概要 第3回：学習指導要領と教科書 第4回：教材研究の意義と方法（ICTの活用を含む） 第5回：学習指導計画の立案 第6回：系統的通史学習の指導方法 第7回：探究的テーマ学習の指導方法（ICTの活用を含む） 第8回：歴史系博物館（ホームページ上の史資料等を含む）等の活用方法 第9回：原始・古代の学習指導案の作成、模擬授業、研究協議 第10回：中世の学習指導案の作成、模擬授業、研究協議 第11回：近世の学習指導案の作成、模擬授業、研究協議 第12回：近代の学習指導案の作成、模擬授業、研究協議 第13回：現代の学習指導案の作成、模擬授業、研究協議 第14回：学習評価と授業改善 （これからの歴史教育の課題）</p>	
到達目標	高等学校日本史に関する教育法の基礎的知識、および、学習指導要領に基づく実践的な日本史学習指導案を作成できる力と指導技術を習得し、さらに、日本史の授業のあり方について分析を行い、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	配布資料を事前に精読しておいてください。事後学修として講義内容を再確認してください。小レポートを提出してもらう場合があります。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 社会編』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（最新版 文部科学省）		
参考文献	授業時に適宜紹介する。		
評価方法	レポート（70%）、授業中の態度・取組状況（15%）、リアクションペーパー等の内容（15%）を加味して総合的に評価する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	公民科教育法Ⅰ	担当者	及川 良一
講義目的、講義概要		授業計画	
前半は社会科教育の歴史と意義、中学校学習指導要領（社会）について理解を深め、後半では中学校社会科「公民的分野」の授業研究を実践的に行う。		第1回：社会科教育の意義と課題 第2回：社会科教育の歴史 第3回：社会科カリキュラム論 第4回：中学校学習指導要領（社会）の目標及び内容と全体構造の理解 第5回：中学校学習指導要領（社会）「公民的分野」の目標及び内容に関する研究 第6回：社会科「内容の取扱い」についての研究（情報機器の活用を含む） 第7回：教材及び授業方法についての研究（ICTを活用した教材研究を含む） 第8回：評価と評価方法についての理解及びまとめ 第9回：「政治」分野の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第10回：「政治」分野の授業研究（模擬授業） 第11回：「経済」分野の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第12回：「経済」分野の授業研究（模擬授業） 第13回：「国際社会」分野の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第14回：「国際社会」分野の授業研究（模擬授業）	
到達目標	社会科教育の歴史の変遷、社会科教育の意義や目的、特徴等と、学習指導要領に定める指導内容を理解し、学習指導案や指導計画を策定できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読し課題意識を持って授業に臨むこと。授業後は課題意識を深め、次回授業内容への課題意識につなげること。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『中学校学習指導要領解説 社会編』（最新版 文部科学省） 『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 公民編』（最新版 文部科学省）		
参考文献	『社会・地歴・公民科教育法』（臼井嘉一 柴田義松編著 学文社）		
評価方法	理論編テスト（40%）、指導案（20%）、模擬授業（20%）、課題論文（20%）		

18年度以前	公民科教育法Ⅱ	担当者	及川 良一
講義目的、講義概要		授業計画	
前半は公民科教育の歴史と意義、高等学校学習指導要領（公民）について理解を深め、後半では公民科各科目の授業研究を実践的に行う。		第1回：公民・公民科教育の意義と課題 第2回：公民・公民科教育の歴史 第3回：高等学校社会科～公民科カリキュラム論 第4回：高等学校学習指導要領（公民）の目標及び内容の全体構造の理解 第5回：高等学校学習指導要領（公民）の「内容の取扱い」に関する理解（情報機器の活用を含む） 第6回：公民科の指導方法についての研究（情報機器の活用を含む） 第7回：公民科の教材についての研究（ICTを活用した教材研究を含む） 第8回：「公民科」の評価と評価方法についての理解及びまとめ 第9回：「現代社会」の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第10回：「現代社会」の授業研究（模擬授業） 第11回：「倫理」の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第12回：「倫理」の授業研究（模擬授業） 第13回：「政治・経済」の教材及び指導方法の研究（学習指導案の作成） 第14回：「政治・経済」の授業研究（模擬授業）	
到達目標	公民科教育の歴史の変遷、公民科教育の意義や目的、特徴等と、学習指導要領に定める指導内容を理解し、学習指導案や指導計画を策定できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読し課題意識を持って授業に臨むこと。授業後は課題意識を深め、次回授業内容への課題意識につなげること。		
テキスト	『中学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省） 『中学校学習指導要領解説 社会編』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 公民編』（最新版 文部科学省）		
参考文献	『社会・地歴・公民科教育法』（臼井嘉一 柴田義松編著 学文社）		
評価方法	理論編テスト（40%）、指導案（20%）、模擬授業（20%）、課題論文（20%）		

03年度以降	情報科教育法Ⅰ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
情報科の基本的性格を明らかにするとともに、普通教科並びに専門教科の目標と内容を理解し、具体的な内容に関して教材作成を学ぶ。		第1回：オリエンテーション—高校で学んだ授業を振り返る。 第2回：社会科成立の背景と意義 第3回：普通教科「情報」の目的 第4回：普通教科「情報」の科目構成と科目の特色 第5回：専門教科「情報」の目的 第6回：専門教科「情報」の科目構成とその内容 第7回：「情報」における学習評価 第8回：教材研究（1）情報活用と表現 第9回：教材研究（2）コミュニケーション 第10回：教材研究（3）ネットワークシステム 第11回：教材研究（4）モデル化とシミュレーション 第12回：教材研究（5）情報化と社会・情報モラル 第13回：教材研究（6）アルゴリズム 第14回：教材研究（7）図形と画像の処理	
到達目標	高等学校において、情報科を担当するための基礎となる事柄を習得する。学習指導要領に基づいて、情報科の理念、内容、授業方法について理解する。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校学習指導要領解説情報編を熟読するとともに、これに基づいて書かれた検定済教科書の内容を把握する。事後学修：授業中に課題が提示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 情報編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）。総合点60点以上合格。		

03年度以降	情報科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
先進校授業参観、年間学習指導計画・学習指導案の作成、先進校授業参観、模擬授業を行う。		第1回：普通教科「情報」の特性と年間計画 第2回：専門教科「情報」の科目配置と年間計画 第3回：「情報」学習指導の実際（施設見学） 第4回：「情報」学習指導の実際（授業見学） 第5回：「情報」学習指導の実際（現場教員との議論） 第6回：「情報」授業の特性と学習の評価 第7回：学習環境の整備（授業に必要なICTの設計について検討する） 第8回：学習指導計画の作成（普通教科） 第9回：学習指導計画の作成（専門教科） 第10回：模擬授業（1）「社会と情報」 第11回：模擬授業（2）「情報の科学」 第12回：模擬授業（3）「情報産業と社会」 第13回：模擬授業（4）「体験的な学習」を中心に 第14回：模擬授業（5）「情報モラル」を中心に	
到達目標	高等学校において、情報科を担当するための基礎となる事柄を習得する。授業の実践に必要な学習指導案を作成する力、指導技術を習得し、授業の在り方について分析を行うとともに、情報科の教育指導ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：学習指導要領を熟読するとともに指導案を書くための資料等の収集を行う。 事後学修：授業中に課題が提示される。		
テキスト	担当教員の指示に従うこと。		
参考文献	『高等学校学習指導要領』（最新版 文部科学省）『高等学校学習指導要領解説 情報編』（最新版 文部科学省）その他は、講義の中で紹介する。		
評価方法	平常点（50%、授業内課題を含む）、レポート（50%）。総合点60点以上合格。		

03年度以降	学校経営と学校図書館	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(目的・ねらい) 学校図書館司書教諭は学校図書館長として、資料管理・情報管理や人事管理など経営管理者としての役割と仕事が求められる。学校図書館を活用し、「総合的な学習」や探求型学習など創造的な授業を構築する教員集団の支援活動も求められている。</p> <p>この科目では、これらの役割について、内容を把握し、その使命を認識し教育現場で実施できるようになることを学習目的とする。</p> <p>(概要) 講義を中心として、小学校から高校までのレベルの学校図書館の設置目的・意義、機能について把握する。調べ学習や課題解決型学習、アクティブラーニングの基礎となる情報源としての学校図書館の役割と学校教育との相互補完性等について学習する。</p>		<p>(1) 学校図書館の理念と教育的意義</p> <p>(2) 学校図書館の発展と課題</p> <p>(3) 教育行政と学校図書館</p> <p>(4) 学校図書館の経営①施設管理</p> <p>(5) 学校図書館の経営②資料管理</p> <p>(6) 学校図書館の経営③人事管理</p> <p>(7) 学校図書館の経営④財政管理、評価等</p> <p>(8) 司書教諭・学校司書の役割と校内の協力体制、研修</p> <p>(9) 学校図書館メディアの選択と管理</p> <p>(10) 学校図書館メディアの提供と活用</p> <p>(11) 学校図書館活動と教育活動 図書委員会の指導など</p> <p>(12) 調べ学習や「総合的な学習」と学校図書館</p> <p>(13) 図書館の相互協力とネットワーク</p> <p>(14) 学校図書館運営計画の策定</p>	
到達目標	学校経営と学校図書館に関する各種の知識・技能を習得し、学校図書館の経営的問題点について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	学校図書館法、学校教育法を熟読しておくこと。学校図書館 HP や Blog などあらかじめ調べておいて、その活動内容や所蔵資料などを確認しておくこと。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考文献リストを配布する。		
評価方法	課題 30%、期末演習試験 70% 無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護等体験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	学校図書館メディアの構成	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(目的・ねらい) 小学校から高校までのレベルでの学校図書館での所蔵資料が選択でき、かつ受け入れた資料を整理し、提供できるようにする実務能力を身につけられるようになる。</p> <p>(概要) 学校図書館メディア・センターでの資料管理についての以下の分野で講義・演習を行う。</p> <p>(1) 資料選択。どのような資料が授業で活用できるのか、どのような資料がどの年齢層あるいはどのような興味関心を持っている子どもに薦められるのか、などについて選択理論をおさえ、専門職としての資料選択力を身につけることを目的とする。</p> <p>(2) 資料組織化の実習および運用。学校図書館メディア・センターにはどのような資料を所蔵するのか、それをどのように分類・目録化し、データベース化するのかの基本を学び、実習する。</p>		<p>(1) 図書館での資料整理の目的と意義</p> <p>(2) 学校図書館メディア資料の種類と特性</p> <p>(3) 資料選択の理論、子どもたちの知的自由</p> <p>(4) 資料選択の実際</p> <p>(5) 日本十進分類法(NDC)の構造</p> <p>(6) 分類の実際；主題同定作業、情報検索語の特定</p> <p>(7) 分類の実際；一般補助表の活用</p> <p>(8) 分類の実際；学習に応じた分類</p> <p>(9) 日本目録規則(NCR)の構造</p> <p>(10) 目録化の実際；図書</p> <p>(11) 目録化の実際；図書以外の資料</p> <p>(12) 目録化の電子化、テキスト・ファイルからデータベース化へ、ExcelとAccess利用</p> <p>(13) 目録と情報検索との相関関係</p> <p>(14) 目録検索の実際</p>	
到達目標	学校図書館メディア・センターにおける資料の選択理論および資料選択力、さらに、資料の分類・目録化、データベース化など、資料の組織化に関する知識を習得し、適確な資料選択および資料管理ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	図書館背ラベルの分類番号と資料分野との関連性を図書館で実際に確かめておく。ExcelとWordは使いこなしておく。		
テキスト	日本図書館研究会編『図書館資料の目録と分類 増訂第5版』日本図書館研究会・刊 2015年		
参考文献	『NDCの手引き―「日本十進分類法」新訂10版入門』日本図書館協会・刊 2017年		
評価方法	課題 30%、期末演習試験 70% 無断欠席 1/3以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護等体験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

03年度以降	学習指導と学校図書館	担当者	竹内 ひとみ
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学習指導における学校図書館のメディアの選択と活用についての理解を図る。「総合的な学習」や調べ学習などで、学校図書館の活用が重視されており、その内容にそって、児童・生徒たちの主体的なメディア活用能力の育成を目的とした授業を援助する学校図書館司書教諭の役割を理解し、実践することができるように学習していく。</p> <p>2020年度から学習指導要領の改訂が予定されている。その際に言われている「主体的、対話的で深い学び」に即した学校図書館活用における児童生徒のみならず教師また地域社会への開かれた学校図書館による支援がより一層求められる。この科目ではそれらのことを念頭におき、学習していく。</p> <p>この科目では実践的な演習を中心にしてすすめていくほか、チームとして「総合的な学習」を中心とした調べ学習など学校図書館活用指導計画を作成していく。</p>		<p>(1) 導入：課題解決型学習と学校図書館</p> <p>(2) 学校図書館情報メディア活用能力の育成</p> <p>(3) 学習過程における学校図書館メディア活用の実際</p> <p>(4) 情報探索能力育成：レファレンスと調べ学習</p> <p>(5) 情報探索能力育成：レファレンスツール利用指導</p> <p>(6) 情報探索能力育成：インターネット利用指導</p> <p>(7) 情報探索演習：プレゼンテーション・スキル養成</p> <p>(8) 情報探索能力育成のための教育課程策定</p> <p>(9) 「総合的な学習」及び各教科学習での学校図書館メディア・センターを利用する教育指導計画及び指導案作成</p> <p>(10) 特別支援教育や特別教育などでの学校図書館メディア・センター利用の活動企画</p> <p>(11) 学校図書館メディア・センター管理運営年間計画策定</p> <p>(12) 教師集団との協働</p> <p>(13) PTA/PTO や地域社会との協働</p> <p>(14) 教育指導の実際―各受講者の発表―</p>	
到達目標	学校図書館司書教諭の役割と学校図書館メディアセンターの情報資料について理解し、司書教諭として必要とされる情報検索活動能力、および、児童・生徒の主体的なメディア活用能力を育成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	教職課程で学習した指導計画・指導案作成を復習しておくこと。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考資料リストを配布する。		
評価方法	演習課題 30%、授業参加+グループでの報告と発表 40%、小テスト 30%、授業の 1/3 を無断欠席すると授業放棄とみなす。遅刻するとグループワークに参加できず課題を提出できないので注意すること。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後 学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	読書と豊かな人間性	担当者	米谷 茂則
講義目的、講義概要		授業計画	
<p><授業目的・目標> 「読書」とはなにか。読む・書くことであるが、学校という教育現場ではどのように読み解くか、をどう指導していくのが課題となる。2020年以降の新学習指導要領では複数の総合学習科目が新設予定であり、他者との議論等を通じてのアクティブ・ラーニングを指導する。その基本となるのは調査分析にもとづく自己意見の表現である。文章を読み取り文章で表現する力が求められる。この言語教育・リテラシー学習の基本である子どもの読書を推進するため、学校教育のなかで言語教育担当教員のみならず、すべての教員の調整役＝コーディネーターとしての学校図書館司書教諭は重要な役割を担っている。この科目ではその役割をはたすため、どのような読書資料があるのか、そしてその読書資料をどのように言語教育やリテラシー教育に活用するのかを学び、かつ学校内外での調整役としての役割と責任を学習する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> (1) はじめに (2) 読書と読む・書く (3) 読書心理と読書傾向 (4) 絵本を選ぶ (5) 読書資料としての絵本を読みなおして考える読書 (6) 絵本を利用してのリテラシー育成 (7) 読書資料としての児童文学・ティーンズ文学 (8) 読解力を育成する児童文学・ティーンズ文学 (9) 中学生に勧めたい作品のブックトーク演習 (10) 読書資料としてのノンフィクション (11) 読解力育成としてのノンフィクション (12) 高校生に勧めたい作品のブックトーク演習 (13) 子どもたちの知的自由 (14) 学校図書館・家庭・地域での読書と公共図書館との協働 	
到達目標	「読む」(リーディング)と「書く」(リテラシー)という読書力養成を目的とする授業を構築するための技能を習得し、学習者に対して適切な読書指導ができるようにする。		
事前・事後 学修の内容	読書指導案を作成する。1時間の授業案として読解力を育成するための指導案		
テキスト	なし。必要に応じて資料を配布する。		
参考文献	雑誌 全国学校図書館協議会『学校図書館』		
評価方法	小レポート→演習課題(1)～(3) 60% ・提出物 最終個人課題(4) 読書指導案 40%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	情報メディアの活用	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】インターネット、そしてその上で展開されたさまざまなサービスによって、大量かつ多様な情報がやりとりされたり蓄積されたりしてきた。電子的な通信メディアや記録メディアによって世界中の人々がコミュニケーションを行っているのである。しかし、情報を媒介するものは電子的なものに限らない。たとえば従来の図書や雑誌といった印刷メディアは簡単に思いつづことができるが、そのほかにどのようなメディアが存在するのだろうか。この授業では情報の「乗り物」であるメディアの体系を理解することを目的とする。また、情報の発信、収集、交換といったメディアの利活用についても関連するトピック（学校教育／図書館など）とともに学習する。</p> <p>【概要】現在までのメディアの発達と変化、メディアの分類およびそれぞれの特性、目的や状況（例：学校教育／図書館）に応じたメディアの選択、情報の発信・収集・交換という3つの情報利用行動、メディアの取り扱いについて注意すべき点などを、講義とコンピュータを使用した演習を通して学んでいく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の概要 2. メディアの種類；高度情報社会；学校教育 3. メディアとコンピュータネットワーク 4. メディアによる情報の発信（1）ウェブの標準技術(HTTP、URI、HTML)を例として 5. メディアによる情報の発信（2）ハイパーテキスト再考 6. メディアによる情報の交換：コミュニケーションの場としてのインターネット 7. 前半のまとめ：質疑応答 8. データベースと情報検索（1）：情報収集の例として 9. データベースと情報検索（2）：簡単な検索式の作成 10. 獨協大学図書館を通じて利用できる多様なデータベース；教育／学習への応用 11. 情報検索以外の情報収集：SNS、RSSなど 12. 取り扱いに注意すべき情報：有害情報、個人情報 13. メディアと著作権（学校教育関連事項を含む） 14. まとめ：これからのメディアの利活用；質疑応答 	
到達目標	学校教育で用いられる多様な情報メディアの特性を理解し、具体的な学習場面において情報メディアを活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。		

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	中條 共子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「介護」とは、食事、排泄、移動など、生きることに欠かせない生活行為への他者の支えである。この支えは、伝統的には家族から提供されてきたが、20世紀末には市場サービスとしての調達が可能となった。そして近年は介護ロボットの開発がすすめられており、将来は中心的な介護力となる可能性がある。</p> <p>「介護」が具体的な技術になればなるほど、見知らぬ仲の、素人の私たちは、「介護」に近づきがたくなる。ましてやボランティアなど、必要のない者なのかもしれない。</p> <p>しかし、私たちがもし、支えが必要であることの不自由と困難と日々の努力とを知る機会を持たないならば、私たちはきっと、そうしたことに関心を向けることを忘れてしまうだろう。他者の苦悩にかかわるすべがわからなくなるかもしれない。</p> <p>「介護ボランティア」は、支えを必要とする人との出会いの機会であり、かかわりを体験し、必要な配慮を学び考察する場である。本授業ではこのことの理解をすすめる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ケア」を考える 2. 「福祉」のプロフィール 3. 高齢者との出会い 障害者との出会い 4. 障害者との出会い 5. 「ケア」すること/されること (車椅子体験) 6. 傾聴 7. コミュニケーション 8. 理解と自己覚知 9. 虐待とアドボカシー 10. 子どもとの出会い 11. 共生社会の構想 12. 人間の尊厳 13. 認知症 14. 寄り添う 	
到達目標	教職課程における「介護等体験」に必要な基礎的知識、及び、援助の実践方法を習得し、介護等の現場でこれを実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回リアクションペーパーにより講義内容の理解を確認する。		
テキスト	テキストは指定せず、毎回レジュメと資料を配布する。		
参考文献	各回の授業で示す。		
評価方法	リアクションペーパーの提出・内容 (50%)、まとめのレポートの提出・内容 (50%) により評価する。		

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	中條 共子
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	保科 寧子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は教職課程の「介護等体験」履修時など、介護等体験の際に求められる知識や援助技術について、理解を深めることを目的としています。まず介護体験を行うという社会参加活動（ボランティア）の意義や役割を理解し、次に高齢者や障害者の視点からを中心に、福祉や介護について概観した後、介護等体験に必要な援助技術について学びを進めていきます。</p> <p>講義ではVTRやいくつかの演習を通して、社会福祉や介護の具体的な理解を深めていきます。演習のための社会福祉に関する基礎的知識、高齢者福祉の現状、障害者福祉の現状についても学びます。</p> <p>さらに介護現場における必要となるコミュニケーションや介護の基本技術について学びます。これらを通じて、地域で暮らす人々の生活を支えるために私たちができること、また介護現場における問題について考えます。</p> <p>※夏季集中授業の日程は以下の通りです。履修登録は春学期に行ってください。修得した場合には、春学期科目として認定されます。</p> <p>日時：8月2日（金）2限～5限 8月6日（火）2限～5限 8月7日（水）2限～4限 8月8日（木）2限～4限</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会参加活動（ボランティア）の定義・役割 2. 社会参加活動（ボランティア）の実践 3. 社会参加活動（ボランティア）の留意点 4. 社会福祉の歴史と意義 5. 社会福祉に関する概念（ノーマライゼーション他） 6. 障がい者支援のための概念（ICFと生活モデル） 7. 特別支援教育の制度と実際 8. 高齢者福祉の関連制度（介護保険中心） 9. 高齢者介護の手法（アセスメント）個人ワーク 10. 高齢者介護の手法（アセスメント）グループ検討 11. 認知症の理解と対応 12. 介護施設の業務の流れと介護技術 13. 傾聴技法を用いたコミュニケーション演習 14. 話しやすい位置関係演習 	
到達目標	教職課程における「介護等体験」に必要な基礎的知識、及び、援助の実践方法を習得し、介護等の現場でこれを実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各講義で話した内容について、次回の講義までに各自で復習をしてください。		
テキスト	テキストは特に指定しません。		
参考文献	講義中に適宜、文献や参考資料の紹介等を行います。		
評価方法	平常点 50%（授業への参加度、授業中に課す小レポートの提出等を含む） 期末レポート 50%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	日本史概説Ⅰ	担当者	堀川 徹
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>近年の日本史研究では、日本列島に展開した歴史像がより多角的、多面的に捉えなおされており、今日では一定の成果を確認することができます。こうした研究状況をふまえ、古代・中世に焦点をあて、それぞれの時代像や歴史認識を豊かにするために重要と思われるテーマを講義していきます。</p> <p>極めて限られた時間数の中での講義のため、歴史経過にそって通史的に講義することは必要最低限にとどめるとともに、取り上げるテーマには時代的に多少の多寡があることも予め承しておいてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の導入—歴史学の特徴 2. 歴史学の目的・作法 3. 卑弥呼と邪馬台国 4. 倭の五王の時代 5. 継体天皇の登場 6. 大化改新 7. 天智天皇と天武天皇 8. 平城京の時代 9. 平安京の時代と院政 10. 源平の争乱と鎌倉幕府 11. 鎌倉幕府と蒙古襲来 12. 室町幕府の成立 13. 室町幕府の衰退と戦国大名 14. レポートの振り返り 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる日本列島に展開した前近代の歴史像、国民国家の歴史的な位置づけ、歴史研究や歴史教育の役割や意義について、通史的かつ主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に配布資料などに目を通し日本史の基礎的知識を補って講義に臨んでください。事後学修として参考文献を読み、講義内容を整理してください。		
テキスト	使用しません。毎回プリントを配布します。		
参考文献	参考文献は講義のなかで紹介いたします。高等学校の日本史の教科書や概説書があれば参考になります。		
評価方法	レポート100% なお、一定の出席数に満たない場合は評価をしませんので注意してください。		

18年度以前	日本史概説Ⅱ	担当者	堀川 徹
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本史概説Ⅰに続くこの講義では、近世から近現代を素材とします。その際、対外関係に重点をおいて考察しますが、その前提となる政治や社会経済についても触れることになります。この講義を通じて、近世社会を経て近・現代日本における国民国家形成の過程とその展開について考えていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の導入—歴史学とは何か 2. 織豊政権と江戸幕府の成立 3. 江戸時代初期の政治と外交 4. 幕藩社会とその構造 5. 幕政の安定と経済の発展 6. 幕政の改革 7. 幕府の衰退と近代化への道 8. 開国と幕末の動乱 9. 明治維新と富国強兵 10. 立憲国家の成立 11. 日清・日露戦争と国際関係 12. ワシントン体制と軍部の台頭 13. 第2次世界大戦 14. レポートの振り返り 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる日本列島に展開した前近代の歴史像、国民国家の歴史的な位置づけ、歴史研究や歴史教育の役割や意義について、通史的かつ主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に配布資料などに目を通し日本史の基礎的知識を補って講義に臨んでください。事後学修として参考文献を読み、講義内容を整理してください。		
テキスト	使用しません。毎回プリントを配布します。		
参考文献	参考文献は講義のなかで紹介いたします。高等学校の日本史の教科書や概説書があれば参考になります。		
評価方法	レポート100% なお、一定の出席数に満たない場合は評価をしませんので注意してください。		

18年度以前	外国史概説 I	担当者	兼田 信一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義では、はじめに現代中国の地理的特徴や近年の中国事情を概観した後、新石器時代から唐宋変革期までの歴史展開を、①政治史、②郷里社会の展開、③周辺諸族との関係、を軸に概観していきます。つまり、単に政権の変遷を概観するだけでなく、それぞれの時代の基層社会の展開を見ることで、伝統中国社会の特質の一端にふれてみたいと思います。さらに、中国を中心とする地域的世界がどのように成立し、独自の歴史展開をしていったかも併せて考えてみたいと思います。</p> <p>なお、付論として、宋代以降の中国社会の歴史的展開にも触れてみたいと思います。また、中・高校の教育職を目指す場合、新たに導入される「暦総合」を含めどのような歴史教育が必要となっているかということも考えてみたいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 現代中国概況（地誌・現代中国社会の諸問題） 3. 中華文明の形成（新石器時代～殷周時代） 4. 最初の社会変動と小農民の登場（春秋戦国時代） 5. 皇帝支配の成立・周辺諸族との関係（秦漢時代1） 6. 皇帝支配と郷里社会（秦漢時代2） 7. 統一政権の崩壊と社会変動（後漢～西晋時代） 8. 周辺諸族の侵入と長期分裂（東晋十六国南北朝時代） 9. 中国社会の再統一と東アジア世界の展開（隋時代） 10. 唐帝国の盛衰1（律令制支配の特質） 11. 唐帝国の盛衰2（律令制の崩壊と基層社会の変化） 12. 宋代以降の展開 13. 歴史研究と歴史教育のあいだ（東アジア史の授業） 14. 中国社会の特質（まとめ） 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる東洋史・中国史の通史的展開、外国史の学習を通じた世界史教育の意義、異文化理解の複雑性などについて、主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に参考文献の指定部分を読むこと、事後に各回のレジュメに掲げた論述問題の解答を各自作成する。		
テキスト	授業中配布のレジュメ。		
参考文献	岸本美緒『中国の歴史』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、2015年9月		
評価方法	授業参加評価（30%）と筆記試験（70%）で評価する。		

18年度以前	外国史概説 I	担当者	兼田 信一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	外国史概説Ⅱ	担当者	久慈 栄志
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>西欧における「近代化」過程の歴史を社会・文化・経済・宗教等の側面から考察し、その特質と功罪について検証する。また、「和魂洋才」の語が示す通り、明治維新以後、わが国が西欧から受容し、「血や肉」とした文物は計り知れない。今日の日本社会においても大きな影響を与えている西欧の「伝統」とは何なのか？このことを宗教・政治・経済の諸革命を通して考察する。また、現代における歴史学の果たす役割についても論じてみたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小川 哲／上垣 豊／山田史郎／杉本淑彦編『大学で学ぶ西洋史（近現代）』（ミネルヴァ書房） 中井義明／佐藤専次／渋谷 聡／加藤克夫／小澤卓也編『教養のための西洋史入門』（ミネルヴァ書房） 遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会） 永原陽子／南塚信吾他編『「世界史」の世界史』（ミネルヴァ書房） 		<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 古典古代に見る歴史叙述の特徴 中世世界における歴史観とは何か 啓蒙期における人間中心史観とは何か 近代後期、経済発展にともなう価値観の変化 「近代」の概念について 宗教改革前夜のカトリック教会の状況 宗教改革に見る革新性と、インパクトについて 英仏市民革命、原因・経過の共通性をさぐる 英仏両革命に見る理念・国民性の差異を考える 産業革命～拝金主義と社会の諸矛盾 社会主義の理念とその限界 「近代化」とは何だったのか～その変質を考える 帝国主義と世界再分割～経済的矛盾の「武力による打開」と「差別意識」について 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および歴史の授業を行う際に必要とされる東洋史・中国史の通史的展開、外国史の学習を通じた世界史教育の意義、異文化理解の複雑性などについて、主体的に解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に高校レベルの基礎知識は各自補っておくこと。また、各テーマの目的を理解した上で授業に臨み、不明な箇所を質問してほしい。		
テキスト	授業中に配布する。		
参考文献	上記参考文献中、2冊程度は目を通してほしい。また、高校世界史教科書・図録なども有用である。		
評価方法	定期試験（記述形式。ノート持ち込み不可）85%、授業への参加態度15%により評価。		

18年度以前	外国史概説Ⅱ	担当者	久慈 栄志
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	地理学概説 I	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>自然環境と人間のかかわりについて、地理学的観点から具体的な事例をもとに考察する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な自然環境の見方を身につける。</p> <p>本講義では、身近な地域の環境を自然地理学の観点から分析する基礎として、まず地形図の利用法を扱う。その後、関東地方を例に自然地理的な特色とその基盤の上に立った人々の生活について説明する。</p> <p>★中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、文部科学省検定済教科書（地理Bおよび地図帳）を購入し、自習しておくこと。（授業時には必要に応じて持参する）。</p> <p>★講義科目ではあるが、実習等を行う予定である。色鉛筆、定規等指示された用具を準備すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（講義の概要） 2. 地形図利用の基礎(1) 地形図の基礎知識 3. 地形図利用の基礎(2) 距離と面積、等高線と地形 4. 地形図利用の基礎(3) 土地利用を読む 5. 東京・関東の地形的特色(1) 山の手と下町 6. 東京・関東の地形的特色(2) 台地 7. 東京・関東の地形的特色(3) 荒川と利根川の低地 8. 東京・関東の地形的特色(4) 東京湾 9. 東京・関東の地形的特色(5) 関東山地 10. 東京・関東の気候的特色(1) 気候システムと気候のスケール、気候と景観、観測とデータ 11. 東京・関東の気候的特色(2) 地形と気候 12. 東京・関東の気候的特色(3) 都市気候 13. 東京・関東の自然災害と防災(1) 外水氾濫と内水氾濫 14. 東京・関東の自然災害と防災(2) 地盤災害 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる自然的事象に関する基本的な知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容の修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の地域についての学修を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定はしない。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	定期考査（7割）および課題（3割）を総合的に評価する。		

18年度以前	地理学概説 II	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の基本的概念を理解し、これらの概念を用いて、どのような研究が行われているかを展望する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な人文地理学の見方・考え方を身につける。</p> <p>本講義では、地理的知識の拡大と地理学の歴史を述べた後、地理学の主要概念のうち「環境」「景観」「場所と立地」「伝播」について解説する。さらに、人文地理学のいくつかのテーマを取り上げ理解の深化を図る。</p> <p>★中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、文部科学省検定済教科書（地理Bおよび地図帳）を購入し、自習しておくこと。（授業時には必要に応じて持参する）</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 地理学の歴史(1) 古代・中世の地理学 2. 地理学の歴史(2) 近代の地理学 3. 地理学の歴史(3) 現代の地理学 4. 地理学の主要概念(1) 環境 5. 地理学の主要概念(2) 景観 6. 地理学の主要概念(3) 場所と立地(位置の表記) 7. 地理学の主要概念(4) 場所と立地(環境とのかかわり) 8. 地理学の主要概念(5) 場所と立地(立地論) 9. 地理学の主要概念(6) 地域と空間 10. 地理学の主要概念(7) 伝播 11. 地理学のトピックス(1) メンタルマップ 12. 地理学のトピックス(2) 時間地理学 13. 地理学のトピックス(3) 地理情報システムの原理 14. 地理学のトピックス(4) 教育と地理 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる自然的事象に関する基本的な知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容の習得 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学修を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	定期考査（8割）および課題（2割）を総合的に評価する。		

18年度以前	地誌学概説Ⅰ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。地誌学における主要概念である「地域」と地域分析法を理解した上で、日本を事例地域として地誌学的見方を身につけることを目的とする。</p> <p>本講義では、地誌学の方法、「地域」概念について講義した後、地域を扱う上で必要な文献や統計の収集法や利用法、統計分析など地域分析の手法を習得する。後半は、日本地誌を扱う。</p> <p>★中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、文部科学省検定済教科書（地理Bおよび地図帳）を購入し、自習しておくこと。</p> <p>★講義科目であるが、実習を含むので、色鉛筆、電卓等、授業中に指示された用具は各自用意すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 「地域」の概念 2. 地域分析の基礎（1）文献・資料・統計の所在と検索 3. 地域分析の基礎（2）統計の利用 4. 地域分析の基礎（3）統計の地図表現 5. 地域分析の基礎（4）空間分析 6. 地域分析の基礎（5）地域構造 7. 日本地誌（1）自然環境と風土 8. 日本地誌（2）歴史的背景と地域文化 9. 日本地誌（3）人口分布と人口構造 10. 日本地誌（4）第1次産業と地域変容 11. 日本地誌（5）第2次産業と地域変容 12. 日本地誌（6）交通・通信と地域 13. 日本地誌（7）都市の変容 14. 日本地誌（8）地域構造と地域区分 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる地域の概念と地域分析法、日本地誌の知識と日本の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法、ならびに、世界地誌の知識と海外の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容の修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学修を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に示される。		
評価方法	定期考査（約7割）および課題（約3割）		

18年度以前	地誌学概説Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。本講義では、世界の地域構造を概観したのち、北アメリカ（アメリカ合衆国およびカナダ）を事例地域としてとりあげ、地誌的見方を身につけることを目的とする。</p> <p>★中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、文部科学省検定済教科書（地理Bおよび地図帳）を購入し、自習しておくこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 世界認識の基礎 2. 世界の地域構造とその変容（1）自然的基盤 3. 世界の地域構造とその変容（2）人口 4. 世界の地域構造とその変容（3）文化 5. 世界の地域構造とその変容（4）社会 6. 世界の地域構造とその変容（5）産業と経済 7. 世界の地域構造とその変容（6）政治と国家 8. 北アメリカ地誌（1）アメリカの自然 9. 北アメリカ地誌（2）歴史的背景 10. 北アメリカ地誌（3）人口と社会 11. 北アメリカ地誌（4）第1次産業と地域 12. 北アメリカ地誌（5）第2次産業と地域 13. 北アメリカ地誌（6）都市と生活 14. 北アメリカ地誌（7）アメリカと国際社会 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および地理の授業を行う際に必要とされる地域の概念と地域分析法、日本地誌の知識と日本の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法、ならびに、世界地誌の知識と海外の諸地域を事例とした地誌学的見方と方法を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前学修：高等学校までの地理の内容の修得しておく。 事後学修：授業で取り上げた以外の事例についての学修を通じて深化を図る。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に示される。		
評価方法	定期考査（9割）授業参加度（1割）		

18年度以前	法律学概説Ⅰ	担当者	湯川 益英
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちの日常は、様々なルールに則って営まれている。人間はそれぞれが個性をもち、それぞれが異なった欲望や欲求をもっているため、相互に矛盾・対立が生じる可能性がある。それゆえ、紛争を解決し、社会を維持・発展させるためには、各人に共通するルールが必要になるのである。</p> <p>法律学概説Ⅰでは、そうした諸ルールのうち憲法・民法・刑法・商法・民事訴訟法・刑事訴訟法（いわゆる「六法」）と国際法を中心に概観して、法律についての一般知識を学び、道徳や倫理、慣習や条理も含めて「法とは何か」という根本問題について考える。</p> <p>身近で今日的な具体的事例を引用しつつ、わかりやすく活気のある授業を展開したい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス（法の仕組み、法の学び方） 2. 国家と法—人権と統治（日本国憲法） 3. 財産と法（民法①—契約法） 4. 家族と法（民法②—親族法・相続法） 5. 事故と法（民法③—不法行為法） 6. 犯罪と法（刑法） 7. 企業と法（商法） 8. 民事裁判と法（民事訴訟法） 9. 刑事裁判と法（刑事訴訟法） 10. 労働と法（労働基準法、労働契約法など） 11. 消費者と法（消費者契約法、PL法など） 12. 国際社会と法（国際慣習、条約など） 13. 道徳・倫理・慣習、条理と法（法とは何か①） 14. 法理論と法実践（法とは何か②） 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、憲法および法律の基本概念、（刑事・民事）裁判の仕組みなど、法と裁判に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業計画に則して、事前にテキストの該当頁を一読し、授業後に再読すること。		
テキスト	テキスト『エッセンシャル法学』（成文堂）。六法（有斐閣の『ポケット六法』など）。		
参考文献	逐次、補足レジュメを配布し、参考文献は適宜紹介する。		
評価方法	定期試験80%、授業への参加度20%		

18年度以前	法律学概説Ⅱ	担当者	周 劍龍
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「社会あるところに法あり」が意味するように、われわれ人間社会はさまざまなルール（法や規範）により維持され、営まれている。法とは何かについて従来さまざまな議論があり、共通認識（定説）に至っていないのが現状である。</p> <p>法律学概説Ⅱでは、法とは何かという問いかけをもとにして、国家、裁判、経済、家族、環境、情報など人間の生活に関わる場面において、法がどのように存在し、またどのように機能するのかを実例を交えながらみていくこととする。</p> <p>こうした作業を終えた時点で、法とは何かについて受講生が自分なりに理解したものを提示できるようにするのは本講義の目的である。そのために、受講生が積極的に授業に参加することを期待する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、法とは何か 2. 法と裁判、裁判の基準 3. 法の発展、法の解釈 4. 近代国家と憲法、権力の分立 5. 基本的人権 6. 犯罪と刑罰 7. 契約の自由、財産 8. 損害賠償、家族 9. 生存と環境保護 10. 労働者の権利 11. 生活の保障 12. 企業、経済と国家 13. 情報化社会 14. グローバル時代と日本、授業のまとめ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、憲法および法律の基本概念、（刑事・民事）裁判の仕組みなど、法と裁判に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業前に指定したテキストや資料の部分を予習し、授業後授業の内容を復習する。		
テキスト	末川博編『法学入門〔第6版補訂版〕』、六法（有斐閣の『ポケット六法』など）。		
参考文献	随時配布する。		
評価方法	定期試験により成績を評価する（100%）。平常点（授業への参加度）を加点材料とする（上限は10%とする）。		

18年度以前	政治学概説 I	担当者	杉田 孝夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>政治の世界は古来より支配の学であった。治者と被治者とが身分的に異なっていた時代にあつては、支配身分による「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し評価する政治主体である。</p> <p>政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない。それ以上に政治社会の構成主体である市民こそ政治についての教養を身に着ける必要がある。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。しかしそれは決して抽象的で難解な知ではない。むしろわれわれの日常生活感覚に根差すものであり、かつよき生を求めてわれわれの日常生活の諸関係の在り方をたえず反省的に捉える公共的な知である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 政治とは何か 2. 権力とは何か 3. 国家・主権・国民の概念 4. 自由と自由主義 5. 古典的自由主義から功利主義的自由主義へ 6. 人格主義的自由主義 7. 社会有機体論 8. 福祉国家とその批判 9. 二つの自由の概念 10. 自立性の条件 11. 主体と自由と権力 12. ロールズの正義論とアメリカの自由主義 13. リバタリアニズムとコミュニタリアニズム 14. 資源主義と福利主義 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、近現代の政治構造とその特質、国際政治の政治構造と変容など、政治に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	あらかじめ教科書の該当箇所を読んで、講義に臨むと関心も理解も深まる。図書館で、関連文献を閲覧することを薦める。		
テキスト	川崎修・杉田敦（編）新版『現代政治理論』有斐閣、2012、ISBN978-4-641-12454-7（2,000円）		
参考文献	適宜講義の中で紹介する。		
評価方法	月末レポート（4月・5月・6月）30%と学期末試験70%による。		

18年度以前	政治学概説 II	担当者	杉田 孝夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>治者と被治者が身分的に切り離されていた近代以前においては、政治学は支配身分たる治者のための当地の技術であり教養の学であった。しかし治者＝被治者の関係にあるデモクラシーの現代においては、政治学は政治家や行政官や公務員にとって必要な教養である以上に、われわれ市民にとって必須の教養である。よき政治家とよき行政官を生み出しかつ評価するのは、我々自身だからである。政治は、人間が相互に自由かつ安全に生きていくことを可能にするための相互行為であり、政治の世界は、リアリズムとアイディアリズムの緊張関係の中で営まれる実践知の世界である。政治は、現実を見据えて、リーズナブルな解決策を追求する知的営みである。われわれは生涯を通じて、他者となんらかの共同的権力関係を形成しながら、その中で相互の自由と安全を享受する。その相互了解された関係をたえず更新していくことなしには安全に生きることすらおぼつかない。その作為性と変更可能性に気付くとき、自由と平等と平和のさらなる可能性が開かれる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. デモクラシーの歴史 2. 現代デモクラシー論の位相 3. ネーションとナショナリズム 4. 多文化主義 5. フェミニズムの展開 6. フェミニズム/ジェンダー概念の政治理論への寄与 7. 公共性とはなにか 8. 市民社会論の可能性 9. 環境と政治 政治学のフロンティア 10. 緑の政治とエコロジー 11. 災害と防災の政治 12. 主権国家とウェストファリア体制 13. 国際政治と分権性 14. グローバリゼーションと国境を超えるデモクラシー 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、近現代の政治構造とその特質、国際政治の政治構造と変容など、政治に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	あらかじめ教科書の該当箇所を読んでから、講義に臨むと関心と理解が深まる。講義のあとは、図書館で関連文献を閲覧することを薦める。		
テキスト	川崎修・杉田敦（編）新版『現代政治理論』有斐閣、2012、ISBN978-4-641-12454-7（2,000円）		
参考文献	適宜講義の中で紹介する。		
評価方法	月末レポート（10月、11月、12月）30%と学期末試験70%による。		

18年度以前	社会学概説 I	担当者	前島 賢士
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>社会学は、経済学や経営学、政治学等を含んだ社会科学の一部門である。</p> <p>本講義では、将来社会人となるべき学生が、地方や海外のように社会的背景や文化的背景の異なる場所でもその能力を十分に発揮できるようにするために、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>学生が社会学の概念や理論を自分のものとする。学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 社会学とは何か 3. 自己と社会 4. 家族とジェンダー 5. 市民社会と公共性 6. 階級・階層 7. 教育と労働 8. 都市と地域社会 9. 社会運動 10. エスニシティ 11. 福祉国家と社会福祉 12. 貧困と社会的排除 13. セクシュアリティ 14. まとめ 	
到達目標	「社会学」という学問が成立した経緯をふまえて、社会学的な分析の仕方、社会集団の類型やアイデンティティ形成のメカニズム等を理解し、多文化社会における自己と他者について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各回の授業前に、テキストの指定された箇所を精読すること。各回の授業後には講義で扱った概念や理論を復習すること。		
テキスト	盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編著『社会学入門』（ミネルヴァ書房、2017年）		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 100%		

18年度以前	社会学概説 II	担当者	前島 賢士
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>社会学は、経済学や経営学、政治学等を含んだ社会科学の一部門である。</p> <p>本講義では、将来社会人となるべき学生が、地方や海外のように社会的背景や文化的背景の異なる場所でもその能力を十分に発揮できるようにするために、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>学生が社会学の概念や理論を自分のものとする。学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて、現代の社会現象を社会学的に考察できるようにする。</p> <p>また、社会問題を学生が身につけた社会学の概念や理論を用いて、考察できるようにする。</p> <p>さらに、社会学の重要な古典理論を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 健康と医療 3. 環境と科学技術 4. 災害とボランティア 5. メディアと文化 6. 宗教 7. 犯罪と逸脱 8. 政治と国家 9. グローバリゼーション 10. 社会学の理論と方法 11. ジンメル社会学理論 12. デュルケムの社会学理論 13. ヴェーバーの社会学理論 14. まとめ 	
到達目標	社会学の学説をふまえて、近代社会が抱える問題や、多文化の共生を視野に入れながら、現代の日本社会が直面する課題について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各回の授業前に、テキストの指定された箇所を精読すること。各回の授業後には講義で扱った概念や理論を復習すること。		
テキスト	盛山和夫・金明秀・佐藤哲彦・難波功士編著『社会学入門』（ミネルヴァ書房、2017年）		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 100%		

18年度以前	社会学概説 I	担当者	岡村 圭子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちの周りには、さまざまな他者がいる。電車で隣に座った人も、家族や親しい友人も「他者」である。たいいていの場合、他者は自分の思い通りに動いてはくれない。しかし、そういった他者たちと社会的関係を築かなくては私たちは生活できない。それゆえ、社会を扱う学問である社会学では「他者other(s)」が重要なキー概念となっている。さらに、他者について考えることは、「自己(わたし)」について考えることでもある。本講義では、社会学の基礎知識をふまえて、先行研究を現代的な文脈で捉え、社会学が生まれた経緯と社会的視点、さらにアイデンティティ形成のメカニズムについて学ぶ。それをとおして社会のなかに生きる「他者と自己」の関係を考えてみよう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 社会的視座とは 3. 社会学の歴史 (1) —A.コント、H.スペンサー 4. 社会学の歴史 (2) —E.デュルケム 5. 社会学の歴史 (3) —M.ウエーバー 6. 社会の種類 (1) —コミュニティとアソシエーション 7. 社会の種類 (2) —ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 8. 社会の種類 (3) —第一次集団 9. Identity形成と社会 (1) —鏡に映った自己 10. Identity形成と社会 (2) —重要な他者 11. Identity形成と社会 (3) —マージナル・マン 12. Identity形成と社会 (4) —未定 13. 補完的アイデンティティについて 14. まとめ 	
到達目標	「社会学」という学問が成立した経緯をふまえて、社会的な分析の仕方、社会集団の種類やアイデンティティ形成のメカニズム等を理解し、多文化社会における自己と他者について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	身分証明書以外に私が私であることを証明するものはなにか、考えておく。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		
評価方法	授業への積極性 (小レポートや提出物) 50%、 期末試験 50%		

18年度以前	社会学概説 II	担当者	岡村 圭子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>わたしたちが日常的に何気なく行っていることや「あたりまえ」だと思っていること、あるいは「社会問題」と呼ばれる事象について、社会的な見地から分析してみるとどうだろうか。それまで見えていなかったことが見えてくるかもしれない。それまで気づいてさえいなかったことが、突然気になりだすかもしれない。</p> <p>本講義では、近代の都市社会やグローバル化が抱える問題についての研究業績を知り、それを手がかりにしながら、わたしたちにとって身近な出来事を社会的に考えてみたい。とくに「都市」「移民」「地域」「大量消費」「社会的逸脱」といったキー概念を中心に扱う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 社会的性格と「自由からの逃走」—E.フロム 3. 同調様式の3種類—D.リースマン 4. 都市化と移民—W.I.トマスとF.W.ズナニエツキ 5. 同心円地帯説—E.パーゼス 6. シカゴ学派と都市問題—R.パーク 7. 予言の自己成就—R.K.マートン 8. 誇示的消費—T.ヴェブレン 9. 認知的不協和の理論—L.フェスティンガー 10. 文化的再生産—P.ブルデュー 11. コンフルエント・ラブ—A.ギデンズ 12. 現代社会を社会的にみる (1) 情報技術とメディア 13. 現代社会を社会的にみる (2) グローバル化 14. まとめ 	
到達目標	社会学の学説をふまえて、近代社会が抱える問題や、多文化の共生を視野に入れながら、現代の日本社会が直面する課題について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	グローバル化と都市化がもたらす光と影について考えておく。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		
評価方法	授業への積極性 (小レポートや提出物) 50%、 期末試験 50%		

18年度以前	哲学概説Ⅰ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>昨今、哲学の復権が唱えられ自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。</p> <p>西欧思想を歴史的にもしくは主題別に辿ることが、本講義の概要であるがそこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じていきたい。</p> <p>西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りである。哲学をギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。</p> <p>個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らその思想を形成した動機や課題、歴史的立場付けなどを重視して論じる。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 哲学とは何か 哲学の誕生(アルケーへの問) 2. ソクラテス以前 ミレトス学派とエレア学派 3. ソクラテス以前 多元論とソフィスト 4. ソクラテス 5. プラトン アイデア論 6. プラトン 理想国とアイデア論 7. アリストテレス 実体論(ヒュレーとエイドス) 8. アリストテレス 目的論的世界観 9. スコラ哲学 プラトンとアリストテレスの影響 10. スコラ哲学 知と信 11. 科学革命 パラダイムの転換 12. 科学革命 ガリレオとニュートンの意義 13. 合理論 コギト・エルゴ・スム 14. 合理論 デカルトの実体論 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、「哲学」の意義、個々の思想家がその思想を形成した動機や課題、歴史的立場付けなど、哲学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	プリント資料配布。		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	試験70%、レポート30% (出席は2/3以上必要)		

18年度以前	哲学概説Ⅱ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(春学期に同じ)</p> <p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 経験論 ロックの認識論 2. 経験論 バークリーとヒューム(実体概念の否定) 3. 社会契約説 4. カント 理性批判とコペルニクスの転回 5. カント 自律と人格の共同体 6. ドイツ観念論 フィヒテによるカント批判 7. ドイツ観念論 世界精神の自己展開としての歴史 8. キルケゴール・マルクス・ニーチェ 実存と世界の変革 9. キルケゴール・マルクス・ニーチェ 超人思想 10. フッサール・ハイデgger・ヤスパーズ 現象学 11. フッサール・ハイデgger・ヤスパーズ 世界内存在と実存哲学 12. ウィトゲンシュタイン 13. 構造主義 14. 言語哲学 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、「哲学」の意義、個々の思想家がその思想を形成した動機や課題、歴史的立場付けなど、哲学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	プリント資料配布。		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	試験70%、レポート30% (出席は2/3以上必要)		

18年度以前	倫理学概説 I	担当者	林 永強
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は倫理論理の諸説を考察し、倫理学の基礎を探究する。功利主義、義務論、徳倫理学、私的と公的、正義と平等、共生倫理学を取り上げ、実生活の諸問題に向けて分析する。</p> <p>授業の進行としては、各論理に関する文献を纏めて講義を行う一方、発表を通して議論する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 倫理学の定義と方法論 3. 功利主義 I : 快楽と苦痛 4. 功利主義 II : J.S. ミル 5. 義務論 I : 義理と義務 6. 義務論 II : カント 7. 徳倫理学 I : 古代ギリシャからマッギンタイアまで 8. 徳倫理学 II : マッギンタイア以降 9. 私的と公的 I : 滅私奉公から滅公奉私へ 10. 私的と公的 II : 活私開公から公共哲学へ 11. 正義と平等 I : 古代ギリシャからロールズまで 12. 正義と平等 II : ロールズ以降 13. 共生倫理学 I : エゴイズムから共生へ 14. 共生倫理学 II : シンバイーシスとコンヴィヴィアリティ 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる倫理学の全般的知識、社会や人生における基礎的・基本的な事柄に関する考え方を生徒に理解させるための言語表現力を習得し、倫理を説くことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	文献を事前に精読し、授業中に積極的に議論する。		
テキスト	授業時に適宜指示。		
参考文献	授業時に適宜指示。		
評価方法	発表及び議論 (40%)、レポート (60%)。		

18年度以前	倫理学概説 II	担当者	林 永強
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>応用倫理学の諸論理を概説し、現代社会の問題に沿って検討する。科学技術、環境、医療、情報、そしてビジネス倫理学を取り上げ、実社会の諸問題にどう向き合うかと考えていく。</p> <p>授業の進行としては、各論理に関する文献を纏めて講義を行う一方、発表を通して議論する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 応用倫理学の定義：論理と応用 3. 応用倫理学の方法論：観念と事例 4. 科学技術倫理学 I : 定義と起源 5. 科学技術倫理学 II : 安全と安心 6. 環境倫理学 I : 定義と方法 7. 環境倫理学 II : 自由と義務 8. 医療倫理学 I : 定義と原則 9. 医療倫理学 II : 自律と他律 10. 情報倫理学 I : 定義と課題 11. 情報倫理学 II : 私益と公益 12. ビジネス倫理学 I : 定義と背景 13. ビジネス倫理学 II : 商業と道徳 14. ビジネス倫理学 III : 企業と責任 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる倫理学の全般的知識、社会や人生における基礎的・基本的な事柄に関する考え方を生徒に理解させるための言語表現力を習得し、倫理を説くことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	文献を事前に精読し、授業中に積極的に議論する。		
テキスト	授業時に適宜指示。		
参考文献	授業時に適宜指示。		
評価方法	発表及び議論 (40%)、レポート (60%)。		

18年度以前	宗教学概説Ⅰ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けてきた為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が昨今生じている。</p> <p>そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。</p> <p>更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。</p> <p>春学期は洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 宗教とは何か 宗教学の誕生と宗教観 2. 神話と宗教 3. ユダヤ教（１） 民族の歴史 4. ユダヤ教（２） 契約と律法 5. キリスト教（１） イエスの生涯と福音書 6. キリスト教（２） 初期キリスト教の多様性 7. キリスト教（３） ローマ帝国から中世ヨーロッパ 8. キリスト教（４） 近現代のキリスト教 9. イスラム教（１） ムハンマドの生涯 10. イスラム教（２） コーランとハディース 11. イスラム教（３） スンニ派とシーア派 12. イスラム教（４） 現代のイスラム教 13. ヒンドゥ教（１） アーリヤ人とヴェーダの宗教 14. ヒンドゥ教（２） バラモン教とウパニシャッド哲学 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、宗教学の成り立ちや学問的性格、諸宗教の歴史と現在、宗教団体や宗教教育の問題点など、宗教学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	『世界がわかる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 ちくま文庫		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	試験70%、レポート30% (出席は2/3以上必要)		

18年度以前	宗教学概説Ⅱ	担当者	河口 伸
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的は春学期に同じ。春学期の続きの後に秋学期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に宗教的諸概念についての理解を深め、日本や欧米の先進国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。</p> <p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 仏教（１） 釈迦の生涯 2. 仏教（２） 初期仏教の教え 3. 仏教（３） 分裂と多様な仏教 4. 仏教（４） 大乘仏教と日本 5. 儒教（１） 中国古来の民間信仰と「儒」 6. 儒教（２） その宗教性 7. 道教（１） 中国史と道教の成立 8. 道教（２） 現代中国と道教 9. 日本の宗教の歴史と現在（１） 儒仏道の伝来と神道以前 10. 日本の宗教の歴史と現在（２） 神仏習合と修験道 11. 日本の宗教の歴史と現在（３） 神仏分離、国家神道、政教分離 12. 宗教団体の諸問題（１） 伝統的教団と新宗教 13. 宗教団体の諸問題（２） カルト教団 14. 学校教育と宗教 	
到達目標	中等教育諸学校において、社会および公民の授業を行う際に必要とされる、宗教学の成り立ちや学問的性格、諸宗教の歴史と現在、宗教団体や宗教教育の問題点など、宗教学に関する概括的知識を習得し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいてください。また、毎回出されるレポートを次回に提出して下さい。		
テキスト	『世界がわかる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 ちくま文庫		
参考文献	文献は随時紹介する。		
評価方法	試験70%、レポート30% (出席は2/3以上必要)		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	心理学概説Ⅱ	担当者	田口 雅徳
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>受講者にさまざまな心理検査やグループ・ワークなどを実践してもらおう。これらの学習を通して、心理学の基本的知見を習得してほしい。また、心理検査の結果を分析して自己理解を深めてもらうことも本講義の目的である。心理検査やグループワークを実践した後は、結果をレポートにまとめてもらう。</p> <p>※履修者には授業で使用する心理検査用紙の実費（2000円）を負担してもらおう。履修が決定したら自動発行機で申請書を購入すること。授業時に申請書と引き換えに検査用紙を配布する。初回の授業にて履修制限や検査用紙代納入方法について説明するので欠席しないこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 心理検査とは？ 2. 心理検査の種類と理論 3. Y-G性格検査（理論的背景と検査の実施） 4. Y-G性格検査（検査結果の分析・解釈） 5. ストレス・コーピング 6. 職業への興味 7. 知能検査 8. EQS 9. 性格5因子 10. TEG 11. グループ・ワークによる自己理解（非言語的理解） 12. グループ・ワークによる自己理解（言語的理解） 13. グループ・ワークによる自己理解（他者と自己） 14. テスト・バッテリーに基づく自己理解 	
到達目標	公民の授業を行う際に必要とされる心理学の成立過程、現代心理学の基本的な考え方を理解し、社会の諸問題や人間の行動を心理学的視点で捉えて分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	各回で扱う心理検査について、その背景理論などを事前に学修する。事後にあつては、心理検査の結果を踏まえて授業で指示した課題をおこないレポートにより提出する。		
テキスト	各種の心理検査用紙は一括で購入する。検査用紙購入にかかる費用を履修登録時に負担してもらおう。		
参考文献	各回で参考文献は異なるので、各回の授業にて紹介する。		
評価方法	実施した心理検査の結果をレポートにまとめて提出してもらおう(50%)。また、最終レポートを課す(50%)。これらのレポート内容を総合し、最終の評価を決定する。		

18年度以前	東洋史 I	担当者	熊谷 哲也
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目標)</p> <p>西アジアの歴史について講述する。イスラーム世界の歴史を知ることにより、彼らが何を規範とし、何に価値を置き、何を理想として求めてきたかを考えてみたい。</p> <p>(講義概要)</p> <p>7世紀における預言者ムハンマドの出現から16世紀にいたる歴史を概観し、広大なイスラーム世界が形成されるまでを理解する。宗教、社会、文化についての基本的な知識も学ぶ。</p> <p>なお、毎回出席をとる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イスラームの基本事項について 2. イスラーム教の誕生以前の世界について 3. 預言者ムハンマド（マホメット）の出現と時代背景 4. 最初の4人のカリフ（正統カリフ）の時代について 5. ウマイヤ朝の歴史。「アラブ帝国」の意味 6. アッバース朝の歴史。「イスラーム帝国」の意味 7. イスラーム教の聖典コーラン、ハディース 8. アッバース朝下に出現しはじめた軍事政権 9. マムルーク朝について。とくにイクター制について 10. マムルーク朝について。とくに奴隷制度について 11. ヨーロッパ世界とイスラーム世界との関係 12. アラビア科学とヨーロッパ 13. 歴史にみられるイスラーム教徒の生活と社会 14. まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に自分の興味や疑問点をまとめておき、事後に内容を整理してください。あわせて4時間の学修時間となります。		
テキスト	とくにさだめない。		
参考文献	とくにさだめない。授業で指示する。		
評価方法	レポートの評価（70%）と平常点（30%）。レポートの表紙は授業で配布するので注意すること。		

18年度以前	東洋史 II	担当者	熊谷 哲也
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目的)</p> <p>イスラームは今日の国際情勢を読むための主要なキーワードであるが、その鍵を解くためにも、彼らの歴史を理解することはとても大切である。皆さんの視野が広がることを目標とする。</p> <p>(講義概要)</p> <p>イスラーム世界の近代化の歴史を地域別・テーマ別に考察する。今日イスラームがかかわるさまざまな国際関係についても、理解が深められるよう留意したい。</p> <p>なお、毎回出席をとる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 「西洋の衝撃」とイスラーム改革運動 2. 欧米列強による帝国主義とイスラーム世界 3. 近代シオニズムと第1次中東戦争 4. 第2次中東戦争とエジプト 5. 第3次中東戦争と中東世界の動揺 6. 第4次中東戦争とその後の動き 7. イスラーム世界の激動。その地域的な広がり 8. 東西冷戦終結とその後の中東世界 9. 近・現代のアラブ世界の文化について 10. 20世紀のジハード論と過激思想 11. 現在のアラブ諸国のかかえる問題 12. 中東世界と欧米、いわゆる「アラブの春」 13. 今日のイスラーム主義の主張と展開 14. まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前に自分の興味や疑問点をまとめておき、事後に内容を整理してください。あわせて4時間の学修時間となります。		
テキスト	とくにさだめない。		
参考文献	とくにさだめない。授業で指示する。		
評価方法	レポートの評価（70%）と平常点（30%）。レポートの表紙は授業で配布するので注意すること。		

18年度以前	東洋史Ⅰ	担当者	張 士陽
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代中国をより深く理解するために、その原型が形成された18世紀の中国について学ぶ。</p> <p>18世紀の中国は清朝の統治下で盛世の時代を迎える。版図は歴代王朝の中で最大となり、経済は発展し、人口も1億人から3億人となる。授業では王朝支配の体制、国際関係、広域経済の形成、多民族統治、法と裁判、警察・徴税から見た地方行政、地域エリートと慈善事業などについて講義する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 皇帝支配 3 科挙と地方統治 4 税制改革と財政 5 国際関係と冊封朝貢体制 6 銀両・銅銭通貨と広域経済の形成 7 多民族統治の実態 8 映像資料の視聴 9 法制度 10 裁判の実態と情理 11 犯罪と警察制度の展開 12 徴税と地方行政 13 地域エリートと慈善事業 14 まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定箇所を事前に読むこと。授業時に紹介した関連文献を図書館などで探し読むこと。		
テキスト	岸本美緒・宮嶋博史『世界の歴史 12 明清と李朝の時代』（中公文庫 S-22-12）中央公論新社、2008年。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	定期試験（80%）、平常点（20%）。		

18年度以前	東洋史Ⅱ	担当者	張 士陽
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代中国をより深く理解するために、その原型が形成された18世紀の中国について学ぶ。</p> <p>18世紀の中国は清朝の統治下で盛世の時代を迎える。版図は歴代王朝の中で最大となり、経済は発展し、人口も1億人から3億人となる。授業では台湾の開発、山地経済の形成と無生老母信仰の展開、家と家族や婚姻などの慣行から見る女性の地位の変化、イスラームと中華との文化対話などについて講義する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 台湾の開発 3 山地経済の形成 4 無生老母信仰の展開と嘉慶白蓮教徒の反乱 5 家と宗族 6 婚姻の諸形態 7 売妻・典妻慣行 8 纏足の展開と婚活戦略 9 女性の地位の変化 10 映像資料の視聴 11 中国ムスリム社会の形成 12 回儒と中華との対話 13 イエズス会宣教師の見た中国 14 まとめ 	
到達目標	アジア・ユーラシア大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定箇所を事前に読むこと。授業時に紹介した関連文献を図書館などで探し読むこと。		
テキスト	岸本美緒・宮嶋博史『世界の歴史 12 明清と李朝の時代』（中公文庫 S-22-12）中央公論新社、2008年。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	定期試験（80%）、平常点（20%）。		

18年度以前	西洋史 I	担当者	黒田 多美子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(記憶の継承：ホロコーストと歴史否定論者)</p> <p>日本ではドイツの歴史と聞くと「ホロコースト」を思い起す人が多いでしょう。本講義では、反ユダヤ主義の歴史的経緯やナチ体制下での迫害の変容をたどることによって、ナチ体制下でなぜ未曾有の大量虐殺に至ったのかを解明する手掛かりとしたいと思います。さらにその記憶を後の世代に継承していくための記念碑を紹介します。</p> <p>しかし、一方で、そうした歴史的事実を否定する人々も後を絶ちません。そこで、否定論者の主張を分析し検討していきます。本講義の目的は、以上の分析を通じて、受講生が自国の歴史問題を考える際の分析力を涵養することにあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1) 講義の概要／課題・レポートに関する注意 2) 反ユダヤ主義 (中世から近代まで) 3) 「人種論」と反セム主義 4) 第一次世界大戦と戦争責任 5) ヴァイマル共和国と反ユダヤ主義 6) ナチ体制下のユダヤ (人) 迫害 7) ナチ体制下の諸民族虐殺／犠牲者の追悼と記念碑 8) ホロコーストを否定する人々 9) 歴史否定論者の主張と意図 10) 歴史否定論者の系譜 11) 映画『否定と肯定』 12) 映画『否定と肯定』より「言論の自由」と「両論併記」 13) 日本の記念碑と歴史否定論者 14) まとめ 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業内容に関する課題などで、事前学修または事後学修を行います。		
テキスト	必要に応じて授業時に配布します。		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	課題(70%)とレポート(30%)で評価します。課題は6回程度、レポートは1回の予定です。		

18年度以前	西洋史 II	担当者	黒田 多美子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(ドイツにおける戦争責任と歴史認識)</p> <p>本講義では、第二次世界大戦後、ドイツが自国の「負の遺産」にどう対処したか、あるいはしようとしてきたのか、さらに戦争の記憶をどのような視点から後の世代に伝えていこうとしているのかを考察していきたいと思います。自国の「過去」とどう向き合うかという歴史認識は、その時々政治風土とも大きくかわっています。また、自国の歴史を後の世代にどのように伝えようとしているかという点は、特に学校での歴史教育のあり方に顕著に表れています。そこで、ドイツの学校ではどのような観点から、またどのような方法で歴史の授業が行われているかを紹介します。そのうえで、日独の歴史認識を比較・検討したいと思います。</p> <p>この講義を通じて、受講生はドイツにおける歴史認識の変遷と現在の教育実践についての知識を得ると同時に、日本における歴史認識についても考察することが期待されます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1) 講義の概要／課題・レポートに関する注意 —ドイツの歴史教育— 2) ① ドイツの教育制度 3) ② 歴史の授業/教科書の記述/学習目標 4) ③ 教科書問題/大学入学試験 —戦後ドイツの歴史認識の変遷— 5) ① 反ユダヤ主義とナチの犯罪/経済復興とタブー 6) ② 歴史家論争/「国防軍の犯罪」展 7) ③ 基本法(兵役拒否・庇護権) /記憶の継承 8) ④ 世代を超える戦争責任 DVD『父と子の対話』 —歴史認識の日独比較— 9) ① 資料分析 10) ② 「戦争犯罪」と「人道に対する罪」 11) ③ 国民の責任 12) ④ 加害と被害 13) ⑤ 歴史教育/教科書問題 14) まとめ 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業内容に関する課題などで、事前学修または事後学修を行います。		
テキスト	必要に応じて授業時に配布します。		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	課題(70%)とレポート(30%)で評価します。課題は6回程度、レポートは1回の予定です。		

18年度以前	西洋史 I	担当者	佐藤 唯行
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>春学期の前半ではユダヤ人たちがアメリカに渡る以前のヨーロッパでの「負け犬」時代を学ぶ。特にユダヤ人差別の発生メカニズムについて説明する。</p> <p>後半では「負け犬」だったユダヤ人たちがアメリカで迎った苦難の歴史と、多数派からの抑圧をはねのけ共生の道を模索してきた姿を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 中世英国のユダヤ人金融 2. 西洋キリスト教世界初の一国規模のユダヤ人追放が行われた原因を探る —1290年のイングランド— 3. 隠れユダヤ教徒の足跡、1290～1656 4. 千年王国思想とユダヤ人再入国 5. 17～18世紀英国の外国貿易とユダヤ人 6. 英国人地主貴族社会への同化現象 7. 移民排斥と反ユダヤ暴動発生のメカニズム 8. 英国ファシスト勢力との対決とナチス政権からの亡命ユダヤ人の受け入れ 9. 現代英国のユダヤ人社会 10. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色 11. 植民地時代、建国初期における反ユダヤ主義の不在 12. 南北戦争期における反ユダヤ主義の出現 13. 公民権闘争期のユダヤ教会堂爆破 14. 1970年代以後の反ユダヤ主義 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいて下さい。また授業で学んだ箇所を事後に復読して下さい。		
テキスト	『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 740円） 『英国ユダヤ人』佐藤唯行（1995年 講談社選書 1600円）		
参考文献	特になし。		
評価方法	評価は筆記試験によって決定する（100%）。出席はとりません。試験は自筆ノート、テキストの持ち込み可。12択20問のQuiz形式。		

18年度以前	西洋史 II	担当者	佐藤 唯行
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>秋学期では世界で最も典型的な多人種・多民族社会アメリカを舞台に、そのエスニック・ヒストリーを学ぶ。</p> <p>各人種・民族集団間相互のあつれきを生みだしたメカニズムを解明し、対立を回避し、相互理解と和解の道を模索する様々な努力を紹介する。</p> <p>こうしたアメリカ社会の努力は「外国人たちとの共生」の道を模索せねばならぬ我々日本人にとっても有益な示唆を与えるはずである。</p> <p>下記二冊のテキストにそってアメリカの人種関係史について学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ユダヤの経済力はなぜ解明されなかったのか 2. 情報・通信産業のユダヤ人 3. メディア産業のユダヤ人 4. 小売業のユダヤ人 5. 不動産業のユダヤ人 6. 伝統的ユダヤ・ビジネス 7. ウォール街のユダヤ人 8. ユダヤ系投資銀行の興亡 9. ユダヤ人企業家成功の原因とは 10. 大都市移民ゲッターのエスニック・コンフリクト 11. 自動車王ヘンリー・フォードの反ユダヤ・キャンペーン 12. 甦る儀式殺人告発、20世紀アメリカで復活した中世ヨーロッパ起源の反ユダヤ主義 13. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色 14. アメリカ南部における反ユダヤ主義、レオ・フランク事件 	
到達目標	ヨーロッパ・アメリカ大陸に存する国家や地域の成立過程を、政治、経済、社会、文化の特徴などをふまえて分析し、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読しておいて下さい。また授業で学んだ箇所を事後に復読して下さい。		
テキスト	『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 740円） 『アメリカはなぜイスラエルを偏愛するのか』（電子書籍版 ダイアモンド社 1280円）		
参考文献	特になし。		
評価方法	春学期と同じ。その他に12月第一週の授業日に中間試験を実施します。出題範囲はダイヤモンド社の教科書からとする。		

18年度以前	地理学Ⅰ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題を取りあげ、地球的視点から検討する。春学期は自然環境の成り立ちと熱帯地域および砂漠地域の諸相を検討する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 自然と人間とのかかわり 3 環境の諸要素（1）地球の特質 4 環境の諸要素（2）地形環境 5 環境の諸要素（3）気候環境 6 環境の諸要素（4）植生と土壌 生態系 7 熱帯地域（1）自然的特質と伝統的農業 8 熱帯地域（2）アジアの稲作 9 熱帯地域（3）熱帯の開発と問題（マレーシアの例） 10 熱帯地域（4）熱帯の開発と問題（アマゾンの例） 11 砂漠地域（1）自然的特質と伝統的生業 12 砂漠地域（2）イスラムの世界 13 砂漠地域（3）石油資源と近代化 14 砂漠地域（4）アラブとイスラエル 	
到達目標	地理的な知識と地理的見方・考え方を習得し、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているかという視点から、世界の地理を概観のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	該当地域の自然・人文・社会について高校レベルの内容を復習する。その地域のニュースを地理的な視点から読み解く。		
テキスト	授業中に示す。		
参考文献	山本他『自然環境と文化』他授業中に示す。		
評価方法	定期考査 9割 授業参加度 1割		

18年度以前	地理学Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題を取りあげ、地球的視点から検討する。秋学期は、温帯地域、冷帯地域、寒帯地域および世界の環境問題について扱う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 温帯地域（1）自然的特質 2 温帯地域（2）地中海地域 3 温帯地域（3）西ヨーロッパ（歴史と文化） 4 温帯地域（4）西ヨーロッパ（産業と経済） 5 温帯地域（5）北米の温帯地域（歴史と文化） 6 温帯地域（6）北米の温帯地域（産業と経済） 7 温帯地域（7）アジアの温帯地域（歴史と文化） 8 温帯地域（8）アジアの温帯地域（産業と経済） 9 冷帯地域（1）自然的特質 10 冷帯地域（2）北欧諸国とロシア 11 寒帯地域 12 山地地域 13 世界の環境問題（1）人口と食糧問題 14 世界の環境問題（2）気候変動 	
到達目標	地理的な知識と地理的見方・考え方を習得し、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているかという視点から、世界の地理を概観のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	該当地域の自然・人文・社会について高校レベルの内容を復習する。その地域のニュースを地理的な視点から読み解く。		
テキスト	授業中に示す。		
参考文献	山本他『自然環境と文化』他授業中に示す。		
評価方法	定期考査 9割 授業参加度 1割		

18年度以前	地誌学Ⅰ	担当者	犬井 正
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義では地域差が自然環境と経済環境、および社会環境と文化環境がどのように関連して生み出されてきたのかを、地理学・地誌学の視点から地域生態システムとして明らかにする。まず、環境の諸要素を概観し、特に気候・植生の特色、成因、構造について学習する。その後、エコツーリズムが地域資源の保全や地域振興に果たす役割を取り上げ、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式をスライド、VTRを用いながら説明する。基本的には、自然資源の適正利用に関わる持続性は、地域の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤の相互関係からなるフレームワークで捉えることが可能となることを学修する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション講義の概要 2. 地域生態論と自然生態論 3. 地域生態論とはー地理学と地誌学 4. 環境の諸要素(1)気候環境 降水量と日照の全球的特徴 5. 環境の諸要素(2)地形環境 山地と平地、河川と海洋 6. 環境の諸要素(3)植生と生きもの 7. 地域生態論とエコツーリズム 8. 熱帯地域(1)熱帯林と伝統的生活様式 9. 熱帯地域(2)熱帯林の開発と保全 10. 熱帯地域のエコツーリズム 11. マングローブの生態 12. マングローブ林の開発と保全 13. エクアドル、マングローブ林のエコツアー 14. まとめーキャリングキャパシティーとゾーニング 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	犬井正著『エコツーリズムこころ躍る里山の旅ー飯能エコツアーに学ぶ』(丸善出版、2017年)		
参考文献	講義時に紹介。		
評価方法	定期試験の結果に(80%)によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績(20%)も評価対象とする。		

18年度以前	地誌学Ⅱ	担当者	犬井 正
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「地誌学Ⅰ」に続いて、「地誌学Ⅱ」では人間社会をシステム概念を用いて捉え、地形の成因、構造、人間生活とのかかわりを学習し、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式を説明し自然生態系と社会生態系の枠組みを理解する。その際に、エコツーリズムを取り上げ地域資源の保護や保全にどのような役割が果たせるのかを、埼玉県飯能市を取り上げエコツーリズムの実態と方法について学修する。</p> <p>授業の際にスライド、VTRを用いながら説明する。基本的には、そのような資源の適正利用に関わる持続性は、地域の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤の相互関係からなるフレームワークで捉えることが可能となる。地域における資源や環境の持続的な利用の仕組みを、エコツーリズムを取り上げながら明らかにし、それらの資源の存在形態や存在意義を具体的に捉え討議する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション講義の概要 2. エコツーリズムと地域生態論 3. 山地の自然生態系の特徴 4. 山地のエコツアー(1) 山地利用のゾーニング 5. 山地のエコツアー(2) 山地資源の開発と観光化 6. 山地の環境容量と脆弱性 7. マチュピチのエコツアー 8. 世界の環境問題とツーリズムー環境破壊と保全 9. 高山と砂漠の文明のエコツーリズム 10. 日本のエコツーリズムとエコツアーの背景を探る 11. 埼玉県飯能市のエコツアーの事例 12. 森林文化のエコツアーの事例ー地域資源の保護と活用 13. 埼玉県飯能市エコツアーの光と影 14. 講義のまとめー持続可能な生活様式 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には配布資料により学修内容を整理する。		
テキスト	犬井正著『エコツーリズムこころ躍る里山の旅ー飯能エコツアーに学ぶ』(丸善出版、2017年)		
参考文献	講義時に紹介。		
評価方法	定期試験の結果に(80%)によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績(20%)も評価対象とする。		

18年度以前	地誌学Ⅰ	担当者	大竹 伸郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的は地理的なものの見方や考え方を学ぶことで、自然環境の成り立ちやそれぞれの地域で育まれた文化と自然環境の関わりについて理解し、現代社会に関する基礎的な素養を身につけることである。</p> <p>講義では、現代社会の暮らしの基盤となっている地球の自然環境や各地域によって異なる人文現象（衣食住など）に焦点をあて、人の暮らしと自然の関わりについて講義するとともに、現代の社会生活が起因となっている世界規模の諸問題についても取り上げる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 我々の暮らしと自然環境 3 地球の成り立ちと地形 4 地球の周りの気団と気候 5 地球の植生と土壌 6 地球に暮らす様々な生き物 7 熱帯地域の人々の暮らしと文化 8 焼畑農業と熱帯の稲作 9 熱帯開発と環境問題 拡大する焼畑 10 熱帯開発と環境問題 進む違法伐採 11 乾燥帯地域の人々の暮らしと文化 12 一神教と自然環境 13 資源ナショナリズムの台頭 14 中東問題の遠因と現状 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には学修内容を復習する。		
テキスト	山本正三・犬井正他編『自然環境と文化』原書房		
参考文献	和辻哲郎『風土 人間学的考察』岩波書店		
評価方法	定期試験の結果に（80％）によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績（20％）も評価対象とする。		

18年度以前	地誌学Ⅱ	担当者	大竹 伸郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的は地理的なものの見方や考え方を学ぶことで、自然環境の成り立ちやそれぞれの地域で育まれた文化と自然環境の関わりについて理解し、現代社会に関する基礎的な素養を身につけることである。</p> <p>講義では、現代社会の暮らしの基盤となっている地球の自然環境や各地域によって異なる人文現象（衣食住など）に焦点をあて、人の暮らしと自然の関わりについて講義するとともに、現代の社会生活が起因となっている世界規模の諸問題についても取り上げる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 温帯地域の特徴と人々の暮らし 3 地中海性気候の人々の暮らしと文化 4 大陸西岸気候の人々の暮らしと文化 5 モンスーン気候の人々暮らしと文化 6 北米温帯地域の人々の暮らしと文化 7 ネイティブアメリカンの暮らしと文化 8 北方狩猟民族の暮らしと文化 9 寒帯地域の人々の暮らしと文化 10 山地地域の暮らしと文化 11 人口問題と食料 12 越境する大気汚染 13 グローバリゼーションの功罪 14 ファストファッションの光と影 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの指定された箇所を事前に精読する。授業後には学修内容を復習する。		
テキスト	山本正三・犬井正他編『自然環境と文化』原書房		
参考文献	和辻哲郎『風土 人間学的考察』岩波書店		
評価方法	定期試験の結果に（80％）によって評価するが、平常授業におけるレポートなどの実績（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	地誌学Ⅱ	担当者	浦部 浩之
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>地球上にいる人間の約8割は発展途上国に暮らしている。そして世界人口の約13%に当たる約9億人は、国際貧困ライン(1日1.9ドル)以下の生活を強いられている。我々は今この問題に正面から向き合わなければならない。たとえば、経済開発は重要だがそれを環境に負荷を与えずに行えるのか。市場経済と自由競争の社会で脆弱な貧困層にいかなる社会政策(教育・保健・福祉)を進めていけばよいのか。先進国による開発援助はいかにあるべきか。今日の新興国の成長は、国際関係の構図をいかに変えつつあるのか。</p> <p>本講義ではこうした現代世界における政治的・地理的課題について考え、それを通じて国際関係を見つめる視野を涵養することを目標とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 地球環境(1): 地球環境問題と南北対立 2. (2): 貧困と環境破壊 3. (3): 持続可能な開発の模索 4. (4): 地球温暖化問題と南北関係 5. 南の開発(1): 第三世界の独立と開発援助戦略 6. (2): ナショナリズムと格差の拡大 7. (3): 貧困と「人間開発」 8. (4): 国連の新しい開発戦略 9. 資源問題(1): 世界の食糧問題 10. (2): 水問題と砂漠化問題 11. (3): 人口増加とエネルギー問題 12. 新しい争点(1): 自然災害と防災 13. (2): 核拡散と原子力利用 14. (3): グローバル化と金融問題 	
到達目標	地誌学の知識と地誌学的な見方・考え方を習得し、特定の地域や都市の構造とそその変容を把握・分析のうえ、解説できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業効果を高めるための課題(基本事項の事前確認や文献の講読)について毎回指示する。		
テキスト	指定なし。		
参考文献	参考文献は授業で随時紹介する。		
評価方法	期末試験 100%(ただし公正な評価のためにその他の事項を加味する場合がある)。		

18年度以前	国際法Ⅰ	担当者	一之瀬 高博
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において国際法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際社会における法の規律のしかたとその特徴を、国際法上の主たる行為主体である国家を中心とした観点から学ぶ。また、海洋についての国際制度を概観する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 国際法の形成と発展 3 国際法の存在形態 4 条約法 5 国際法と国内法 6 国際法の基本的法原則 7 国際法における国家 8 主権免除 9 国家責任 10 外交関係法 11 沿岸国の権限が及ぶ海洋 12 国際公域としての海洋 13 地球環境の保全 14 講義のまとめ 	
到達目標	国際法の意義や基本的な考え方を正確に理解し、個別の事象について見解を示すことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストや参考文献等の指定された箇所を事前に精読しておくこと。 講義中の指示に従い、復習や課題作業を行うこと。		
テキスト	横田洋三編『国際社会と法』有斐閣 2010年。		
参考文献	『国際条約集』有斐閣 2019年。		
評価方法	期末試験の成績により評価し（70%）、課題レポート・小テストなどの成果および授業への参加度も評価対象にする（30%）。		

18年度以前	国際法Ⅱ	担当者	一之瀬 高博
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において国際法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際社会のさまざまな分野で発展しつつある国際法を概観するとともに、国際社会に生じる紛争が、集団安全保障や裁判を通じてどのように解決が図られているかについて考察する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 講義の概要 2 国際法と戦争の違法化 3 国連の集団安全保障 4 国連のもとでの武力行使に関する諸問題 5 平和的紛争解決と仲裁裁判 6 国際司法裁判所 7 国際機構 8 国際連合の設立と活動 9 国籍・外国人 10 難民・国際犯罪 11 国連による人権保障 12 人権条約 13 経済活動と国際法 14 講義のまとめ 	
到達目標	国際法に関する特定の事例、重要な判例、学説を正確に理解し、個別の事象について見解を示すことができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストや参考文献等の指定された箇所を事前に精読しておくこと。 講義中の指示に従い、復習や課題作業を行うこと。		
テキスト	横田洋三編『国際社会と法』有斐閣 2010年。		
参考文献	『国際条約集』有斐閣 2019年。		
評価方法	期末試験の成績により評価し（70%）、課題レポート・小テストなどの成果および授業への参加度も評価対象にする（30%）。		

18年度以前	英語通訳	担当者	矢田 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この授業では、通訳・翻訳とは如何なるものなのかを学びながら、言語や文化の相違を超えて私達の言語コミュニケーションは真に成立しうるのか、その対策を考えていきます。</p> <p>授業では、英語圏の文学、映画、演劇、著名人自伝の既存翻訳版を使い、英語と日本語の間にある言語文化や考え方の違いを踏まえながら、実際にどの様に翻訳されているのかを考察していきます。この授業は高い英語力を必要とします。英語が好きであることは最低条件であり、TOEICのスコアが550点以上であることが望まれます。</p>		<p>Week 1: イントロダクション「翻訳とは？」 「翻訳理論のはじまり：等価理論」</p> <p>Week 2: 翻訳理論 2「等価を考える 1」</p> <p>Week 3: 翻訳理論 3「等価を考える 2」</p> <p>Week 4: 翻訳理論 4「等価を考える 3」 実習「Pride and Prejudice」</p> <p>Week 5: 実習「ハムレット」 翻訳比較分析(1)</p> <p>Week 6: 実習「ハムレット」 翻訳比較分析(2)</p> <p>Week 7: 実習「ヒラリー・クリントン自伝『Living History』」(1)</p> <p>Week 8: 実習「ヒラリー・クリントン自伝『Living History』」(2)</p> <p>Week 9: 実習「TIME」を訳す(1) 時事問題に取り組む</p> <p>Week 10: 実習「TIME」を訳す(2) 要約と翻訳の違い</p> <p>Week 11: 実習「TIME」を訳す(3) 完全な訳はありえるか</p> <p>Week 12: 実習「BBC」(1) 時事問題と通訳</p> <p>Week 13: 実習「BBC」(2) 前週の問題点と改善について</p> <p>Week 14: プレゼンテーション</p>	
到達目標	英語通訳に必要な語彙や、基礎知識、基本スキルを習得し、英語通訳ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	教員から次週の授業のための準備をと指示がある場合は必ずしてくること。		
テキスト	教員がプリントを配布。		
参考文献	『翻訳学入門 (みすず書房)』、『翻訳の原理 (大修館書店)』、『高慢と偏見 (ちくま文庫)』		
評価方法	プレゼンテーション (50%)、授業参加度 (50%)		

18年度以前	英語通訳	担当者	矢田 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	社会経済史 a	担当者	新井 孝重
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>中世には「長者」という富裕な商人がいた。いまの経済学では、かれらのことを「前期的資本」と呼んでいる。かれらは都市と地方辺境を行き来して隔地間の交易に精を出していたが、その活動には人を騙すことなどが普通に含まれ、しばしば強欲な苛斂誅求の徒として民衆から憎まれた。本講座ではこうした人間について、尾張国の知多半島に住んだ「長者」長田忠致の観察を通して考えてみたい。</p> <p>(1) 平治の乱・源義朝逃走行 (2) 「長者」長田庄司忠致 (3) 「長者」の性格 (4) 始原的商業</p>		<p>① 平清盛と京都合戦（平治の乱） ② 青墓宿の遊女と源家重代の縁類 ③ 青墓と野間内海荘を結ぶもの ④ 義朝野間内海の忠致をたよる ⑤ 忠致親子義共を殺す ⑥ 長田忠致はどういう人間か 山椒太夫と類似 ⑦ 同情されない死 頼朝からの報復 ⑧ 民衆のルサンチマン（怨恨） ⑨ 「前期的資本」＝「長者」の性格 ⑩ 海上交通に足場を置く ⑪ 封建領土とどこが違うか ⑫ 生産の要素をもたない「不等価交換」 ⑬ 地方社会の高級工芸品 鎧甲冑など ⑭ 土地の特産性 甕壺陶器など 中世社会の流通脈管</p>	
到達目標	歴史学的観点から、社会と経済の関連性・関係性について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業関連事項を図書館で調べる。ノートに整理する。		
テキスト	新井孝重『中世社会史の原像（仮題）』（吉川弘文館より5月中旬に発刊されます）		
参考文献	新井孝重『楠木正成』（吉川弘文館）		
評価方法	試験成績(100%)による。		

18年度以前	社会経済史 b	担当者	新井 孝重
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>中世は人が生きる基盤の弱い時代であった。そのありさまを具体的に眺め、農耕だけでは生きられぬ人びとの生活を観察する。これまでの研究者は古代以来、土地に暮らす民衆をすべて「農民」とみていたが、それははたして正しいか。土地との関係の仕方や、自立の度合いから、初期の中世には「農民」の概念が成立しえないことを論ずる。</p> <p>(1) 慢性的な飢餓 (2) 脆弱な生産基盤 (3) 背反する二つの方向 (4) 民衆の結集と分散</p>		<p>① 飢饉は気象災害によるものか ② 停滞する人口 ③ 「土地」以前の経済 ④ 中世はどこから始まったか ⑤ 浮浪的労働者 ⑥ 「農民史観」と「非農業民史観」 ⑦ 中世の初めから農民はいたか ⑧ 底辺民衆は雑業で生きる ⑨ 生産の相対的安定化 ⑩ 「百姓」の登場 ⑪ ひととは社会的に分化する ⑫ 売買される「土地」の得分 ⑬ 「土地」所有は深化したか ⑭ 直接支配に対峙する十四世紀の民衆</p>	
到達目標	歴史学的観点から、社会と経済の関連性・関係性について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業関連事項を図書館で調べる。ノートに整理する。		
テキスト	新井孝重『中世社会史の原像（仮題）』（吉川弘文館より5月中旬に発刊されます）		
参考文献	新井孝重『楠木正成』（吉川弘文館）		
評価方法	試験成績(100%)による。		

18年度以前	社会思想史 a	担当者	犬塚 悠
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義の目的は、東洋という大きな文化圏の古代からの思想史を学ぶことによって、現代の日本における私たちの考え方や社会の特性への理解を高めることである。具体的に今学期は、日本にも大きな影響を及ぼした仏教と儒教が、それぞれインドと中国でどのように誕生しその後発展していったかを中心的に扱う。</p> <p>私たち自身の考え方や私たちが生きる社会の特性を自覚することは、国際社会において活躍する際に強みとなる。各文化の芸術作品が美というものを多様な形で表しているように、多様性があるからこそ互いを補い世界を豊かなものにできるという意識をこの講義を通して養ってほしい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション：本講義の見取り図 2. (インド) 古代インドの思想 3. (インド) 原始仏教1：釈迦 4. (インド) 原始仏教2：五蘊・縁起 5. (インド) 大乘仏教1：大乘経典 6. (インド) 大乘仏教2：中観派・唯識派 7. (チベット) チベット仏教 8. (中国) 諸子百家の登場 9. (中国) 孔子・儒教 10. (中国) 孟子・荀子 11. (中国) 朱子・王陽明 12. (中国) 墨子 13. (中国) 老子 14. (中国) 荘子 	
到達目標	主要な社会思想家や各種の社会思想について理解し、人生観、世界観を養い、社会を批判的に洞察できるようにする。		
事前・事後学修の内容	Porta で配布される資料、指示された参考文献をよく読むこと。		
テキスト	授業中に適宜指示する。		
参考文献	授業中に適宜指示する。		
評価方法	授業内小課題 (50%)、期末レポート (50%)。		

18年度以前	社会思想史 b	担当者	犬塚 悠
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義の目的は、東洋という大きな文化圏の古代からの思想史を学ぶことによって、現代の日本における私たちの考え方や社会の特性への理解を高めることである。具体的に今学期は、インドと中国で誕生した仏教・儒教等がどのように日本に影響を与えてきたか、古代から現代までの日本思想史を通して見ていく。</p> <p>私たち自身の考え方や私たちが生きる社会の特性を自覚することは、国際社会において活躍する際に強みとなる。各文化の芸術作品が美というものを多様な形で表しているように、多様性があるからこそ互いを補い世界を豊かなものにできるという意識をこの講義を通して養ってほしい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション：本講義の見取り図 2. 古代日本の宗教観・人間観 3. 仏教の受容、平安時代の仏教 4. 鎌倉時代の仏教 5. 江戸時代の儒教 6. 江戸時代の民衆の思想 7. 国学・神道・洋学・幕末の思想 8. 啓蒙思想、キリスト教、国粋主義 9. 人間解放の思想 10. 近代的自我：ロマン主義・理想主義の文学 11. 京都学派1：西田幾多郎 12. 京都学派2：和辻哲郎 13. 民衆の伝承と自然環境の保存 14. 戦後の日本の思想 	
到達目標	主要な社会思想家や各種の社会思想について理解し、人生観、世界観を養い、社会を批判的に洞察できるようにする。		
事前・事後学修の内容	Porta で配布される資料、指示された参考文献をよく読むこと。		
テキスト	授業中に適宜指示する。		
参考文献	授業中に適宜指示する。		
評価方法	授業内小課題 (50%)、期末レポート (50%)。		

18年度以前	外国経済史 a	担当者	御園生 眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>現代経済の起点であるイギリス産業革命を対象とし、その特徴と問題点を多面的に考察する。</p> <p>(注意事項)</p> <p>①最新のシラバスを第1回の授業で配布するので、履修希望者は必ず出席すること。</p> <p>②試験は定期試験期間中に持ち込み無し、論述問題で行う。</p> <p>③評価方法は、2年生、3年生、4年生ともに共通である。</p> <p>④この授業は、a,bの順番で履修することを前提としている。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス。序論：産業革命とは何か？ 2. 序論（続） 3. 産業革命の前提条件 (1)イギリス農業の発展 4. 産業革命の前提条件 (2)イギリス家内工業の発展 5. 技術革新と工場制生産の出現 6. イギリス綿工業の展開 7. 動力源の技術革新 8. 製鉄業の技術革新 9. 交通手段の技術革新：鉄道の出現 10. 企業家と事業形態 11. パートナーシップの特徴 12. イギリス産業革命と世界市場 13. イギリス貿易の動向 14. まとめ 	
到達目標	外国経済の歴史について専門知識を習得し、外国経済の成長過程やその要因等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介した参考文献を読む。 授業で学んだトピックの重要な点をまとめる。		
テキスト	第1回の授業で説明する。		
参考文献	第1回の授業で説明する。		
評価方法	定期試験の成績が90%、授業への参加度が10%の基準で評価する。		

18年度以前	外国経済史 b	担当者	御園生 眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>イギリスに遅れて産業革命を展開した後発国の事例としてドイツを取り上げ、ドイツ産業革命の特徴と問題点をイギリスと比較しつつ考察する。</p> <p>(注意事項)</p> <p>①最新のシラバスを第1回の授業で配布するので、履修希望者は必ず出席すること。</p> <p>②試験は定期試験期間中に持ち込み無し、論述問題で行う。</p> <p>③評価方法は、2年生、3年生、4年生ともに共通である。</p> <p>④この授業は、a,bの順番で履修することを前提としている。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス。序論：後発国産業革命の特徴と問題点 2. 序論（続） 3. 産業革命前夜のドイツ経済 4. 産業革命の前提条件の形成(1)プロイセン改革 5. 農業・土地制度の改革 6. 産業革命の前提条件の形成(2)ドイツ関税同盟の成立 7. プロイセン主導による関税同盟の形成 8. ドイツ産業革命の展開(1)綿工業 9. ドイツ産業革命の展開(2)製鉄業 10. ドイツ産業革命と産業技術教育 11. 技術教育の奨励政策 12. ドイツ産業革命と鉄道業 13. プロイセンの鉄道保護・育成政策 14. まとめ 	
到達目標	外国経済の歴史について専門知識を習得し、外国経済の成長過程やその要因等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介した参考文献を読む。 授業で学んだトピックの重要な点をまとめる。		
テキスト	第1回の授業で説明する。		
参考文献	第1回の授業で説明する。		
評価方法	定期試験の成績が90%、授業への参加度が10%の基準で評価する。		

18年度以前	経済学史 a	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要 近代自由主義社会の確立を基礎づけた 17 世紀の経済思想から 19 世紀末の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：経済学史とはどのような学問か 2. ロックとヒューム：市場社会の成立を支えた思想 3. フランソワ・ケネー：人類最初のエコノミスト 4. アダム・スミス (1)：分業論と自然価格論 5. アダム・スミス (2)：『国富論』における見えざる手 6. ベンサム：「最大多数の最大幸福」を夢みる功利主義 7. マルサス：市場社会における貧困と「人口の原理」 8. マルサスとリカード：「穀物法」論争 9. リカード：古典派経済学の体系化 10. 大陸の経済学者たち：セー、シスモンディエー、リスト 11. J. S.ミル：功利主義と古典派経済学の批判的統合 12. マルクス (1)：「労働の疎外」および経済学批判 13. マルクス (2)：「搾取」・「利潤」および「恐慌」論 14. まとめ：職業経済学者不在の成立期を振り返る 	
到達目標	経済学の形成過程を追体験することで経済理論への理解を深め、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回授業時に配布するプリントや次回の講義箇所の指摘等による教科書ないし参考文献の復習および予習		
テキスト	高哲男編『自由と秩序の経済思想史』名古屋大学出版会		
参考文献	根井雅弘『経済学の歴史』講談社		
評価方法	レポートと期末試験のいずれかあるいは両方を行い、学習の成果を示すそれら出来具合に基づいて（両方を行った場合は合算で 100%となる形で）評価する。		

18年度以前	経済学史 b	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要 19 世紀末の経済思想から、われわれの社会を支え、その将来を基礎づけるであろう今日の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：春季から秋季への橋渡し 2. グスタフ・シュモラー：新歴史学派の社会政策思想 3. カール・メンガー：主観主義のミクロ経済学 4. ジェヴォンズ：「快楽と苦痛の微積分学」 5. ワルラス：社会主義者による一般均衡理論 6. マーシャル (1)：古典派と新古典派の価値論の統合 7. マーシャル (2)：有機的成長論 8. ヴェブレン (1)：『有閑階級の理論』 9. ヴェブレン (2)：『営利企業の理論』 10. シュンペーター：企業者による創造的破壊の動学 11. ケインズ (1)：マクロ経済学の誕生と流動性選好説 12. ケインズ (2)：非自発的失業のマクロ的定義 13. ケインズ以降：新・旧・ポスト・ケインジアン、シカゴ学派、合理的期待形成学派、ハイエク etc. 14. まとめ：制度化された経済学の死角と経済学史の視角 	
到達目標	経済学の形成過程を追体験することで経済理論への理解を深め、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈について分析し、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回授業時に配布するプリントや次回の講義箇所の指摘等による教科書ないし参考文献の復習および予習		
テキスト	高哲男編『自由と秩序の経済思想史』名古屋大学出版会		
参考文献	根井雅弘『経済学の歴史』講談社		
評価方法	レポートと期末試験のいずれかあるいは両方を行い、学習の成果を示すそれら出来具合に基づいて（両方を行った場合は合算で 100%となる形で）評価する。		

18年度以前	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本国憲法の入門講義を行う。半期完結講義なので、ポイント的に日本の人権問題を扱うことになる。</p> <p>毎回、判例を読みながら、この国の人権状況を考えてみたい。</p> <p>指定した教科書の他、『六法』と判例は必ず持参すること。『六法』については初回、講義で説明する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 『六法』の使い方／憲法の意味 3. 憲法概念 4. 日本国憲法制定小史 5. 法の下での平等 6. 法の下での平等＋精神的自由：信教の自由 7. 精神的自由：信教の自由と政教分離 8. 精神的自由：学問の自由 9. 精神的自由：表現の自由／報道の自由 10. 精神的自由：表現の自由／プライバシーの権利 11. 人身の自由と被疑者の人権 12. 社会権：生存権 13. 社会権：教育権 14. 総評＋「法律学の答案の書き方」 	
到達目標	日本国憲法の入門的知識（人権に関する知識）を習得し、基本的人権の尊重に関して見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前：教科書を通読しておくこと。 事後：講義中あげた参考文献を下に「憲法復習ノート」を必ず作成すること。		
テキスト	加藤一彦『教職教養憲法15話 [改訂3版]』（北樹出版）		
参考文献	加藤一彦『憲法 [第2版]』（法律文化社）		
評価方法	定期試験：100%		

18年度以前	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	日本国憲法	担当者	L. ペドリサ
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>日本国憲法は生誕 70 年を迎えました。例えば、憲法改正の妥当性、国防と集団的自衛権の必要性、天皇の退位、ヘイトスピーチの規制など、最近、「憲法」に関するニュースや議論は、メディアの話題となっています。この講義では、日本国憲法にスポットライトを当てて、「憲法」という学問分野の基礎知識を身につけます。また、「日本国憲法」を一つのドキュメントとして一通り読むことは、この講義のもう一つ大きな目標です。授業は講義式で行います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の概要 2. 憲法とは 3. 日本憲法略史 4. 国民主権の原理 5. 天皇制 6. 平和主義 7. 立法の府：国会 8. 行政の府：内閣 9. 司法の府：最高裁判所と下級裁判所 10. 人権の歴史 11. 人権の主体と人権の限界 12. 自由権 13. 社会権 14. 参政権 	
到達目標	日本国憲法の入門的知識（人権に関する知識）を習得し、基本的人権の尊重に関して見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	毎回配布される講義ノートと資料を精読しておいてください。また、定期的に出される課題を解いて提出してください。およそ4時間分の学修時間になります。		
テキスト	毎回、講義ノートを配布します。		
参考文献	授業中に紹介。		
評価方法	定期試験 70%、小テスト・課題 30%		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

18年度以前	コンピュータ入門 a	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義では、コンピュータやネットワークに関連する基礎的な知識を学びます。そして、長いレポートの作成、データの集計および情報を相手に伝える際に必要となるソフトウェアであるワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの利用方法を、実習により身につけます。</p> <p>授業計画の項目が扱われる順序や時間配分は、担当教員により異なることがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. コンピュータサイエンスの基礎 2. インターネットの利用と注意点 3. ワードプロセッサの機能 4. ワードプロセッサ：図、表の作成 5. ワードプロセッサ：スタイル設定、数式の入力 6. 表計算ソフトの機能 7. 表計算ソフト：計算式（相対参照、絶対参照） 8. 表計算ソフト：関数 9. 表計算ソフト：グラフ、データの並び替え、目的データの抽出 10. 表計算ソフト：集計 1（ピボットテーブル、小計） 11. 表計算ソフト：集計 2（ヒストグラム、データテーブル） 12. プレゼンテーションソフトの機能 13. プレゼンテーションソフト：図表の挿入、SmartArt の利用、グラフの作成 14. プレゼンテーションソフト：スライドのデザイン、アニメーション 	
到達目標	一般的なコンピュータ知識、および、操作方法を習得し、学習等を行う際に活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	担当教員の指示にしたがって事前、事後の学修をおこなってください。		
テキスト	立田ルミ、今福啓、堀江郁美『実践に役立つ情報処理 2019 年度版』日経 BP 社		
参考文献	担当教員が指定します。		
評価方法	原則として担当教員が授業への貢献度（30%）と試験またはレポート（70%）を参考に、総合的に評価します。		

18年度以前	コンピュータ入門 b	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>表計算ソフトを有効活用すると、キャッシュフロー計算や制約のある問題のような、実社会で必要となる計算の答えを容易に求めることが可能となります。</p> <p>また自分で分析して求めた情報を発信するには、ネットワークを活用することが不可欠です。講義では、そのために必要となる Web ページの構成、HTML、CSS と、コンピュータ言語の基礎について学習します。</p> <p>授業計画の項目を扱う順序、時間配分および使用するコンピュータ言語は、担当教員により異なることがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 表計算ソフト応用：複利計算 2. 表計算ソフト応用：預金の積立 3. 表計算ソフト応用：ローン返済計画 4. 表計算ソフト応用：What-If分析による利子の計算 5. 表計算ソフト応用：ソルバーによるローン返済 6. 表計算ソフト応用：年金の積立 7. 表計算ソフト応用：効率的な作業配分：0-1整数計画問題 8. 表計算ソフト応用：資源の有効活用：線形計画問題 9. Web ページ作成：Web ページの構成 10. Web ページ作成：HTML と CSS 11. プログラミング言語：プログラミングの第一歩 12. プログラミング言語：命令の種類 13. プログラミング言語：関数 14. プログラミング言語：プログラム作成 	
到達目標	一般的なコンピュータ知識、および、操作方法を習得し、学習等を行う際に活用できるようにする。		
事前・事後学修の内容	担当教員の指示にしたがって事前、事後の学修をおこなってください。		
テキスト	立田ルミ、今福啓、堀江郁美『実践に役立つ情報処理 2019 年度版』日経 BP 社		
参考文献	担当教員が指定します。		
評価方法	原則として担当教員が授業への貢献度（30%）と試験またはレポート（70%）を参考に、総合的に評価します。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	生涯学習概論	担当者	阪本 陽子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>私たちは、その成長・発達に応じて、人間として学ぶべき課題を持っています。また、少子高齢化、都市化、国際化など、社会の様々な変化に対応した学習が絶えず求められています。生涯学習は、私たちの教育や学習に対する考え方を大きく転換させ、現代社会のなかで重要な意味を持っています。</p> <p>本講義では、生涯学習に関する基本的な考え方を学ぶとともに、生涯学習社会における家庭教育、学校教育、社会教育の在り方や、現代社会と生涯学習の関わりについて考えます。</p> <p>受講生の人数にもよりますが、講義形式だけでなく、様々な学習方法を体験する演習を取り込みながら授業を進めていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 生涯学習を学ぶ意義 2. 人間の形成・発達と学習 3. 社会の変化と学習 4. 生涯学習の理念とその背景 5. 生涯学習の学習論 6. 生涯学習と家庭教育 7. 生涯学習と学校教育 8. 生涯学習と社会教育 9. さまざまな学習方法を体験する① —演習：参加型学習の基礎— 10. さまざまな学習方法を体験する② —演習：答えを求める話し合い— 11. さまざまな学習方法を体験する③ —演習：発展を生み出す話し合い— 12. 学習形態・技法と学習支援者の役割 13. 生涯学習施設の機能と役割 14. まとめ 生涯学習行政・生涯学習社会の現状と課題 	
到達目標	生涯学習に関する基本的な考えを理解し、生涯学習社会における学校教育、社会教育、家庭教育のあり方や、現代社会と生涯学習の関わりについて分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	身近な生涯学習施設を訪れるなど、地域の教育事業に実際に関わりながら受講してください。また、授業で配布する資料を熟読し、次回で自分の考えを述べられるように準備してください。		
テキスト	テキストは使用しません。レジュメ等、資料を配布して授業を進めます。		
参考文献	授業中、トピックに合わせて紹介します。		
評価方法	70%以上の出席を学期末レポートの提出資格とします。講義中の課題と参加態度（30%）、学年末レポート（70%）を総合的に評価します。		

12年度以降	図書館概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(目的・ねらい) 図書館の意義や活動目的や機能、民主社会における社会的使命などについて把握する。</p> <p>(講義概要) 図書館の機能と役割の基本については把握し、さらに司書資格を有する専門職となるために詳しく学習する。図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。</p> <p>司書課程のなかでは入門科目になる。</p>		<p>(1) はじめに。図書館とはなにか</p> <p>(2) 図書館の構成要素と機能。図書館の社会的意義</p> <p>(3) 図書館の法的基盤と図書館政策</p> <p>(4) 知的自由と図書館</p> <p>(5) 「図書館の自由に関する宣言」と「図書館員の倫理綱領」</p> <p>(6) 図書館の歴史</p> <p>(7) 地域社会と公共公立図書館の役割。利用者のニーズ</p> <p>(8) 学校図書館の現状と公共図書館との連携</p> <p>(9) 大学図書館の現状と課題</p> <p>(10) 専門図書館の現状と課題</p> <p>(11) 国立国会図書館の役割と機能</p> <p>(12) 私立図書館や図書館類縁機関と現状と課題</p> <p>(13) 図書館員の役割と資質。専門職の教育・研修。その現状と課題</p> <p>(14) 国際社会での図書館活動。図書館の課題と展望</p>	
到達目標	図書館に関する概論的知識を習得し、図書館の意義や使命、図書館の種別と役割、図書館の法的存在基盤や図書館政策、図書館司書の役割や使命などについて分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの当該学修単元にあたる章を読んでおくこと。		
テキスト	『図書館概論 五訂版』 日本図書館協会・刊 2018年12月		
参考文献	『図書館ハンドブック 第6版補訂2版』 日本図書館協会・刊 2016年		
評価方法	小課題 30%、期末試験 70% 無断欠席 1/3以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護等体験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館情報技術論	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 現代の図書館では、情報や資料の収集・組織化・保存・提供というあらゆる場面において、コンピュータやネットワークを中心としたさまざまな情報技術が利用されている。本講義では、それらの情報技術について、基礎的な概念を理解した上で、図書館においてどのように応用されているかを学習する。</p> <p>【概要】 図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するために、コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説する。また各種情報システムを実際に利用する演習も行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス；身の回りの情報技術：獨協大学のコンピュータとネットワーク 2. コンピュータとネットワークの基礎 3. 情報技術と社会：身の回りの情報メディア 4. インターネットとウェブ 5. ウェブの基本技術：HTTP、URI (URL)、HTML 6. ウェブによる情報の発信 7. 図書館における情報技術活用の現状 8. 図書館業務システムの仕組み 9. データベースの仕組み 10. 検索エンジンの仕組み(1)：情報の収集、索引作成 11. 検索エンジンの仕組み(2)：結果の並べ替え 12. 電子資料とコンピュータシステムの管理 13. デジタルアーカイブ 14. 最新の情報技術と図書館；授業全体のまとめ（質疑応答を含む） 	
到達目標	図書館の業務・サービスに必要な基礎的な情報技術を習得し、これらを図書館実務において実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館情報技術論	担当者	堀江 郁美
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館に係る情報技術の理論を学び、実習する。今日、図書館では図書資料の管理だけでなく、さまざまなサービスを提供するために情報技術を用いている。また、電子図書館、電子書籍の出現など今後も情報技術との関連は深くなると考えられる。この授業では、コンピュータやインターネットの仕組みなどコンピュータの基礎や、情報検索に係る基礎理論と現状を学習し、実習する。最終的には、図書館利用者、スタッフの両視点から、現在、そして今後も通用する情報技術を習得することを目的とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館の役割と歴史 2. 情報技術と図書館 3. コンピュータの仕組みと歴史 4. ネットワークの基礎知識 5. インターネットを利用した情報の発信 6. インターネットを利用した情報の発信：実習 7. 電子文書と電子出版、電子書籍 8. 図書館システム 9. 図書館のサービスとデータベース 10. ネットワーク情報資源とメタデータ 11. ネットワーク情報資源の利活用 12. 図書館システムの安全性と信頼性 13. ネットワーク社会の中での図書館サービス 14. まとめ 	
到達目標	図書館の業務・サービスに必要となる、基礎的な情報技術を習得し、これらを図書館実務において実践できるようにする。		
事前・事後学修の内容	事前：テキストや与えられた資料を精読すること。 事後：授業内容を復習すること。		
テキスト	現代図書館情報学シリーズ3『図書館情報技術論』高山正也、植松貞夫監修 杉本重雄編集、樹村房		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業態度(20%)、定期試験(60%)、レポート(20%)を基本に、総合的に評価する。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館制度・経営論	担当者	小池 信彦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館の制度設計の原則を理解したうえで、公共サービスとしての経営の実態をいくつかの事例から検討し、経営手法等について学ぶ。 講義とグループによる検討と発表を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1 図書館の意義 2 図書館法 3 図書館関連法規 4 事例研究1 法令等解釈 5 図書館政策の動向 6 公共機関・施設の経営方法 7 事例研究2 制度設計及び政策 8 図書館の組織・職員 9 図書館の施設・設備 10 図書館サービス計画 11 図書館業務・サービス調査と評価 12 図書館の管理形態の多様化 13 事例研究3 図書館の運営を考える 14 事例研究4 図書館を始めるには 	
到達目標	公共図書館や学校図書館など、各種図書館の制度・経営に関する知識・技能を習得し、公共図書館の事業計画を策定・評価できるようにする。		
事前・事後学修の内容	新聞や雑誌で報道される図書館に関連する事例を読んでおく。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に配布。		
評価方法	授業参加及びグループによるプレゼン 60%、各自の課題 40% 1/3 以上の無断欠席及びプレゼン等のチームワーク欠席は授業放棄とみなす。		

12年度以降	図書館サービス概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>公共公立図書館(公共図書館と公立図書館)を中心として、その図書館活動の実務を理解し、情報資料・人的資源の効率よい図書館活動とは何か、図書館活動に関わる組織・管理・運営、各種計画などについて理解する。また、その活動評価についても考えていく。特に、利用者と直接関わる図書館サービスの意義、特質、方法について解説するとともに課題解決支援、障害者支援、高齢者・未成年者向け支援、多文化サービスなど各種サービスの特質を明らかにする。利用者への直接支援活動として、担当者の接遇や利用者やボランティアとのコミュニケーション等の基本について学習する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> (1) はじめに。図書館サービスの意義と考え方、変遷など (2) 来館者へのサービス。貸出、利用援助など (3) 資料提供の基礎；場所としての図書館 (4) 資料提供の展開；貸出、予約など (5) 資料提供の展開；プロモーション活動 (6) 情報提供；利用者のニーズへの対応、レファレンス・サービス等 (7) 集会・文化活動、行事など (8) 障がい者、障がい児への支援活動 (9) 高齢者、未成年者、外国人への支援活動。多文化サービス (10) 地域社会への支援活動；課題解決支援、ビジネス支援 (11) 図書館マーケティング活動；利用者の交流の場としての図書館 (12) 図書館経営；図書館サービスとマネジメント (13) 図書館サービスと著作権 (14) 人的資源；接遇、コミュニケーションなど。まとめ 	
到達目標	図書館サービス全般についての概論的知識を習得し、公共図書館などにおける実務、効率的な図書館活動や図書館活動に関する諸問題について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの当該学習単元にあたる章を読んでおくこと。図書館に関する新聞・雑誌記事を読んでおくこと。		
テキスト	『図書館サービス論』日本図書館協会・刊 2010年		
参考文献	『図書館ハンドブック 第6版補訂2版』日本図書館協会・刊 2016年		
評価方法	小課題 30%、期末試験 70% 無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護等体験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報サービス論	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、各種検索サービス等、さまざまなサービスが含まれる。本講義ではこの情報サービスに関する概念の総合的な理解を目指す。</p> <p>【概要】まず、図書館における情報サービスの意義を明らかにし、レファレンスサービスや情報検索サービス等の各種情報サービスの方法を概観する。また、情報サービスにおいて利用される情報源について解説する。そして、図書館利用教育や発信型情報サービス等の新しいサービスについて論じる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス；身の回りの情報サービス：獨協大学図書館の情報サービス 2. 情報社会と図書館の情報サービス 3. レファレンスサービス 4. 利用案内、レフェラルサービス 5. カレントアウェアネスサービス 6. 情報検索サービス 7. 発展的情報サービス（読書相談、図書館利用教育等） 8. 情報サービスの意義と種類のまとめ（質疑応答を含む） 9. 情報サービスで用いる情報源の特質と利用法 10. 情報サービスで用いる情報源の解説、評価、組織化 11. レファレンスサービスの理論（利用者の情報行動、レファレンスプロセス、事例の活用、組織と担当者、サービス評価等） 12. レファレンスサービスの実際（レファレンスサービスの体制づくり・実施・普及、現状と問題点等） 13. 最新の情報サービス 14. 授業全体のまとめ（質疑応答を含む） 	
到達目標	レファレンスサービスや情報検索サービスなどの図書館における情報サービスの意義と方法に関する知識を習得し、図書館情報サービスのあり方について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	指示された情報源については、次回までに入手／アクセスし、参照しておくこと。 また、前回の授業中に赤や青の文字で示されたキーワードの意味を説明できるように復習しておくこと。		
テキスト	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
参考文献	適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		
評価方法	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	児童サービス論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>目的（ねらい）： 子どもやヤングアダルトと称せられる10代の図書館利用者に対する戦略的で効果をあげるべき図書館プログラムを企画・実施し、評価に耐えうる内容を考えられる図書館専門職としての児童担当司書・YA担当司書を養成することを当該科目の目的とする。さらに幅広く、多くの児童書やYA向け資料を読み、評価し、子どもたちに伝えられる手法を把握することを目標とする。</p> <p>概要： (1) 図書館サービス対象者である子どもやヤングアダルト(10代)について知る。 (2) 図書館資料としての子どもやYA向け資料について知る。 (3) 図書館サービスとして子どもやYAと資料とを結びつける活動の企画や実施、評価方法について知る。 (4) 地域や学校などとの協働活動について知る、ことを学習する。</p>		<p>(1) 図書館の意義と使命。民主主義社会・地域社会と図書館の役割。図書館サービスとは何か。児童・YA向け図書館サービスとは何か。 (2) サービス対象者の把握 (3) 子どもの発達と読書。読書と「読・書」 (4) 図書館資料；資料選択のポイント(フィクション) (5) 図書館資料；資料選択のポイント(ノンフィクション、知識の本、学習資料など) (6) 児童・YAサービスの業務 (7) 乳幼児～小学校など就学児童対象の図書館サービス (8) 実習(絵本の読み聞かせ) (9) 中高生等YA対象の図書館サービス (10) 学習支援、情報提供・資料提供、探究学習や課題解決型学習の支援 (11) 実習(ブックトーク) (12) アウトリーチ・サービス(学校・学校図書館との連携、特別支援の必要な子どもたちへのサービス、地域との連携など) (13) 子どもたちの知的自由と図書館活動をめぐる諸問題 (14) 実際の図書館活動推進のための企画・立案、年間計画策定など</p>	
到達目標	児童や10代の図書館利用者（潜在的利用者含む）を専門に担当する司書に必要な知識を習得し、それらの人々を対象とした図書資料収集やサービス活動に関して計画を立案できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの当該学習単元にあたる章を読んでおくこと。0～18歳向け絵本・児童書等の定番の資料を読みなおしておくこと。		
テキスト	『児童サービス論』日本図書館協会・刊 2014年		
参考文献	『図書館ハンドブック 第6版補訂2版』日本図書館協会・刊 2016年		
評価方法	課題 70%、試験 30% 無断欠席 1/3以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護体等験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報サービス演習（前半）	担当者	高田 淳子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義目的】</p> <p>利用者の情報要求を把握し、適切な情報提供ができるよう、レファレンスサービス及び発信型情報サービスの実践的能力の育成を図る。</p> <p>【講義概要】</p> <p>レファレンスサービスの具体的な方法、インターネット情報やレファレンスブック（参考図書）について、事例を参考にしながら解説する。具体的な課題に取り組み、自らの調べものの役に立つ検索方法も身につけられるようにすすめる。多様な情報源を複合的に組み合わせ、適切な回答を見出し、的確に伝えられるよう、発表も含む演習を行う。</p> <p>情報サービス演習（前半）では、情報検索とレファレンスサービスの基本を中心に学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業について、レファレンスサービスとは 2. 情報サービスの設計と評価 3. レファレンスプロセスとインタビュー 4. レファレンス回答と記録 5. レファレンス事例集 6. レファレンスサービスと情報源 7. インターネット情報検索の基本 8. インターネット情報検索の実践 9. レファレンスブック：百科事典・専門事典 10. レファレンスブック：図書・言葉・事柄 11. レファレンスブック：歴史・地理・人物 12. レファレンスサービスの案内：企画 13. レファレンスサービスの案内：作成 14. レファレンスサービスの案内：発表・まとめ 	
到達目標	レファレンス・ワークの実践を通じて、レファレンス・インタビューにおける利用者との適切なコミュニケーション、利用者の要望把握、利用者の求めに応じた資料や情報の提供、および課題解決のための企画提案等ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介するインターネット情報源は実際にアクセスし、紙媒体のレファレンスブックや参考文献は図書館等で直接見て、知識と理解を深めるようにする。		
テキスト	特に指定しない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度（30%） 演習レポート（30%） 期末レポート（40%） ※評価の前提として、出席は全授業回数の3分の2以上とする。		

12年度以降	情報サービス演習（後半）	担当者	高田 淳子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義目的】</p> <p>利用者の情報要求を把握し、適切な情報提供ができるよう、レファレンスサービス及び発信型情報サービスの実践的能力の育成を図る。</p> <p>【講義概要】</p> <p>レファレンスサービスの具体的な方法、インターネット情報やレファレンスブック（参考図書）について、事例を参考にしながら解説する。具体的な課題に取り組み、自らの調べものの役に立つ検索方法も身につけられるようにすすめる。多様な情報源を複合的に組み合わせ、適切な回答を見出し、的確に伝えられるよう、発表も含む演習を行う。</p> <p>情報サービス演習（後半）では、多様な情報源を複合的に組み合わせた主題別の調べ方と、発信型情報サービスを中心に学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業について、図書館と情報リテラシー 2. 図書情報を探す 3. 新聞・雑誌情報を探す 4. データベースの検索と活用 5. 「調べ方」を調べる 6. パスファインダーをWebで探す 7. 情報検索の参考になるWebサイト 8. 法律情報を調べる 9. ビジネス情報を調べる 10. 健康情報を調べる 11. 発信型情報サービス 12. パスファインダー：企画 13. パスファインダー：作成 14. パスファインダー：発表・まとめ 	
到達目標	レファレンス・ワークの実践を通じて、レファレンス・インタビューにおける利用者との適切なコミュニケーション、利用者の要望把握、利用者の求めに応じた資料や情報の提供、および課題解決のための企画提案等ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業で紹介するインターネット情報源は実際にアクセスし、紙媒体のレファレンスブックや参考文献は図書館等で直接見て、知識と理解を深めるようにする。		
テキスト	特に指定しない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度（30%） 演習レポート（30%） 期末レポート（40%） ※評価の前提として、出席は全授業回数の3分の2以上とする。		

12年度以降	図書館情報資源概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>図書館で所蔵される資料の種別と選択、保存と更新、さらに電子資料やネットワーク情報源などの幅広い資料について理解し、図書館および資料に関する基本的な専門用語について理解して説明でき、また、図書館資料の現状と課題について知識があり、それらについて自分の考えを述べるができるようになることを目標とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> (1) 図書館資料の定義。印刷資料メディアの種類と特質 (2) 非印刷資料メディアの種類と特質 (3) 電子資料メディアの種類と特質 (4) 特殊資料や専門資料メディアの種類と特質 (5) 地域資料、行政資料、灰色文献など (6) 人文科学・社会科学分野の基本的資料／自然科学・技術分野の基本的資料 (7) 出版・流通・販売に関する基本的知識 著者と著作権 (8) 図書館における知的自由、検閲と焚書 (9) 図書館資料コレクション選択方針・基準 (10) 図書館資料コレクション選択理論 (11) コレクション形成方針策定 (12) コレクション形成方針の実例 (13) コレクション形成の実務 (14) メディア転換と資料の保存・廃棄・更新 	
到達目標	図書館実務についての概論的知識を習得し、理論的な図書館資料の種別や選択、資料構築方針に基づく資料の保存・更新ができるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの当該学習単元にあたる章を読んでおくこと。市立図書館や県立図書館などできるだけ多くの図書館を見学してどのような資料が書架に並べられているか確認しておく。		
テキスト	『図書館情報資源概論 新訂版』日本図書館協会・刊 2018年11月		
参考文献	『図書館ハンドブック 第6版補訂2版』日本図書館協会・刊 2016年		
評価方法	小課題 30%、期末試験 70% 無断欠席 1/3以上で受講放棄とみなします。教育実習・介護等体験は欠席届を提出すること。これら以外の欠席は自己管理範囲内とします。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12 年度以降	情報資源組織論	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>図書・逐次刊行物など多様な図書館情報資源の組織化の理論と技術について概説し、情報資源組織演習での学習に備える。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>書誌コントロール、書誌記述法、分類法、主題分析などについての基礎知識を修得する。ネットワーク情報資源など多様な情報資源の組織化、書誌データの活用法を解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス・情報資源組織化とは 2. 目録の意義と種類 3. 集中目録作業 4. 共同目録作業 5. 目録規則の歴史 6. NCR1987 3Rの概要 7. 次世代目録 8. 分類法の概要と種類 9. 分類法の歴史 10. NDC10の概要 11. 図書記号 12. 主題目録法 13. 書誌コントロール 14. 授業のまとめ 	
到達目標	図書館における情報資源組織化の意義を理解し、また、図書館の資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）に関する知識を習得し、資料を分類整理のうえ管理できるようにする。		
事前・事後学修の内容	授業中配布のプリントで提示した参考文献などを閲覧することが望ましい。		
テキスト	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
参考文献	『日本十進分類法. 新訂10版』、『基本件名標目表. 第4版』、『日本目録規則. 1987年版改訂3版』（いずれも日本図書館協会編・刊）		
評価方法	期末試験の結果（80％）によって評価するが、平常授業における参加度（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	情報資源組織演習（前半）	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>図書館情報資源の組織化について学習する。演習形式の授業を通じて、情報資源組織化の具体的・実践的な能力の養成をはかる。情報資源組織演習（前半）では、日本目録規則（NCR）1987年版改訂3版に準拠して、目録作成の技法を学ぶ。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>NCR 1987年版改訂3版の主要規則を書誌的事項ごとに解説する。その上で、NCR1987 3Rによる和資料記入の作成を中心に演習を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス 2. 日本目録規則（NCR）記述総則 3. 日本目録規則（NCR）記述通則 4. タイトルに関する事項 5. 責任表示に関する事項 6. 版に関する事項 7. 出版・頒布等に関する事項 8. 形態に関する事項 9. シリーズに関する事項 10. 注記に関する事項 11. 標準番号・入手条件に関する事項 12. 標目 13. 和資料記入の作成演習（基礎） 14. 和資料記入の作成演習（応用） 	
到達目標	図書館資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）について演習し、パスファインダーやビブリオグラフィーを作成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	ほぼ毎回実施する目録作成の問題を、正確に記述すること。		
テキスト	日本図書館協会編『日本目録規則 1987年版改訂3版』（日本図書館協会、2006年）		
参考文献	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
評価方法	演習（小テスト）の結果（80%）によって評価するが、平常授業における参加度（20%）も評価対象とする。		

12年度以降	情報資源組織演習（後半）	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的</p> <p>情報資源の組織化に関する技術について、演習形式で学習する。多様な情報資源に関する書誌データの作成、主題分析、分類作業、統制語彙の適用などの演習を通じて、情報資源組織業務についての実践的な能力を養成する。</p> <p>○ 講義の概要</p> <p>NDC10の概要・分類規程を解説した上で、NDC10による分類記号の付与の演習を行う。次にBSH4の概要・件名規程を解説した上で、BSH4による件名付与の演習を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明・日本十進分類法（NDC）新訂10版の概説 2. 分類規程 3. 主題分析 4. 分類記号の付与 1類・2類 5. 分類記号の付与 3類 6. 分類記号の付与 4類・5類 7. 分類記号の付与 6類・7類 8. 分類記号の付与 8類・9類 9. 分類記号の付与 0類・応用問題 10. 基本件名標目表（BSH）の概説 11. 件名規程 12. 件名標目の付与（基礎） 13. 件名標目の付与（応用） 14. 件名標目の付与（発展） 	
到達目標	図書館資料やインターネット情報へのアクセスを可能とする情報資源の組織化（記述目録、主題目録、メタデータ）について演習し、パスファインダーやビブリオグラフィーを作成できるようにする。		
事前・事後学修の内容	ほぼ毎回実施する分類記号の付与・件名標目の付与の問題を、よく考えて解くこと。		
テキスト	『日本十進分類法 新訂10版』、『基本件名標目表 第4版』（いずれも日本図書館協会編・刊）		
参考文献	田窪直規編『情報資源組織論』（樹村房、2015年、現代図書館情報学シリーズ9）		
評価方法	演習（小テスト）の結果（80%）によって評価するが、平常授業における参加度（20%）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館基礎特論	担当者	竹内 ひとみ
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「図書館概論」「図書館情報資料概論」「図書館サービス論」などの内容をふまえ、図書館活動のなかで話題となったり、議論となったりしたことをテーマとしてとりあげていく。テーマごとに日本と海外と比較して、各自の調査を報告発表することで国際的視野にたった図書館資料についての議論点を整理できるようになることを目標とする。</p> <p>国際比較を行うことで、日本の図書館サービスの是非を考えていくが、事例研究として、国あるいは地域をとりあげ、さらに多様な事例をテーマとしてあげつつ、演習を中心として学習する。また、講義よりもグループでの議論を中心にすすめていく。個人での調査研究にもとづいた発表報告と、その内容に関連して教室でグループ議論していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館種別からみた図書館サービスや資料構築の概観と変化 2. 図書館資料の変化 3. 国あるいは地域ごとの出版状況・識字/教育状況の把握 4. 事例研究（受講生の報告発表） 5. 図書館資料の背景－著作権法など 6. 国あるいは地域ごとの社会と法律 7. 事例研究（受講生の報告発表） 8. 図書館資料の提供－表現の自由と知的自由 9. 国あるいは地域ごとの社会状況 10. 事例研究（受講生の報告発表） 11. 図書館資料の提供－社会での課題/利用者 12. 事例研究（受講生の報告発表） 13. 国際組織の活動 14. 受講生による報告発表 	
到達目標	司書課程の必修・基礎科目で学んだ領域について、応用的な知識・技能を習得し、図書館に関する特定課題について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	学修の内容 受講生各自で国あるいは地域を選んで図書館に関する状況を調べておくこと。		
テキスト	指定しません。		
参考文献	最初の授業で参考文献リストなど探索ツール等を配布します。		
評価方法	授業参加（発表・報告）50%、最終課題報告 50%、無断欠席 1/3 以上で受講放棄とみなす。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

12年度以降	図書館サービス特論	担当者	高田 淳子
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【講義目的】</p> <p>学校図書館職員（学校司書等）として、情報リテラシーの育成や読書を支援できるよう学校図書館の概要について理解する。</p> <p>居心地よく、調べやすい学校図書館をつくるために必要な知識や業務の実際について学ぶ。</p> <p>【講義概要】</p> <p>学校図書館の概要、基本的な知識や業務の実際について解説する。講義だけではなく、学校図書館のあり方やサービスの方法について自ら考察し、コミュニケーション能力の向上が図れるよう、演習やグループワーク、発表を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、学校図書館の現況 2. 学校図書館の役割と職員 3. 学校図書館の施設と環境づくり、合理的配慮 4. 学校図書館メディアの構築と活用 5. 学校図書館と情報リテラシーの育成・支援 6. 学校図書館のレファレンスサービス 7. 授業や行事との協同・支援 8. 公共図書館や類縁機関等との連携 9. 学校図書館の展示・広報・イベント 10. 学校図書館のネットワーク 11. 学校図書館の年間計画 12. 学校図書館の利用案内とオリエンテーション：企画 13. 学校図書館の利用案内：作成 14. 学校図書館の利用案内：発表・まとめ 	
到達目標	図書館サービスに関して専門的な知識・技能を習得し、図書館活動をより発展させる方策等について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	学校教育や学校図書館関連の新聞記事等を見るようにする。身近な大学や公共図書館を利用し、学校図書館の運営やサービス方法のヒントを把握する。		
テキスト	特に指定しない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度（30％） 演習レポート（30％） 期末レポート（40％） ※評価の前提として、出席は全授業回数の3分の2以上とする。		

12年度以降	図書・図書館史	担当者	小黒 浩司
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>○ 講義の目的 図書館の情報資源と図書館の歴史について発展的に学習し、理解を深める。</p> <p>○ 講義の概要 図書をはじめとする各種図書館情報資源の形態、生産、印刷、普及、流通などの歴史を概説する。また、図書館の歴史的発展について解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス・歴史的図書館建築 2. 図書館の源流 3. 紙以前の記録媒体 4. 紙の発明と西伝 5. 図書の形態史 6. 図書館の発達 7. 印刷の歴史 8. 印刷技術の進歩 9. 大量印刷の時代 10. 公共図書館の誕生 11. 雑誌・新聞の歴史 12. マスメディアの誕生 13. 記録媒体の多様化 14. 授業のまとめ 	
到達目標	図書および図書館の歴史について知識を習得し、図書の歴史や情報変遷史、時代や社会の変化に連動した図書館の変遷について分析のうえ、見解を提示できるようにする。		
事前・事後学修の内容	テキストの該当ユニットを読んでおくことが望ましい。		
テキスト	小黒浩司編著『図書・図書館史』（日本図書館協会、2013年、JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ）		
参考文献	特になし。		
評価方法	期末試験の結果（80％）によって評価するが、平常授業における参加度（20％）も評価対象とする。		

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
到達目標			
事前・事後学修の内容			
テキスト			
参考文献			
評価方法			

シラバス 免許及び資格課程

2019年4月1日発行

獨協大学教務課

〒340-0042 埼玉県草加市学園町1-1

電 話 048-946-1663



DOKKYO UNIVERSITY

学 科	学年	氏 名
学科	年	